

鹿児島県史料

旧記雑録附録一

題
字

鎌 鹿
田 児
要 島
人 県
事

例 言

一 本書は、東京大学史料編纂所所蔵の島津家本（伊地知季安・季通自筆原本）「附録舊記雜錄」を底本とし、卷一から卷十二までを収めて、「鹿児島県史料旧記雜錄附録一」として刊行するものである。本書に収載した文書は年間不詳である。

一 収載された文書を、原文書や影写本等によって修正または補充する場合には次のようにした。

ア 修正される箇所は「ハ」で囲み、その右側に修正字句を記した。

イ 補充部分は「Δ」で示し、挿入にはくの記号を使用した。

ウ 修正や補充の典拠は次に掲げる記号で示した。

阿多文書 ㊦

入来院氏文書 ㊧

鎌田文書 ㊨

清色龜鑑 ㊩

島津家重書 ㊪

島津氏世録支流系図樺山氏 ㊫

島津氏世録支流系図喜入氏 ㊬

指宿文書 ㊭

樺山家文書 ㊮

旧記雜錄同一文書 ㊯

霧島神宮文書 ㊰

島津氏世録正統系図 ○

島津氏世録支流系図川上氏 ㊱

島津氏世録支流系図忠良 ㊲

島津氏世録支流系図歳久 ㉔

島津氏世録支流系図新納氏 ㉕

島津氏世録支流系図北郷氏 ㉖

島津氏世録支流系図山田氏 ㉗

末川家文書 ㉘

諏訪家文書 ㉙

伝家亀鏡 ㉚

新田八幡宮文書 ㉛

新納家文書 ㉜

新納文書 ㉝

衾寝文書 ㉞

原田トシ子氏所蔵文書 ㉟

藤野文書 ㊱

北郷文書 ㊲

本田文書 ㊳

町田氏正統系譜 ㊴

山田文書 ㊵

一 文書・記録・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に付した。重出する文書にも番号を付し、重出の旨を注記して本文を省略した。

一 文書・記録・記事の内容が数種にわたる場合には、小番号を付した。

一 本文の後に文書目録ならびに花押一覧をかかげた。

一 刊行にあたって文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。

ア 文書の所在などを示す原注は一字下げて首部におき、この原注や文書中の異筆・補筆は、原則として「」(墨書)、『』(朱書)で囲んだ。尚、重複・煩瑣にわたるものは、これを省略した。また、前・後編附録所収の同一文書より原註を引用する場合には「」を附した。

イ 合点は、頭または右肩に「――」（墨）、「……」（朱）で示した。

ウ 文書の年月日・差出書・宛所の位置などは、底本の体裁にあわせてある程度の統一をした。

エ 書状の封じ目は、「――」・「――」・「――」・「――」を用いた。

オ 文書・記録・記事には、適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

一 原文の磨滅虫損は、字数を推して□又は□を以て示し、墨抹等により解読困難な字は■又は■を以て示した。

一 見せ消しは、その文字の左側に「ミ」を加えて、右側に書き改めた文字を記した。

一 頭注や行間の書きこみは、底本の体裁にあわせたが、頭注の長い場合はその位置を示し、関連箇所の文末にまとめた。

一 編者の付した注は、原注と区別するために（ ）で囲んだ。

一 原文中の返り点や送り仮名などは原則として省略し、仮名文書に付されていた底本の原注は、一部を残して省略した。

一 欠字・平出・台頭などは、原則として底本の体裁に従った。

一 漢字は一部の異・略・俗体文字を除き、原則として底本の用字に従った。

一 変体仮名は、現行の平仮字に改めたが江、茂、者、与など一部はそのまま用いた。

一 当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

陳（陣） 蜜（密） 諏方（訪） 麿（鹿兒） 飛弾（驛） 太輔（大） 狼籍（藉） 百性（姓） 玄番（蕃）

愛岩（宕）

覺語（悟）

案堵（安）

旧記雜錄附錄一 目次

例	目次	頁
卷一	年間不詳	一
卷二	年間不詳	四三
卷三	年間不詳	八五
卷四	年間不詳	一二一
卷五	年間不詳	一五二
卷六	年間不詳	一七二
卷七	年間不詳	一九七
卷八	年間不詳 (忠久公以降至勝久公)	二四一
卷九	年間不詳 (久經公以降至忠治公)	二八五
卷十	年間不詳 (忠良公・貴久公)	三二三
卷十一	年間不詳 (義久公)	三五八

卷十二年間不詳（義久公）……………三九八

文書目錄……………四三五

花押一覽……………四六一

(表紙)

年間不詳

附 錄
舊 記 雜 錄
卷 一

1

條々

一 萬善六町之内二町九段之事、

一 正八幡宮御領、稱林寺平村田圃之事、

氏久御判、天授三年八月十九日

一 大隅國葉西郷之村下八町之事、

正八幡宮爲御造榮料、御寄進之狀

2

「國分宮内澤氏藏」

追而曾木利右衛門尉へ御狀被下候、尤御坊雖可被申

入、御同前之儀候間、無其儀候、以上、

御狀具令披見候、仍早風殿御假屋地御成就候哉、大慶此

事ニ候、就其御疊御簾之事被仰通候、其心得申候、乍去

様子不案内ニ候之條、同者於其許御調候而被下候ハ、代物

等之事ハ從此方調達可申候、別而賴存候、紀左丹後守兩

一 正八幡宮神宮寺大智庵之事、

陸奥守藤原元久御判、應永二年七月十七日

ケ所御寄

一 正八幡宮爲御立願、澁谷對治之後在國司之跡三町蘭一

藤原元久御判、明徳三年十二月廿日

一 正宮爲御立願、田地三町御寄進狀

沙弥玄善御判、應永十六年大呂五日

粗條々

「右國分宮内澤氏藏」

人も留守にて候間、拙子一人にて御報申入候、彼衆歸宅之刻何さま一人を以御禮可申入候、萬期其時候、恐惶謹言、

卯月十九日
土攝津入道
雲也判

澤永溫老
參人々御中

「進之狀」

3
「國分宮内澤氏藏」

爲御祈禱御馬共進宮候、此内ニ鹿毛一疋之花柄者、其ニ可被立置候也、恐々謹言、

七月廿五日
(本田)
重經判

澤殿

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二二五三號文書ト同文ナリ)

(本文書ハ二六二號文書ト同文ニツキ省略ス)

5
「藤野氏六通ノ一口切ル、」

廿三通
頭殿御教書^{◎等}正文

一通
侍所高遠江守^(流帳カ)

□十二通
異國降伏御祈以下事

□
蒙古人襲來以下事

一卷 九通
薩州御家人□守護催促以下事

一卷十四通
圀飯以下臨時課役以下之事

一卷十六通
蒙古人猝國心可窺本朝之□

二通
御教書正文相模守所替事

□通
同御教書正文御親事異賊降伏事

三通
同御教書正文 薩摩國警固事

一通有事書
御教書正文 薩摩國惡黨博奕事

一通^{▽◎}
御教書正文 二季彼岸以下事[△]

一通
御教書正文^(流帳カ) 國垣崎庄事

一通
御教書正文 薩摩方同知行分事

一通
御教書正文^{◎禁}〔集〕裏叡山以下事

□通
御下文并御教書正文 周防國築井庄事^{申狀以下有之}

『藤野氏六通ノ一
是ヨリ口切ル、』

一卷五通 御教書以下正文 殺害人行延男事

□通 宮崎宮祭御教書正文

七通 關東御教書并請文正文市來院事申狀有之

□通 同御教書正文 走湯山事

五通 高時御書正文

□通 關東御教書以下正文

十通 道義御讓狀以下置文正文

一結内 御教書正文三通開書以下官途事

三通 綸旨正文大隅守護職事二通
日向國守護職事一通

一通 綸旨正文市來井田郷事

二通 將軍家御書并御返事自船上被成之

一通 御下文正文元暦二年六月十五日

一通 御下文正文承久三年八月廿五日

右注文如件、

【總目裏判】(花押54)

百目□

□ 正文 康永四□

一通 御教書正文 貞和□

一通 御教書正文 貞和二年十一月廿一日

一通 御教書正文 康永元年十月三日

一通 御教書正文 觀應元年□月十九日

一通 御教書正文 貞和四年八月廿九日 平山事

一通 御教書正文 八月二日 將軍家

一通 御教書正文 曆應三年九月三日

一通 御教書正文 觀應二年八月九日

一通 御教書續西正文 貞和五年十一月四日

一通 綸旨正文 正平二年八月三日

一通 令旨正文 八月廿一日 御旗事

一通 令旨正文 十一月廿六日

一通 令旨正文 正平六年八月十九日

二通 令旨正文●本ノマ、
同綸旨案文 正平七年閏二月九日

一通 令旨正文 正平七年閏二月四日

7 (本文書ハ四九八號文書ト同文ニツキ省略ス)

8 (本文書(系圖)ハ四九九號文書(系圖)ノ一部ニツキ省略ス)

9 『阿久根蓮花寺文書』

改年之御吉賀千喜萬幸不可有際限候、珍重ニ幸甚々、抑
參明候ハ、最前之御祝言可申上候處ニ、此境ニ依逗留候、
無其分候、如何様近日可罷越候間、以面上心事可申承候、
次之時者可預御披露候、恐惶謹言、

『年間未考文明ノ比カ』
正月十七日 藤原國久判

進上 侍者禪師
御中

10 「樺山氏藏書」

猶々久不申下背本意候、勇健之由承候て千萬々々目
出度候、かた／＼これより可申候、急便候條先一筆
申候、
好便之間令馳筆候、遙久不申承候、且暮御床敷候、仍不

思寄事候而、信輔其地ニ令逗留候、若輩氣任候之間、無
届事共可在之候之條、無隔心矣見賴入候、定而上洛不可
有程候間、被副芳意可給候、猶期後音候也、
九月二日 (近衛前久)
(花押印)

玄佐 龍山

11 「全」

從龍山其方へ之尊書遂披見候、抑其後久不申承事積憤之
至候、仍乍左様扇三本入見參、猶大藏少輔可申越者也、
かしく、

九月 廿六日 (信尹公)
(花押印)
樺山安藝入道殿

12 態染筆候、抑去秋 禁裏御近所江堂上衆被遷殿候、家門
之儀同前候、然者諸式不如意之儀候條、匠作江差下古川

主膳入道候、此節各以馳走助成可爲祝着候、隨而扇子五
本遣之候、猶進藤筑後守可申越候也、狀如件、

十二月十三日 【信尹公】（花押107）

杣山安藝入道殿

13 就今度御殿燒失、爲被助成之、同名左馬允被差下候、委
曲被成御書候間、於其方令馳走候段、賴思召之由、相意
得可申候、尙恐謹言、

卯月十六日

【進藤】
左衛門太夫長治（花押173）

謹上 杣山安藝守殿

▽ 65

進藤

謹上 杣山安藝守殿

左衛門大夫長治

△

14 同名左馬允上洛之刻、芳札殊唐糸一斤贈給候、不寄存御
懇之義、本望之至候、隨而只今不斷光院下國候、每事可
然様御馳走共、於 御家門可爲御祝着候、猶期後音存候、

恐謹言、

四月十日

左衛門太夫長治（花押173）

謹上 杣山安藝守殿

▽ 66

進藤

謹上 杣山安藝守殿

左衛門大夫長治

△

15 御上洛之已後者不申通候、背本意候、仍今度從修理大夫
殿、爲御使古市長門守上洛候、就中短冊十枚被染御筆候
條進之候、猶後音之時可申述候、恐謹言、

六月廿八日

長治（花押174）

杣山守藝守殿

御宿所

▽ 67

進藤左衛門尉

杣山安藝守殿

御宿所

長治

△

16 從御家門爲御使、不斷光院下向候條、被成御書候、
自

拙者相意得可申旨候、毎事於貴國御馳走之段、可爲御祝

着候、可然様修理大夫殿江、御取成所仰候、恐々謹言、

三月五日

左衛門大夫長治(花押173)

謹上 杣山安藝守殿

▽
⑤

進藤

謹上 杣山安藝守殿

左衛門大夫長治

△

17 其後者不申承候、細々以一札成共可令申處、幸便無之故、

兎角遅々背本意存候、御兩殿へも可然様御取成所仰候、

切々御言共御座候哉覽、御床敷存候、將亦兵部太輔殿へ

も以別紙可申候へ共、御傳達憑入存候、尙新介可申入候、

恐々謹言、

三月十七日

長治(花押174)

杣山安藝入道殿

御宿所

▽
⑥

進藤左衛門大夫

杣山安藝入道殿

御宿所

長治

△

18 今度者爲御使罷下長々滯留候處、種々御馳走御懇之儀、

畏悦至極候、御兩殿へも可然様々御取成所仰候、仍御

家門へ之進物令披露候、御祝着之旨以御書被仰候、御一

卷被成御合點候而被進之候、猶爲拙者相心得可申旨候、

恐々謹言、

三月九日

左衛門大夫長治(花押174)

謹上 杣山安藝入道殿

▽
⑦

進藤

謹上 杣山安藝入道殿

左衛門大夫長治

△

19

尙々先度之御歌過分ニ存候、拙者もおかしき事なか

ら申入度候へ共急便之條無其儀候、兵部太輔殿へも

可然やうニ御心得候而御申乍憚頼存候、丹土備平丹

光明寺寒汀齋、此御衆へも申度候、かしく、

幸便之條令啓候、仍先度者寄思召御札畏入候、今度者不
寄存知罷下候處、種々御馳走御入魂之儀、祝難申盡候、
早速ニ令上洛御懇之旨、御家門へも可申入候、殊ニ先度
者山河迄御出、一入祝着此事候、御次之折節者、御兩殿
御取成奉頼候、逗留中切々申度心底ニ候處、可然幸便無
之故罷過候、爰元出舟之儀も急申事候間、可御心安候、
猶重而可申候條、不能巨細候、恐々謹言、

九月五日

長治(花押176)

進藤左衛門大夫

長治

杣山安藝入道殿

御宿所

20

猶々御懇之御使者令祝着候、急書中如何申入候哉、

(關字)

御使從龍山様之御書之趣令披露候、即從是も以御書被

仰候、猶爲拙者も相心得可申由候、次去年候哉、坊津迄

御使者殊種々御音信共祝難申盡儀ニ候、其以後切々以
書狀成共可申通候處、好便無之故菟角罷過背本意候、今
度御家門も當所へ御成之儀ニ候、程近罷成一入御床敷存
迄ニ候、何も從様子猶以未御禮可申述候、恐々謹言、

九月廿六日

進藤大藏少輔

長治(花押176)

杣山玄佐老

參御宿所

21 爲御使被差下古川主膳入道條令啓達候、仍御家門御殿禁

裏被移御近所へ候、然者諸事御不如意故難調候、每度被
仰越儀も、乍如何此節之事ニ候間、被成御助成候様御取
合頼思召候、別而於御馳走者可爲御祝着之由、猶從拙者
相心得可申入旨候、恐々謹言、

十二月十三日

長治(花押176)

杣山安藝入道殿

參御宿所

176

進藤筑後守

杣山安藝入道殿

參御宿所

長治

△

22 好便候條令啓候、從御家門も以御書可被仰候へ共、差儀

無之候條無其儀候、抑先年罷上刻沈香御進上候間、一段

御念入可然香ニ而、被成御祝着由度ニ御意ニ候、自然於

京都相應之儀可被申入由、猶從拙者相心得可申旨候、恐

と謹言、

四月二日

長治(花押出)

杣山玄佐公

參御宿所

▽
⑤

進藤筑後守

杣山玄佐公

參御宿所

長治

△

23

猶々其以來切と可申承候處、好便無之故、菟角罷過

背本意候、急書中如何憚不少候、以上、

其以後者久不得貴意御床敷存候、去年者以書狀申入候間

參着候哉、御國弥御無事之由、殊去年者肥州表之儀無殘

所屬御存分之由、珍重此慶此事ニ候、太守へも以別紙可

致言上候へ共、差儀無之候間令遠慮候、御次之折節者可

然様御取合之段、別而奉頼候、自然於京都相應之御用等

可蒙仰候、疎略存間敷候、不斷光院切と御參會候哉、弥

御入魂之段奉頼候、猶追と可申入候間先聞筆候、恐と謹

言、

四月五日

長治(花押出)

杣山玄佐公

參御宿所

▽
⑤

進藤筑後守

杣山玄佐公

參御宿所

長治

△

24

尚と申入候、先年被下候釜于今秘藏仕候、御上洛之

折思召懸御目可申候、

爲御使左衛門大夫被罷下候、其御國無案内之事候條、可

然様御馳走之段所仰候、先年不斷光院御下向之時、以書

狀申入候、相屈申候哉、拙者罷下候砌者、種と御懇志之

儀共于今不忘置候、内々可有御上洛之由候條待申候へ
共、無其儀候、與風と在京奉待可存候、恐惶謹言、

三月十三日

【進藤左馬允】
光盛（花押179）

杣山安藝入道殿參

御宿所

進藤左馬允

杣山安藝入道殿參

御宿所

光盛

△

猶々申入候、先年被下候釜于今秘藏仕候、哀々御上
洛候へく候、御目懸度存候、

乍御返事一筆令啓候、就中左衛門大夫被罷下候之處、種
々御馳走之通被申聞候、於拙者祝着之至存候、殊紅花壹
斤被懸御意候、過分之至候、暮々拙子罷下候砌者、種々
御懇志共于今難忘存候、何様今一度罷下可得御意心中迄
候、恐惶謹言、

三月九日

光盛（花押179）

杣山安藝入道殿參

御宿所

▽
㊦

進藤左馬允

杣山安藝入道殿參

御宿所

光盛

△

26

追而申入候、進藤左衛門大夫爲御使被罷下候間、萬
々御取成共憑存計候、

在國之砌種々御懇志共不知謝所候、仍承候つる道御傳受
之儀申調候、此比 大間様依御不例、御自筆難成候條、
被差下御本心之間、於其方御書寫候て、則此便々可有御
返進候、被遂御望候事先以目出候、委細之段岩崎新介可
申候、恐々謹言、

【不斷光院清譽】
清譽（花押222）

三月十五日

杣山玄佐居士

尊丈

▽
㊦

不斷光院

杣山玄佐居士

尊丈

清譽

△

27 今度進藤上洛之刻御懇札拜見候、本望之至候、殊古今集

之儀相調候、於我等祝着此事候、御禮御進上候、是又目出度候、次御天目之儀可被下由候、過分候、何様來年者必罷下旁御禮可申入候、進左も御懇志之趣物語候、能と從拙者可申旨候、猶期後言候、恐と謹言、

三月十日

清譽（花押²²²）

杣山入道殿

御宿所

28 當年者可罷下覺悟候つる處、近衛殿難去仰候條延引仕候、心外之至候、仍進藤左衛門大夫上洛之砌、御懇之至共祝着存候、來年者可致下國分候、但存命難測存候、自然御屋形にてハ御取合奉憑存候、將又 大閣様御遠行にて候、よき折節御聞書をも被參候て満足に存候、定可爲御祝着候、猶岩崎新介可申入候、恐と謹言、

三月十七日

清譽（花押²²²）

杣山入道殿

御宿所

29 好便之條祝着候而、先一筆令啓候、去年橘陰委細被申候

哉、旦暮御床數計、來年者爲忍之分以下向可申候、太守御意得憑入申候、委曲尙彼院可有演說候、恐と謹言、

三月十五日

『飛鳥井雅教』
雅教（花押¹⁴）

杣山安藝守殿

30

尙と橘景へも一札可遣候へ共、餘不得隙候間能と傳達候て可被下候、諸事角田申含候也、

去年者爲御上洛遂羈、殊切と參會難忘計候、就其當年如約束下向候處、大内周防介堅抑留候間、來春者必と令下國可申候、金吾其外以一札申候事候、隨而板物一端進之候、尙平田兵衛尉可申候、恐と謹言、

九月十一日

雅教（花押¹⁴）

杣山安藝守殿へ

31 先度者於宗養宿所參會本望候、其後何等御事共ニ御渡給候哉、旦暮御床數存候、仍 勅筆掛字折節座右候間進之候、雖無指題目候、好便之條令啓候、聊舊好子細候間、

以後者細々可申通候、猶瀬尾左衛門尉可被申候、恐々謹言、

三月十六日

『四辻季遠卿』
季遠

杣山安藝守殿

(花押 249)

32 雖未申通候染筆候、抑今度京都依不慮之錯亂、諸事無外方故、匠作へ以使札申候、此砌於預馳走者、可爲祝着候、猶進藤筑後守可申候也、狀如件、

十一月廿六日
(近衛信尹)
(花押 108)

杣山兵部太輔殿

33 以上

一書令啓候、仍今度奥州様爰元御下向被成、兩御所様へ御禮被仰上候處、無殘所御仕合共にて、早々御歸國被成候、定而於其地旁々珍重可思召候、然者去比琉球ニおゐて御苦勞御骨折共にて候、於此方感入事候、將又御息久太郎殿今度御供候て御下ニ候、於爰元懸御目候、一段

御成人にて候、隨而爲御音信御太刀一腰・馬代銀子三枚并段子二卷被懸御意候、遠路御懇意忝存候、何も期來音之時不具候、恐々謹言、

十月二日

本上野介

正純(花押 231)

杣山權左衛門殿

御宿所

(本文書ハ「舊記雜錄後編四」六三〇號文書ト同文ナリ)

34 蹴鞠爲門弟十骨扇之事免之候、可有御所持者也、恐々謹言、

十月廿二日

雅庸

杣山久太郎殿

35 「本田氏文書」

三十首歌逐一覽候、執々殊勝感悅無比類候、乍憚付墨候、更不可足信用候、仍縹子一端赤到來候、懇意之至一段祝着候、尙期後音候也、狀如件、

八月十六日
(近衛權家)
(花押 105)

本田紀伊守殿

36 懇報本望候、自取前切と可申通之處、自然懈怠背本意候、去春相煩目以他筆申候キ、仍丁香五斤到來尤祝着之至候、由緒共早、于他儀候條、以後者別而可申承事可爲本懷候、將又百人一首雖其憚多候染筆候、猶重而可申候也、狀如件、

八月十六日 (近衛權家)
(花押106)

本田紀伊守殿

37 「全」

去年者罷下御懇之儀共難忘存候、仍入江殿御上洛御進物共持參被申候、隨而御官位之儀、從本所涯分調可被申之由候、珍重々々、仍拙者方へ重寶拜受祝着之至候、將又此天神名號青蓮院殿^{御判}有之御手跡候間進覽候、委細御侍者可被申候間不能一二候、恐々謹言、

八月十七日

松尾民部少輔
頼元(花押236)

本田紀伊殿
參

38 「全」

上洛已後御床敷候處、不寄存芳問誠不知所謝候、抑當春福昌寺僧下國之砌獻書狀候、相達候哉、令祝着候、將又御家門御請被申候、則令披露御返事、同百人一首御本被染御筆候、尤御面目至候歟、兼又唐皮一枚同玳瑁瓶一對唐食籠一緞子一端淺黃送給候、不思寄芳情自愛此事候、仍時又可令對顏候哉、朝夕念願此事候、猶本庄右兵衛尉可申候也、謹言、

八月十八日 (日野町藏將)
(花押218)

本田紀伊守殿

39 乍乏少薰衣香袋三獻之、唯今廻來候而加筆候、上洛已後御床敷候、抑不寄思音信令祝着候、殊丁香二斤到來重寶秘藏不過之候、猶期後便候也、謹言、

八月十八日

(日野町藏將)
(花押218) 「上フ藏將」

本田又次郎殿

40 永に在陣之儀苦勞令推察候、仍去年候哉、就當門大工新

四郎儀染筆候處、種々懇意之由悅入候、依之又下國候、

可然様被加下知候者可爲歎悅候也、

三月廿八日
〔近衛〕〔尊朝法親王ノ花押ナリ〕
〔勝久公御嫡子忠良入道休庵〕

嶋津修理太夫入道殿

41

態令啓上候、仍此間乍餘所承候者、前年罷下候砌、御
家門様御書〔樺〕山殿〔江〕從私届申之由、人々ニ御雜談

之由承及候、於一定ニ者迷惑不過之候、我等者渡不申

歟、誰人之届候哉、不審之至候、蒙此御狀申受、拙

者無如在之通具ニ申分度候、

一天文十九年ニ爲御使者罷下候者、本所御方之御狀計ニ

而御屋形様〔江〕二ヶ條之以題目を罷下候迄ニ而、其

外者いつかた〔江〕御書届申事無之候、委大和殿御存

知ニて候、

42

一去ニ年豐高井以兩使於申上砌〔茂〕御屋形様ならて

はいつかたへも御書上申事無之候、各定御存知たるへ

く候、

一今度飛鳥井殿爲御使者罷下てこそ、初而於清水ニ〔樺〕

山殿ニ預御對面、一段御目を被下、御懇之至候へ共、

誠忝奉存候ていかやう之御奉公申候へてと念願計ニ

候處を、如此之題目候へ者、さそく不止儀者と思召

候はん事、返々迷惑至極候、〔罷下御取成を以〕、某無

如在之通被仰分候由、從何忝可存候事候、恐惶謹言、

正月廿三日

廣繼〔江〕

〔天文〕廿二年正月廿三日
角田左京亮

橘陰上人

參御机下

廣繼

猶々邊川之事、御働之通無比類被思食候、併從北原

方彼在所之事者六ヶ敷申候哉、就別所を可被遭御

心底之由、御物語候、然共本有間敷候、萬端其恐不

少候、

先日尊書被下候、取召可致貴報候之處、當時者瀬戸江御
悉仕候間、延引非本意候、併尊意之旨、(本田親貞)(白濱重治)本右・白次彼兩
人江可有披露之由頼入候處、則被申上候、然處拙者就御
用之儀祇候仕候、次以御上洛之子細、具被聞食候、然共
此刻者先々思召被留候て、可然被思食之由、御返事可申
之旨候事候、恐々謹言、

二月廿三日

忠(永)(花押)(國元)

新納刑部太輔

藝州様

尊報人々御中

忠元

43

態以捻令申候、仍孤舟齋蒲生へ所用候て被罷越候、先々
(伊集院忠朗)
今日者當所へ滞留候、今程ハ爲何事候哉と被仰事ニ候、
圍碁之供ニ長道守一王佐渡拙同心候、爰元慰可有御察
候、將又兩日中ニ鹿兒島へ御越も候哉承度候、彼是以御

返事可示預事候、恐々かしく、

十月四日

鉤江判

肝付彈正忠殿

末弘入道

44

先者重田備州及捧一書候之處、別而御懇之御芳札于今忝
令披見候、仍爰元六ヶ敷子細、新納武州蒙仰候儀共御座
候條、地下年寄衆任異見、十郎左衛門尉致他出候、以其
儀大口拙子間無事罷成候、爲御存知候、倍可添御心事奉
頼候、定此比武州如鹿兒嶋御出頭之由相聞候、於其方被
仰談、善左衛門尉進退儀、向後奉頼候、重々可得貴意候、
恐惶謹言、

六月廿五日

長積〇

村田右衛門尉殿參

人々御中

45

此比まで八代江出入不申候處此度參候條、
追而牧弥五郎事、義陽代成敗ニ相定候處、以白分別を以

落行貴殿様へ從御意成敗仕候、多年之本望此事候、御芳情之儀更に難申盡候、弥五郎舍兄、到我等親子設衆相閉目候者くるしからず候、諸事之儀、御手つよく可被仰出候、只今奉頼候事無其紛候條、御老中之覺に候、然者我々子孫のためたるへく、向後可奉頼之外無他事候、不願惶申上候、

追而いつそや六卷書御借候、今迄召置候事氣使至極候、然共打續御弓箭無透候、就中去々年以來、色々我々も不得隙事迄候て、未寫取申候、儘於御寫させ者、今少御借候へかし、心靜寫させ申度、但御入用之時者早々可然申候、將又書札之書御借候ハ大概寫候而、本ハ持せ申たると存候、然共其内本一二卷、爰元江相殘たる様ニも覺候儘、此御返書ニ然々承候ハ、可得其意候、眞を文六卷書候事、去々年我等毘沙門之福雖頂載候、乍十二卷相揃候可御心候、仍見得來候儘咆聊寔音信之印計候、

其后者遙久不申承候、誠不人成様之御分別、其儘察存候、雖然依無指題目菟角罷過候、餘無沙汰千萬之條用此事候、仍其元御二人無異儀候哉目出候、爰許各無別儀候、是之女子衆物語候者、おこゝ今程東郷ニ有着之由變候事、分明候哉、是又目出候、與許江被成御奉公たる人にて候儘、向後可目出度事我々迄満足迄候、右此書之端、母儀へもおこゝへも御心得頼存候、如何様於何方歟參、令無沙汰之段、彼是可申述候、猶期後喜之時候、恐々謹言、

六月八日

本田嘉辰齋

玉窓下

義虎(花押圖)

薩摩守

「上封與相見得候」
本田山城入道殿

御宿所

義虎

47 檢斷之古證據まで入間敷候へとも、彼者若輩之者ニ候間、爲嗜持せ候、從此證據以前之分、御方東福寺之脇之役所にて失候、當時我等か家ニ相殘證據もたせ申候、聊

無忘念候、將亦親類有心底旁之ハ御うつし候て、本ミ御

返可被下候、我等か祖父親のかき申され候ほとに、落字
かな遣、いづれもく不可然候、享祿元年と申よりハ拙

者書付申候、爲御披閱候、恐ミ謹言、

(本田親數)

嘉辰(花押20)

本田

「かしんよりの
けんたんの日記」

48 去春申入候之處御懇之御返書、殊ニ内ミ則御引廻之由承

候、誠御丁寧之至畏入候、其以後被得可申通候、遠方之

故、乍存候心外候、爲今度眞光寺御使節出國候間、先用

一書申候、然ハ彼寺其國不知案内之仕候、每事頼存候、

猶自是可申述候間、令省略候、恐ミ謹言、

又以切紙二色慥致來候、快然候、

七月廿八日

鑑法(花押89)

本田彈正忠殿

御宿所

49

尙ミ弥^{⑧二}次郎殿江以別紙可申入候ヘ共、急便之條御

言傳申候、細ミ寺家御見^{⑧舞}廻頼入候由申度候、又右

近尉未御近所ニ堪忍^{⑧候談}被下、折ミ被懸御目候者可爲

本望候、

就幸便令啓候、仍去夏上洛以後者久無音國中弥ミ靜謐候

〔處〕、日夜御床敷候、抑罷上候刻者萬ミ御入魂之段、終身

不可有忘脚候、尤當年中^{⑧ナシ}〔ニ〕歸國可申處、數年大望之儀

繁多候間今歲中者滯留申、來春夏之間ニ隙明候而下向可

申候、然者御屋形様御父子・典厩様江次之御時者可然様

御取合所希候、就中寺家之儀、以前ニ細ミ申候様ニ、修

理諸役者公事邊諸行事等迄衆御心付、無御油斷被仰付候

者、可爲大慶候、殊報忍寺老鉢事候間、諸篇可爲忘却候、

御一人之御心を肝要候、急便之條、重而可得貴意候、恐

惶謹言、

正月十二日

津與(花押10)

本田彈正忠殿

御宿所

50

伊東陣合ニ入て衆遣候時、被仰出候條〔本ノイ、〕と

一背御下地之輩〔知〕・可爲親子同罪候哉、

一豊後守殿御手之衆、又北郷殿御人衆垂なをと、又

城切岸ニ雖被着寄候、於御下地承者かゝり申間敷候、

一味練之仁の事、於今度者可致披露候、

一射通之征矢・手火矢之事、從合戰も可爲忠節事、

一未練之仁之事、所領讓渡願等之事、

一親子同戰場ニ罷出、一人未練一人者高名之時ハ、高名

申候する一人ニ御所領可被下事、

51

追而申候、先度者手火矢之目當之秘物送給候、是又

珍重不少候、初而見申候間自愛難盡紙面候、何様永

日中可申承候、

歳暮之御佳祐申納候、仍先日者被成越山申承候、祝着之

至候、殊物之本數ニ借預候、御懇志之段不及申候、就中

書札之卷物一覽候、乍斟酌書寫申候而返進候、未相殘候

様承候、同所望存計候、又六卷書靜見申候而、來春早ニ可

還進候、次見得來候儘、壹種是表御祝儀計候、猶明春早

ニ自他之吉兆信可申承候、佳事恐ニ謹言、

拾二月廿七日

義虎〔花押161〕

本田山城入道殿

御宿所

52 態進使僧候、仍先ニ爲御判之御禮、福壽院登せ申候、御

取成大慶令申候、就中從一瓢様平原之門を十穀園之門ニ

御替ニ而給候、然者文書者爲後日にて候間、十穀園五十

貫之員數、金吾様之御判ニ被遊副候て給候ハ、猶以

可爲満足候、每事恐ニ謹言、

十月廿四日

法印〔全〕
賴金〔花押150〕

伊集院大和守殿

御宿所

53

尙ニ其許より乗船之儀、此方にて船奉行へ申渡候、

可有其御心得候、以上、

一書申入候、仍貴僧御事、老躰と申御煩之由にて御暇之

儀頻承候、今より發候ては咲止千萬ニ候條、先嶋へ被成

歸寺、養生候て來年三月者可有御上之由候間、無相違、
薩州様御歸國前ニ御上尤候、恐惶謹言、

六月五日

山田民部少
有榮(花押246)

下野守

久元(花押150)

本佛寺
床下

54

阿多洞雲老

豊後守
忠嘉

蒲地備中守殿御宿所

帖佐衆中安樂五郎左衛門尉・伊地知丹波守殿入組ニ付、
前御公儀ニ罷出様子被申上候、又候參上被申候、各寂前
之儀御存知之前ニ候間、當奉行衆へ被成御談合、事濟候
様ニ頼入候、委敷者彼人可被申候條不參筆候、恐々謹言、

六月廿四日

(兼准)
忠嘉(花押137)

55

覺

一先高麗入次年自力を以罷渡、鎌田李助殿ニ付二年御奉

公申候事、

一先年大牆江御出陣之刻、鎌田玄蕃殿ニ付自力を以罷上
惟新様御下向之砌、御國元迄御供申居候事、

右兩度之御奉公之通、先地頭鎌田玄蕃殿より豐州へ前
々様子被仰入、其一筋を以、又豐州より 惟新様江被
得御内證候、其御返事無異儀事ニ候へ共、御隱居之故
御手付難被成候之條、鹿兒嶋へ早々被申上而可然之
由、被 仰出候、御使比志嶋掃部助殿以其趣、相良日
向殿にて被成御披露候、其後鎌田左京殿にて度々御申
候へ共、御談合未相濟由候而押移候、然處 中納言
様・薩州様御同心ニ而御上洛前ニ候之故、御返事無之
候、就夫、今度地頭を憑存御任申上候、能様ニ御披露
奉頼候、以上、

西十二月十四日

(兼准)
安樂五郎左衛門尉(花押18)

喜入久右衛門尉殿

56

「帖佐士安樂五郎左衛門藏」

當家江奉公忠節之安樂大和守爲筋目、從爰奉公專一也、
安樂殿可爲二男也、可加扶持之事者、追而可有口入者也、
先神領之内庶子分、借屋之門、同屋敷二、遣置也、社頭
之儀、聊尔有間敷候者也、仍遣證文如件、

(肝付兼續)
法印省鈞(花押93)

安樂因幡守殿

57 「國分士安樂爲兵衛藏」

彼安樂大炊助殿自分出物皆濟被成、三ヶ月之用意銀自力
ニ被參候、一段之御奉公ニ候、三ヶ月過候者御上米歟、
又者國元江軍役出米之内歟可被遣候、爲御存知候、以上、

七月廿七日

(伊集院久治)
抱節老參

山田越入

(有信)
利安(花押出)

58 石漕船遲延ニ付、帖佐鹿兒嶋より稠被仰渡候、爰元之船
十艘程ハ十五日前ニ出船候、又五三日以前ニ出船候、彼

是合而廿二三艘程漕出候、内浦へ不相着候者、定而中達
へ可致不用候、夫ニ付檢者迄被遣候間、頃者其表へ可相
廻候、餘延引笑止ニ御前も被思召候間、先肝付ふくとの
船又内場々少とも可相廻候、合十艘も十五艘も候者、一
人之奉行被相乗、國分方之船元候通、さきくゝに合點之
申候者、御爲ニ可罷成候、如其堅申渡旨ニ候、無油斷先
以早々敷可有出船候、涯分肝契此節ニ候、恐々謹言、

二月卅日

伊下野入
抱節(花押30)

安樂大炊助殿

御宿所

59

覺

一くまもとの御番ニ大野治部太夫殿ニ付申候て、自勘ニ
て七月御奉公申候、其時てき二人うち取申候、
一矢崎御つめの時くわんせいニ付申候、自勘ニて百廿日
罷下候、其時白石左近允と申わくたの番大將打取申
候、

一ミなまたの御陣取ニ五十日自勘ニて、くわんせい付申候て御奉公申候、

一有馬へ御渡候時、ちゝわの御はたらきくわんせい付申候て、三十二日自勘仕候、其時大村源左衛門尉と申ちゝわの地頭打取申候、

一八代之御番平田濃州様ニ付申候、移番自勘ニて御奉公申候、其時高瀬ニ六十二日つめ申候、其時うすまのやふりニて、てき壹人うち申候、

一嶋原ニ中書様御渡之時、百日自勘ニてきうち申候、但りうさうしのおいたくとのと申仁ニて候、

一かたした御つめの時、平田新四郎殿御供申候、てき壹人うち申候、其時手負申候、

一岩屋御つめの時、自勘ニて六十二日つめ申候、其時てきうち申候、

一豊後たけ宮の御番ニ御遣候時、てき一人うちとり申候、其時手十一ヶ所おい申候、

一同あそのたけ宮の時、新納伊勢殿付申候、坂なしの合

戦てき一人打申候、

い上

三月十日

安樂備前守(花押19)

60

尙以、六左衛門尉殿先日之一札、いつそ懸御目度候と申度候、貴所ニ御快氣候ハ、ちと御同道候へく候、

昨日者度と預御使候、自是者申後候處、重々儀難申盡候、仍腫物御煩候様ニ承候、無御心許候、あまりく長在陣ニ而候間、せき出候かと推申、ちとく若衆成共御用候者、當日可爲驗候、但藥代可難成候哉、拙者式すりきり申候て、さやうの儀ニ中く存絶候事候、我々も此比者切々相煩申候、只々氣のつまりと覺申候、よく御休息尤簡要候、恐惶謹言、

六月一日

(伊勢貞昌)
伊弥九
(花押38)

(肝付兼弘)
肝豹様
御陣所

61

猶々申候、先日又六殿御へつらひの刻願文進候つ
る、其案文これへめし置候と存候へ共、見出し不申
候、ちと御うつし候て給候へかし、次第ニ御願成就
申度候、頼入候、又昨日之一巻いつ成共被見てきか
せ候へく候、

昨日者被召寄、別而御懇之儀共難申盡次第候、かつ者毎
々儀候處、種々御懇慇之儀相似御隔心却而之迷惑候、あ
まりくことく敷候つるまゝ、若後日之儀と御坊かと
存候、尤遂參上此謂可申述候へとも、手前取紛候間先如
此候、さてもくこよひハ名月、いかなる御遊共御入候
へん哉、此方ハさやうなる催も無之事候、得寸暇候へ、
必一宴可相企と存候、御ひまにて候へ、後方光臨所希
候、恐惶謹言、

八月十五日

伊弥九

(花押 38)

肝豹右さま

參御陣所

62 此間者何角とて不能面上候、内々御荒増之書物、今日も

御出候てあそハし候へかしと申入度候へとも、御使仕儀

て、今日者雲州へ終日可罷居候而乍存候、明日か晩ニか、
いつれも從是可申候、無御懈御執心寄持感申事候、さて
もく先刻者見事之兩種送給候、御懇情難申盡候、され
ハ毎之儀結句恥入候、委曲期面上候、恐惶謹言、

九月二日

伊弥九

(花押 38)

肝豹様

人々御中

「肝付豹右衛門兼弘、後治部右衛門ト稱ス、從 征久朝鮮國へ出陣、
慶長十五年殉死于征久云々」

63

此間者釜山浦へ御越候哉、一昨日御歸候由承候得とも、
無寸暇候て、とかく不申入背本意候、さても當時事關候
刻、一種送給候、御志中く書物ニ不申得候、將又内々
申候つる書物者、少々國もとよりちと申入候て可懸御
目候へとも、今日者御番候間不能其儀候、明日も必これ
より御注進可申候間、御出て可有御覽候、猶期面上候、
恐惶謹言、

九月廿三日

伊弥九

(花押 38)

肝豹さま人々

まいる申給へ

64 去月之比預御札候、則可令申御返事候之處、益田勘解由

左衛門尉于今逗留間、延引候之條背本意候、如仰於向後者雖無指事候、細と蒙仰、自是可申御同心候者悦入候、兼又承候曰杵院間事、南方者、爲土持太郎兵衛入道恩賞之地、豊前介當知行事候、北方事者、土持宮大丸條と申子細等あわけに候といへとも、宜爲公方御沙汰候哉、於身者不可有等閑之儀候、御教書案文拜見了、諸事期後信候、恐と謹言、

十一月廿三日

(北郷時久)

沙弥一雲(花押 37)

謹上 嶋津安藝入道殿

65 遙久數大切之御物之本被借下候、就氣分漸此間寫取候、

聊亦千萬非本懷候、先と辛便之間返進上仕候、此等之旨可然之様、御披露所仰候、每事恐惶謹言、

△ 早崎治部左衛門尉殿 新納刑部太輔 忠元

66

なおく 此餘之書物ハ拙子必と致參上可得御意候、已上、

其後者久數不奉得尊意候、然ハ抄物二册久と借給候、此中早と可致返進處ニ細と披見仕候に付、于今延引候、態と可持せ進之處ニ幸源介方越合候間、先と令返進候、聊尔申事候へ共、來春申請致書寫度候、いかゝ得貴意候事候、恐惶頓首、

九月十七日

(川上忠智)

河三入

枕枕(花押 80)

(綿山壽久)

玄佐様

參尊報

67

△ 乍輕微竹田之牛黃圓貳貝進覽候、

去と年罷下種と御懇切共不知謝所候、聽而御禮雖可申入候、御家門御書遲と候之間不申入候、背本意存候、仍御國被達御本意御高名共之由承候、満足仕候、拙者にも帖

佐之内、寺家一所被預置之由候、外聞實儀祝着此事候、御取合憑入存候、如何様與風罷下、御禮可申入覺悟候、猶伊備可有御物語候、萬々御床敷存計候、靜謐候ハ、必々御上洛奉待候、恐々謹言、

九月廿四日

杣山安藝守殿

御宿所
△

〔不斷光院〕

清譽〔花押 222〕

68

尙々 大隅守殿より御狀被下候、御父子御無事^{④ニ}候、態以飛脚申入候、

一加藤肥後父子國を被召上ニ付、從江戸御上使此書立衆御下候、大形六月廿日ニ江戸御打立候而、七月中比我等國迄歟鶴崎迄か御出答ニて候、

一若つかへ之儀^{④有者}〔ニハ〕御人數可被遣候間、黒田殿・鍋島殿我等なども、心々用意仕相待候、上^{④使}衆御下知次第可罷〔成候〕由、昨夕從申來候間、其用意仕候、

69

一隈本城、御掟次第ニ城ヲ可相渡と而、掃除など申付候由、豐後横目衆より申來候、御近所之儀候間其段不及申候、

一何茂拵候とて、人衆ヲ入可申分ニ而ハ無之候へ共、先

〔伺^{④在}〕御意ニ拵候へ共下ニ申付候、

一其許之儀如何申下候哉、彼地於罷越者程近可有御座候間、萬々可得其意候、此外追而可申越儀御座有間敷候、

恐惶謹言、

六月十六日

喜入攝津守殿

杣山美濃守殿

〔本文書ハ「舊記雜錄後編五」五三五號文書ト同文ナリ〕
まいる

細川越中守^{④忠利}
忠時

追而申入候、

一五月六日十一日同十五日廿四日、四度之御狀昨日到來、披見仕候、其地御無事之由此方同前ニ候事、

一此暮ニ御上洛可然由、土井大炊頭殿より御内證共細ニ被仰越候、即上聞仕候、尤ニ被思召候間、秋中ニ御上洛之用意、被仰付候事、

一松平肥前守殿御成日記、被成御覽候、就其此方 御成ニ可入道具共御書付御持せ候、重而様子可申入候事、

一御供衆之儀御成之時、御前之役者可被仕衆舞臺ニ鳥目小袖など可被出様子、前廉櫓古候へてハと被仰越候、尤ニ存候、内ニて人之不存様ニ書付可申様ニと、被仰越候、心得申候、其外色ニ入可申候哉、書付重而可申上候事、

一宮仕衆振舞方ニ動衆之事、^(動)去年貴老御供申大炊頭殿へ罷出候刻も、右之御出合共承候、尾州紀州兩大納言様御成之時も、連ニ御知音之衆へ御やとひ候之哉、此度も左様ニ候て可然存候、弥其心得可申事、

一攝州去月六日其地被爲打立哉、今月朔日大坂出船之由申來候、定下着程有ましきと存候事、

一御成之 御時分之儀者、春ニ於罷成者、可然由被 仰

候哉、就其大工豊後守へ御作事之様子御尋候へハ、霜月ニハ御廣間・書院・御門迄無所殘可相調由候哉、其外御數寄屋、御くさり之間、御湯殿・御料理之間・舞臺樂屋・御馬や等者、弥可致出來之通候之哉、於其成者、三月之時分御成相調可然由、承候、御方者其御覺悟にて諸事御調候而、當暮之時分ニハ、春之御成可調様子相知れ可申と、被仰候、尤ニ存候、いつれ御急ニて肝要ニ存候、即貴老御書面皆ニ被成 御覽候、定其心得可有之候事、

一中宮様御懷胎にて當月御産月之由候哉、もし 太子様ニ而御座候ハ、來年御上洛可有かと、寺澤志摩守殿貴老へ御物語候哉、能ニ被聞召合可被仰下候事、

一東郷十左衛門尉殿、近日其地打立にて候之哉、殊外おそく可被罷下由、節ニ出合申候事、

一爰許御屋敷内へ忍入申候者之儀ハ、三日中ニ伊十院戸右衛門差上可申候間、其刻細ニ可申入候事、

一將軍様御庖瘡之御注進被成御申候、早打おそく參着仕

候、就其御存分尤ニ候、即扶持方を放追出申候、彼飛脚申分共其地へ被仰越候哉、我等ハ相煩罷居中ニて候之間、定而攝州老被仰越候ハんと存候、委者攝州御下向之時分可申談候、左様ニて定而御返事可申候、恐、謹言、

六月十三日 下野守 久元(花押)

伊勢兵部少輔殿 参人ニ御中

70 久四郎殿様御上洛ニ付御錢則時 宰相殿ニ茂致披露候、思召寄御懇志御祝着之由、勿論枕江茂細と申合候、一段能御仕合ニ而候、此等之旨委曲御取合所希候、恐、謹言、

六月六日 有馬藤兵衛尉 鎌田與兵衛尉

鳥丸兵部少輔殿 御報

71 爲見舞味噲百桶到來、悦思食候、猶石田李頭可申候也、

「年間」卯月朔日 〇 「朱印」(豊臣秀吉) 不考
「上包」 本郷一雲殿 本郷一雲齋

(本文書ハ「舊記雜錄後編二」一〇九一號文書ト同文ナリ)

72 爲年頭之祝儀、太刀一腰・馬代銀子三枚到來、悦思食候、猶石田治部少輔可申候也、

正月十四日 〇 「朱印」(豊臣秀吉) 北郷讃岐守殿 (忠虎)

▽ 〇 上包 北郷讃岐守殿

(本文書ハ「舊記雜錄後編二」六三六號文書ト同文ナリ)

73 到來之目錄

一砂糖五百斤 一(大)つほ壹ッ 一花入貳ッ 一かうろ三ッ 一茶碗大小三ッ 一からかねのはち壹ッ

一ゑさしなへ壹ツ一きんはん貳拾枚一きんはく五十枚

已上

十一月六日 [△]○ [▽]_④「朱印」(豊臣秀吉)

本郷一雲軒

(本文書ハ「舊記雜錄後編」二六一九號文書ト同文ナリ)

74 就唐船相着、如目錄到來、種々取揃之段、別而悅思食候、

猶石田全頭可申候也、

十一月六日 [△]○ [▽]_④「朱印」(豊臣秀吉)

本郷一雲軒 ^(時久)

(本文書ハ「舊記雜錄後編」二六一八號文書ト同文ナリ)

75 鷹一連到來、遠路悅思召候、猶石田全頭可申候也、

十一月八日 [△]○ [▽]_④「朱印」(豊臣秀吉)

本郷讚岐守殿

(本文書ハ「舊記雜錄後編」二七〇三號文書ト同文ナリ)

76 爲音信紅糸三十斤到來候、遠路^③(ナン)之志悅思召候、猶石田^(三成)治部少輔可申候也、

十二月十八日 [◎]_④「朱印」(豊臣秀吉)

本郷讚岐守殿 ^(忠虎)

(本文書ハ「舊記雜錄後編」二七〇四號文書ト同文ナリ)

77

尚々遠方之儀候、菟角可被相閑目事候間、宿迄與申事にて候、領掌與返事可承候、

急度申候、仍木原十郎兵衛尉方子息、今年市來伊集院之間之可爲御頭取相定候、無吳儀領掌被申候而專一候、去年雖被相當候、侘言被申候而、以前者被措候ツ、爰本御神慮與申御奉公之儀候、乍重言殊去年被差置候、彼是以無餘儀可被相閑目事可被仰付候、一と□侘之儀承間敷候、是又爲御存知候、恐々謹言、

六月九日 經定^(花押24)

忠棟^(花押28)

寄合中

鎌田^(出)雲守殿
御宿所
經定

78 當年之初鴨預送忝候、隨分料理可仕候、先日茂青鷺送給候、節々思召寄不淺候、猶懸御目御禮可申入候、恐々謹言、

九月廿五日
有榮^(花押24)

山本左近殿
有榮
山田民部

79 尙以伽羅甘兩唐之沈被懸御意候、御心入之段直申謝候、於爰元玆敷兩種ニ御坐候、就中伽羅ニ被入御念たる御事共候、以上、

其已來久々不申達處、御懇札忝拜見候、仍春中當將軍様御上洛ニ付而陸奥守様御上、貴所御供被成、于今御逗留之由、御苦勞御造作申計無御座候、然共御双方御機嫌能御坐候而、拙者一人之様ニ目出度奉存候、寂前以誓

詞申合候筋目、互々無御相違、逐日御入魂、定而貴公茂御満足ニ可被思召候、我等も御同前候、然者御證人衆下シ可被爲參由候而、御宿以下之ためニ御使者被爲下候、大久保相模守・土肥大炊頭相談之條、様子御使者可被仰候、來年ハ陸奥守様御供ニ而御下向被成由、尤其節積御事共、萬々可申達候、恐惶謹言、

八月八日
本田佐渡守^(多)
正信^(判)
鎌田出雲守様
御報

80 明日 惟新様御方へ御越之儀者、一定其分ニ而御^(座)候、併今日之様ニ、終日之雨ニて候者、迎罷成間敷候、されとも晝前よりも雨晴候者、御打立候而可被成御越との儀共ニて候、さやうニ可被成御心得候、恐惶謹言、

三月十一日
伊勢平左衛門尉
貞成^(花押33)
鎌田雲州
御報

81 如仰今朝被成官下、日來之本望不可過之候、就其祝之儀

承候、不及御吳見候、とかく先貴所（御より）の御祝物をいそ

ぎ給度候、それにしたかひ可申候、貴所も御申あるへき

由尤ニ存候、てるまの事久保與九年前之儀、御舍弟甚吉

殿御存ニて候間、御尋候て可被仰調と存たてまつり候、

於御同心者可爲本望候、恐惶謹言、

二月十四日

（花押34）

鎌藏人様

御報

伊平左衛門尉

82

以上

態令啓候、仍先日者致參上候之處、種々御懇難盡筆候、

惟新様御氣相其後如何御座候哉、自是奉存計候、尤又々

致祇候可申上處、取亂候故、不及是非候、就者川上四郎

兵衛尉殿・本田源右衛門尉殿迄、以一書様子令申候、可

然様以御談合御披露所希候、恐々謹言、

（新納久元）

近江守

十二月廿三日

久元（花押207）

新納奎右衛門入道殿

御宿所

83 就御馬追三町衆迄祇候可申之旨、被仰付候、今年之事ハ、

乍早晚御晴、可（御被）出支度一人も無所持候、悉所領持申

候人衆（御者）を火事之時吉惡燒捨候之條、不及是非候、即刻

申者付候帷・肩衣等も晴着可被申ハ有間敷候、大概之火

事者思召候哉、況袷革袴之儀不單沙汰候、勿論緩疎之非

申事候、爲御存知候、菟角自是可申展候、可得貴意候、

恐惶謹言、

三月廿七日

忠元（花押）判

「上名」

圖書頭殿

新納武藏守

伊集院右衛門太夫殿

忠元

本田下野守殿

貴報人々御中

84 尚々、わの太夫と申ハ、肥後之隈府之沙汰人にて候

間、愚老退申候時、供を仕、女房子を捨罷居候者之

事にて候、此等も武役をする者同前ニ候、かた／＼

わつか三反〔三〕[●]て候、さしをかれ候ハ、可忝候、尙

細々松山方可被申上候、

一[▽]文珠院より、隱居付之所領、ひさつき中、二[▽]反買申度

由候て、態人を被遣候、御取成所仰候、

一[▽]松隈寺東堂さまより御使僧を至我等預候門口之所領、

是者替可給候へと、御配當御人衆へ侘之由候、是又被聞

召分可給事、偏各奉憑候、

一[▽]わの太夫、神領六反召上候へハ、役ハ難成申、少御禮

を申させへく候、御免許可目出候、恐々謹言、

六月八日

(新納忠元)
爲舟判

曾や老

拙齋

一[▽]伊宮内少輔殿

爲舟

八木民部左衛門尉殿

御宿所

(忠元一代文書) ニヨレバ「正文在伊集院書太(トアリ)

85 以上

貴札具令披見候、仍勘左衛門尉事、度々被仰越候、尤之

儀候、何[●](も)從是以一人御存分之通承、依様子御侘可申

候間、不能^(詳)祥候、恐惶謹言、

七月五日

新納武藏入道^(花押)
爲舟〔一〕

鎌田少外記殿

御返報

86 度々承候、御同名外記殿内衆之儀、取前より可返進候由

申候、乍去外記殿御心中、委承届可返申ため〔二〕[●]今まで

如斯候、同者貴老之御心中無御別儀之旨、一通をも被下

候、彼者ニも可罷歸候由、堅可申付候、巨細御使へ申入

候、恐惶謹言、

霜月廿四日

新納武藏入道^(花押)
爲舟〔判〕

〔宛書不知〕

87 御披官之儀ニ付、池上藤右衛門尉殿并御狀被相添候條、

勘左衛門尉具共雖申聞候、既可御成敗旨承付、申知

する人にて、不 於事實者、彼者申所尤候所を、憑來たる者候事候之間、承得候分御返事申候、巨細猶御使者可爲御演說候、恐惶謹言、

五月廿五日

新納武藏入道
爲舟(花押203)

鎌田少外記殿

御返報

88

如仰先日者御披官之儀付預芳札候、遂御報候處、又被仰越候、具承届候、扱彼人申分ハ、可被成御成敗由聞付候故、愚老を頼其身無疎意通申達、以御糺明之上、向後身上無心遣奉公可仕之旨、被申事候、近頃申惡儀候へとも、打頼被罷越候間、不及了簡申入候、於被召置者先被遂御糺明、一着之上を以御談合申候者可返進候、爲御存知候、恐惶謹言、

申儀ニて 打頼罷越候故、難默止候、其 申候、

討手などの事も大かた存候由申候、一人指越、於爰

元彼人申分被遂聞召届、事濟申候者、無別儀可返進候、

六月廿日

新納武藏入
爲舟(花押203)

鎌田 爲舟

89

猶々此所を憑候て參候者之儀ニ候、返し可申事仕に
くき儀ニ候間、是非共 御任可申覺悟にて何かと申候、巨細ハ五日中申へく候、以上、

如仰度ニ承候、子細從此方以一人可申入之由、先度御返事申候、然處、頃者此地御祭禮ニ付取紛、于今延引心外候、必近日使を以可得貴意候、聊油斷有間敷候、爲御存候、恐惶謹言、

八月五日

新納武藏入道
爲舟判

鎌田少外記殿御報

90 御披官爰許を頼參候ニ付、毎々預御狀候、畏入候、御分

別承閉目歸シ可申由、以使申談候、其辻毛頭無相違候、急度然々ノ使を可被懸御意候、此中頼來候園田狩野介方へ、相點合歸シ可申候、彼狩野介昨日ハ留守之故、御報延引申候、爲御存候、恐惶謹言、

十二月三日

新納武藏入道
爲舟(花押 203)

鎌田少外記殿

御報

91

已上

走者之儀承候、不致失念候所を頼來たる者之事候之間、能々申談彼者之進退行末健固之御嚶ヲ承、閉目可致御談合候、題目頼來候園田狩野介、今朝拂曉ニ(曉) 祁答院へ被罷越不有合故、御報無然々候、爲御存知候、可得御意候、恐惶謹言、

清和天廿六日

新納武藏入道
爲舟(花押 203)

鎌田玄番殿

御報

92

猶々御狀之日付者、正月十九日にて候、此方へ到來申候事ハ今月十二日にて候、不審ニ存候、爲御心得候、以上、

又申候、頃眼氣出合申候、依夫印判仕候、

如仰御同名外記殿内衆之儀ニ付、承子細度々ニ及候條、然々之人被指遣候へ、彼身軀之儀向後之事申承、定其分可申付候由、御返事申候、聊此方々無別儀候處ニ、其後外記殿々菟角不承、如何ニ存候、さてハ外記殿不慮ニ遠行被成候哉、笑止ニ候、定而就夫此中不承候哉、然者此度始而從貴殿承候、御眼前之儀ニ候へとも、又あらたまり承候儀、寢前外記殿へ申たる御返事ニハ可相替候、彼者申分委被聞召届て御肝要ニ候、恐惶謹言、

二月十三日

新納武藏入道
爲舟判

鎌田玄番允殿

93

長菊殿御披官之儀ニ付、又々預御狀候、扱者貴所御眼前

之故以、こゝより被仰始候哉、御尤候、然處彼者格護之人、日向へ十日計之暇を被乞被罷越申定候、其辻以夜深ニ罷立候、未尋申候、菟角彼人被罷歸次第存分を承、從是可申候、八幡も御照覽非偽候、取前彼者其地罷退事故、外記殿可有成敗之内意を承付參候條、其旨を能く被仰分承分候て、御眞實を吾等ニも被仰聞、承届次第ニ御談合不可有別儀候、急ニハ不及分別候、爲御存候、恐惶謹言、

二月廿三日

新納武藏入道
爲舟判

鎌田玄番助殿

御報

94 態令啓達候、自求广犬童休（意）書狀被遣候、夜前戌刻到來申候之間申上候、奥州様御船去十六日ニうしまと（ニ）て見たてまつりたる由、舟衆申候通被聞候之間、愚老迄注進申候由承候、尔ニ之子細（意）無之候得共、毎々如此之懇意被申候事候之條、彼（意）通相添次之時者御禮被仰遣御肝要令存候、従求摩之書狀上申候儘、不能巨細

候、正説之（意）ニ（ハ）不見得候間、國分ニも鹿兒嶋へも不申上、爲御分別候、恐惶謹言、

「年間不知糺すべし」

卯月廿四日

新納武藏入道
爲舟判

〔忠元一代文書〕ニヨレバ、「在山田助左衛門」トアリ

〔本文書ハ「舊記雜錄後編四」五八七號文書ト同文ナリ〕

「口キル、ク」

95

被召寄御糺明可然存候、但五本松ニ而仕候山賊、領内違候條、御穿鑿有間敷候儀ニ候ハ、以來重而申間敷候、

此方百姓中之儀者、任御法度、主計守より刀狩被仕、無（マツ）

正鉢儀ニ候、鹿なとねらひ候とても、武具を持山中ニ而

山賊出來候ハ、狩人可爲越度、恐惶謹言、

十月三日

木原德齋

新納武藏入道殿

〔忠元一代文書〕ニヨレバ、「在大口新納氏」トアリ

96 猶々京江戸弓すきの衆、もち料のからハ、ちと筈はそく候て、きしの引尾を付たるを被用候、委曲以面

申度候、さて／＼そのうち、御手前弥あかり候へん

にて申度候、

一天下弓第一ニはやり申候、弓よはく矢なともかろきやうなるを各御このミと見え申候、爲御心得候、

遙々不能向顔候、仍其地之蘇嶋の矢筈望數候由、民部老江申入候間、から筈、つねのからよりハちとはそく候て、いかにもかたき筈を二百ほと御伐せ可被下候、又まきハら筈・すやき筈の間五十、伐夫等入候ハ、仁禮左近殿へも申越候條、彼方へ被仰通候而、調候様ニ萬々頼入候、恐惶謹言、

八月廿七日

(重庸)

三原左衛門佐

(花押留)

山土佐守様

97 七月十七日着岸、以來〔者〕仕合具可申候へ共、此者如存

○之「本マ、也」

用繁候間、不能懇筆候、乍去幸侃かたへハ一書を以申下候、かしく、

九月十三日

(近衛信尹)
(花押留)

一 乘院

〔島津義久譜〕ニヨレバ「正文在坊津」乗院トアリ

〔本文書ハ〕舊記雜錄後編三 一一三號文書ト同文ナリ

98 主從四人指宿内藏助殿同三人、種子田喜右衛門殿同貳

人、荒田助左衛門殿同貳人、種子田八右衛門殿・岩田藤七兵衛殿・吉田喜之助殿・有村少左衛門殿・田島甚右衛門殿・肱岡助兵衛殿、右之人數、一左右次第ニ可申渡候間、被打立、如瀬之浦被差越、彼方ニ而飯米被受取、山田主計助殿下知次第乗船可有之候、川取之外ハ、四人相中ニ夫賦付、

人躰拾貳人

外持夫三人

右人數、一左右次第貝ヲ吹せ可申候間、則被相立、名護浦可爲乗船、船三枚帆三艘賦付可申候、壹艘ニ付人躰四人宛可被乗候、四人間ニ相中夫壹人ツ、賦付可申候、飯米茂福之江方相渡儀候得者、被取籠候間、若無御用時返上成兼可申候條、三日飯米手前より用意ニ而

も可然候、難成衆之儀も可被受取候哉、御談合有度候、
長崎迄被差越儀ニ而者無御坐候、已上、

亥七月六日

賦所

指宿内藏助殿

99 俄上京之由、霖雨之節御難儀察申事^②候、然者御國御仕
合結構ニて珍重候、將又目錄之通令進之候、遙不得思慮
近日參越憑存候、恐々謹言、

卯月廿四日

本多佐渡守

正信花押

新納旅庵老^(長佳)

御宿所

(本文書ハ「舊記雜錄後編三」一五〇二號文書ト同文ナリ)

100 重久名之事、持合ニて候間、何篇不相濟由候、就其諸所
六ヶ數儀出合候時、兩人被成談合事成候様ニ可然候、先
と一節たるへく候、追而可申談儀候、恐々謹言、

十二月廿二日

伊右入道^{忠横}

幸侃^(花押27)

平田狩野介殿^{宗應} 「慶長五年戰死于
上原源右衛門尉殿^参「向氏關ヶ原之役也」

101 御□之儀、師匠以來御奉公被申段無其隱候、子細者朝□

上様之御祈念等之儀被仰付候、殊更□御□被

被上申候、別而彼御禮可被成之段、度

被仰出候へ共、依御取亂之刻、いまた一かとの御禮な

く候、彼仁之事ハ平僧なニにてハ無御座候、□家三ツ二

分知行□□

可被指置候、菟角平寺家にてハなく候、如此申分□

□肱枕老へも又何れへも□御談合衆□

□乍去何肝付へ可罷越候條、やかてまかりかへ

り談合申へく候、已上、

六月十一日

長壽^(花押195)

上原筑前守殿

参

102 追啓御兩所へ、各前ニ墨壹雙・筆二對宛令進獻候、

拜期再音候、已上、

依幸便啓一封候、仍矢野主膳殿去年已來「家久公」少將殿様之御

勘氣故、方「元卿カ」と流浪痛敷存候、夏中者當山籠居候而、則青

巖寺江令召請、一節相物之俗人之寺棲果而不似相事候之

條、連々少將様江御有免之御任言可仕心中候、此趣

惟新様へ御傳達所仰候、乍憚嶋圖入并此志紀御兩所江申

越候、以御次此旨於被仰者可爲本望候、恐々謹言、

六月十六日

「高野山」
青巖寺法印
政遍「花押圖」

川上四郎兵衛尉殿

本田源右衛門尉殿「視商」

「まいる」
御宿所

猶以自然御狩藏へ近付申候てハ、猪行事か曲事ニ罷
成候する、其時「ハ」不可申付候由、言上いたすべく候、
右入念ヲ申渡へく候、下つはなと候て此分たるへ
く、猪行事か下知ヲそむき候する者、兩國「ハ」において
誰人ニよらす、せいはい可申、かたく被申付候、以

上、

御馬近日可入由候、さてハ上様も定而やかて御下たるへ

く候、それ付、三「後」くほうしろひらの野山かたへたてをき

候やうニ、薩摩摠行事殿ニ而可申之旨ニ候、少茂油斷有

間敷候、やかてたふせ谷山ニも此うつしヲ遣し候て、か

たく仰可候、かしく、

七月廿九日

薩州小狩行事印

蒲地伊賀入道との

「右狀讀兼候所多シ本マ、寫置也」

尚々山城入道殿ハ、城やしきにも御移なされ候て哉、

承度候、ふもと人ハ當分無之候之間、とかく城屋敷

「ヲ」可進覺悟候、重而御談合申へく候、

先日其方城屋敷配當事申越候へ共、今少御ひかへ「御有」談合

候へく候間「候重而御談合」如此候、爲御心得候、恐々謹言、

十一月六日

町田入道「久倍」
存松「花押」

蒲地伊入道殿

大野將右衛門尉殿

御宿所

〔町田氏正統系譜〕ニヨレバ「國分蒲地孫太郎藏」トアリ

〔尙〕^⑩、此石之事、然與相究候て可承候、少も由斷あるましく候、

太守様來月二日、田布施^⑩御光儀^⑩て候、三日四日間其地八幡宮へ御社參たるへく候、可其心得有へく候、石見九兵衛尉へ被仰付こそ肝心候、

一 壹石付貳舁出米之事、壹石付壹舁五合出米事、然者相究候て可承候、來月二日ニ京上之船^⑩入へく候間、如此候、

一 今度之人別錢事、早と此方へ可被持せ候、於此地行衆へ可相渡候、恐と謹言、

二月廿六日

町羽入

存松^⑩〔花押〕

大野將右衛門尉殿

蒲地伊入道殿

參

〔町田氏正統系譜〕ニヨレバ「國分蒲地孫太郎藏」トアリ

尙と、此許にてハ平田駿河入道殿木脇^{〔本ノマ、〕}善入道殿へ御合點有へく候、以上、

急度申入候、

一 公儀より無御用人上落候てハ可爲曲事候、此由申届候事、

一 別而可致談合之子細候、貴所御參上なく候者、所之衆中兩人程今月廿四日ニ當所へ越着候様、可被仰付候、同之自身御越候へと存事候、爲御心得候事、

一 其許衆中二拾石より内之衆、殿文字を除、銘とニ家名を帳ニ被書立候て可預候、御用之儀候之間、不可有御油斷候、恐と謹言、

五月十八日

〔本田親貞〕
本下入

三清判

蒲地伊賀入道殿

尙と、きりつほの下女と候へ者、奥へ御格護ニ相似候て惡候之間、兄之玉利名字之「事」之下女と（前）申て可然存候、兼又枯穂之帳御持せ候へ共、門屋敷浮免持合候人無之候之間、其元沙汰人へ談合被成、早と付記可被差越事專一候、當所衆之内爰元へしれ申候（前）分（前）書付候、持合之仁（前）しれ申候へ共、在所何方と無御坐候間申事（前）候、

奥へ被召仕候きりつほ之兄玉利名字之仁所へ、豐州之者有之由、只今納所衆より承候、其元糺明（前）書付、同前可被差越候、左候へ、きりつほの下女とハ御無用ニて候、玉利名字之下女と可有之候、乍不申日記之書様此中申越候之間、不能細筆候、恐と謹言、

町田羽入

正月晦日

存松（前）花押（前）判（前）

大野將右衛門尉殿

蒲地伊賀入道殿

御宿所

〔町田氏正統系譜〕ニヨレバ「國分蒲地某藏」トアリ

尙以其方へ公役之人數別紙ニ書付候て持せ候、此日記之内（前）山田藤内左衛門殿ハ當時川邊之新城へ罷居候間、其元より被仰理候て可然候、兼又御方門前屋しきの儀ニ付、比紀州合點不參候哉、其旨我共ハ乍若輩無心元候、さてハ最前之墨付を可被見せ候（前）それ（前）候たニ紀州手前より最前被遣候墨付之儀候間、今更見させらるゝにおよハす候と存事ニ候、それハ何度被仰（前）存事ニ候、兎角入組ハ存松被罷下候ての儀ニ候（前）被仰遣候て可然候、（前）然爰元へ承候（前）其分申へく候、若又可承儀共（前）候（前）早と（前）承（前）候、（前）以上

御札令披見候、仍而御方へ移衆皆と就公役可被參候由候哉、委細得其心候、即時ニ可申渡候、乍去爰よりいしう（前）被付公役候衆多と候、（前）其「元」を折はつし候て當時伊作（前）公役之人（前）を書付候て持せ候、彼衆解役之分ハ先日此方へ大野將右衛門殿御越候刻、巨細付立候て相渡候間、定而其元へ御上候と、存事ニ候、尙以彼衆へも御方へ

可被參候由候之間、即時ニ申渡へく候、定而追付可被參

候間、不能細筆候、恐々謹言、

四月十一日

町田源左衛門尉(附)
久政(判)

蒲地伊賀入道殿

御報

〔町田氏正統系譜〕ニヨレバ「國分蒲地藏」トアリ

109

返々以參可申入儀ニ候へ共、乍自由以一禮申候、入

道へも御心得候て、御傳達所仰候、以上、

昨夜者御尋殊ニ種々御懇之儀共令祝着候、事之外給醉無
正躰候間、尤以參御禮可申入之處、却而御六ヶ數可思食
令遠慮候、併無沙汰之様ニ候間令迷惑候、仍五明貳本、
誠之御祝儀迄ニ候、猶重而以參御禮等可申述候、恐々謹
言、

正月廿四日

進藤大藏少輔
久治判

蒲地二郎四郎殿

御宿所

110

以上

一書申越候、然者當年御諏方御祭禮之居頭役、町田名字・
長野名字ニ參候間、其地長野彦右衛門尉殿名字中之衆同
心ニて、來月廿日ニ必々參上候様ニ可被仰渡候、聊由斷
有間敷候、恐々謹言、

六月十三日

川左近監

久國判

喜攝津守

忠政判

111

尚々、夜中ニも御舟さへ參候者、御打立候する由候、
此狀ととのへ申候へハ酉刻ニ成申候、御舟不參候ハ
、咲止千萬ニ候、彼九さ衛門尉かろくと參候、可
被添御心候、已上、

不圖以一行申入候、今日其許へ可被成御越山之儀、しか
と相定候へ共、御座船當濱へ無之候之故、平松御老中よ
り今朝被仰通候、然共順風惡候て、只今申刻までハ自帖
佐御舟不參候、誠御前ハ御支度被成候て御待候へ共、無

御了見候、扱々陸路も御越山候する由、上意にて候へ共、
以之外降雨にて、路川洪水ニ候間難儀候、依此等之儀御
延引にて候、一刻も御急にて候へ共、何方之事も不聞候
而、餘之御かミ様咲止之儀と思召候間、一人申付候、爲
御存知候、此等之趣 維新様へちと可被成言上事所仰
候、恐惶謹言、

六月六日 酉刻

伊地知甚さ衛門尉
重起(花押22)

川上日向守

忠□(花押86)

秀堅老

伊勝左衛門尉殿

岩縫殿助殿

参人々御中

112

猶と具御使へ申候間不能詳候、以上、

吉田殿江参銀子拾枚御持候、我等受取申候、吉田殿江猶
申、無別儀候ハ、右之銀子相渡、吉田殿請取を取候而
可被下候、江戸江之御越御大儀候、御仕合能臈而御上洛

待申候、恐と謹言、

六月廿三日

本田助丞殿

床下

「近衛公付伊勢因幡守貞知入道如雲」
友枕齋
如(花押32)

113

態申入候、

一吉田殿江御祈禱之事度と懇ニ申候處、爲其計ニ此間吉
田之在所へ御越候而、被成祈念候而御禮等御下候、寶
現靈社之御たゝり、少も有ましき由御申候、玆重候、
一貴所御上候時、銀子拾枚拙者あつかり申候、今度相渡
申候、右衛門罷上候時、緞子壹端御上候、是又渡申候、
吉田殿之書付御禮被仰下候、

一此間使を申鈴河豐後守かたへ銀子壹枚被遣候、是も渡
申候、忝之由申候、請取申書付下申候、

一宰相様御鏡御法名、今度御上候、宰相様へ御事もとか
く申事無之候、但又御望之事も御坐候哉與先御かゝミ
ハ拙者あつかり申候、依御左右下可申候、

一惟新様へ以書狀申候、可然之様御取合頼入申候、恐々謹言、

返く吉田殿御祈禱相調近比御目出度候、

十一月十一日

友枕齋

如□〔雲〕
〔花押32〕

本田助丞殿

床下

114 如仰今朝者細々申承大望此時候、其後自是社とかく可申入候處、何かと取紛候て御無音心外候、拙者も明朝出仕申候て、御暇可申かくこ御坐候、貴老も御さし出候ハ、今少御談合申度候、源右殿貴所御奉公候へ者こそ、拙者も心安罷居候儀共候、こゝを以是非共御合點候へかしと存計候、今夜終夜御思案有へく候、我等も思案申すへく候、大事之時分御坐候間申事候、恐惶謹言、

七月十八日

六右衛門尉

正親〔花押33〕

本田助允殿

貴報

115

猶々申入候、此借用ならず衆中々數々借用御坐候、皆々初秋可被相究由、右兩人にて平左殿被仰置由〔伊勢貞忠〕候、是も同前たるへく候、其時分涯分肝煎可申候而、又其後ハ一向御無音ニ罷過候、所存之外候、何共五

三日中參候て可得御意候、已上、

如仰先年鹿兒島々御光儀も御雜賞衆中々上被成候割儀ニ而、御物御取替被相調候、此始末御下ニ罷成調申候付、〔△借用ノコトナルヘシ〕借狀なと仕置候、此算用之儀、伊平左殿御上洛前ニも我等前々有與左殿・伊主馬殿申候へ共、如此之借用方、幾通も御座候間、其同篇ニ可相濟様ニと之故、不及力候、其後又内山乗右殿・伊地知掃部兵衛、借用方之使させらるゝ儀御坐候條、平左殿へも此兩人迄内儀申候へ共、右同前之御返事ニて候、初秋ニ可相閑由候間、任其儀申候、我等としても聊非油斷爲御存候、恐惶謹言、

五月八日

海老原掃部助

爲信〔花押63〕

本田助丞殿

人々御返報

116

猶々明後日鹿兒島へ日記可差上候間、今明日中ニ相
濟候様ニ御分別專要ニ候、少も御延引有間敷候、以
上、

貴老御差出算用候而、公儀江各御同前披露可申覺悟候、
然ハ於京都之給銀不相濟候間不定候、於京都馬壹ツ之衆
者銀子三百目宛盛候由風聞候、實儀不相存候、源右衛門
殿御然談ニて預示度候、恐惶謹言、

二月九日

比志島源兵衛

國幸(花押216)

本田助丞殿

人々御中

117

御門王條王之寫一ツ被持せ候、先ニ拙者請取置申候、や
かて比源兵衛へ可申候、昨日ニて條書初條と帖彦々本六
右老へ被申候條書相違之由候、彼是承届候、出合之砌可
申候、將又書狀之内兩舌之事共分、段々御置目被相背候
分、何も一稜之條書ニて可被下候、兩人共ニ貴老被仰た
る條之内、失念申たる事共可有之候、爲御存知候、恐惶

(比志島源幸)

(帖彦々光(本田正)

謹言、

五月十六日

本田助允殿

御報

(五代)
五右入

友喜(花押100)

118

御寺領之内加世田小湊之鹽屋之儀、加子役可爲免許候、
若於其所殿役等可有之時者、堅固ニ相勤候様可被仰付
候、恐惶謹言、

卯月十日

伊勢兵部少輔

貞昌判

比志島紀伊守

國貞判

「川邊」

寶福寺

玉搦下

119

「川邊寶福寺文書」

熊嶽へ、先年 日新様以御判しほ屋壹間被相付候、其地
へ有之由候、近年雖被成(寄)破候、今度又被成御付候、
被相糺無吳儀可被引渡候、巨細ハ御使僧可申候、恐々謹

(寄)

言、

三月四日

平太郎左

増宗判

本田助左衛門（尉）殿
（御ナシ）

御宿所

（本文書ハ「舊記雜錄後編三」一五四二號文書ト同文ナリ）

120 熊岳之儀、從前々諸所以勸被相續候處、近年御分國諸式

御改易以來、斷絕之所有之由御理之條、則近引付候、如

舊々不可有吳儀之狀如件、

三月廿八日

比志嶋紀伊守

國貞判

鎌田出雲守

政近判

忠徳山

寶福寺

玉机下

(表紙)

年間不詳

附 錄 舊 記 雜 錄 卷二

書物

『加治木鹿屋仁右衛門』

一 先年關ヶ原落足之時、某事肥後表罷下候、然處ニ彼地ニて薩摩入之由候而、黒田如水・加藤主計正・龍藏寺・橋左近將監其外國衆餘多肥州八代河田村へうち入、萬事其催候處ニ參合候、然者河田村肝煎所者、先年河上三河入道殿宿被成ニ付、我等知人之儀候間、彼

人ニ取合申、軍衆ニうちましり、彼表之やうす靜ニ見申候、其外行之様子共、彼人念比ニ物語申候、其上三河入道殿へも御傳言と候て申入候條ニ、

一 軍衆無人衆之事、

一 伊集院源次郎殿野心ニて、使兩度參申候ニ付、彼肝煎小船二艘度ニ仕立申、河田村うやなきより指下候儀、其かくれなき事、

一 諸廻船御用心可入候、からくりハ船手方より入申候事、

一 薩方手強可被召出候ハ、代表之衆もさつま方へ御奉公司申上之由被申候事、

右之通承候而、十一月十日ニて軍衆ニ打ましり候て、芦北表ニ罷出、諸大將之もやう、人數、長のほり數等まで委數見及申、則其日つなき浦より山ニ入申、それカ出水・米之津ニ罷出候事、

一 出水表ニ者紹益様・本田六右衛門尉殿御座候、則右之通申入候、堺目様躰念比ニ被聞召候、大慶之由候、早

と帖佐へ罷越、惟新様へ可申上之由候事、

一惟新様被聞召上寄特成儀、態山くゝり被成御遣候而も、仕合ニより今程迄有ましき儀も可有之處ニ、此度と爲御家致忠節候、可被加御褒美之由候而、忝御意候、則伊勢平左衛門尉殿を以被仰聞候、擬者追付龍伯様薩州様へも可申上由候而、新納四郎左衛門尉殿被成御付、富隈へ被召出、於彼地ニ御兩殿様御同前ニ被聞召上候、御使鎌田出雲守殿・平田太郎左衛門尉殿ニて御座候事、

一其後筑前々黒田甲斐守殿京都之無事可有取成由、使として鳥居勘左衛門尉殿被差遣候、彼人をハ日州八代へ被召置、伊勢平左衛門尉殿・相良五郎左衛門尉入道殿御越候刻、某被召列、其後筑前へ我等事三度罷越、種々御使共仕候事、

一其後京都無事相調御上洛之刻、伊勢平左衛門尉殿被成御供ニ付、我等中原圓乗坊被成相付、方々御奉公申上候事、

右條々如此御奉公仕候ニ付、最前御褒美之首尾として、

知行十石・屋敷一ツ、入來市比野村へ被下候、御使伊勢平左衛門尉殿・本田源右衛門尉殿ニて承候ニも、當分御隠居之躰ニて、御知行相迫ニ付、乍少分被下候由候、忝御意候、其外高麗人兩度罷立、何篇無別儀御奉公之儀、相勤申候へ共、今度無足ニ罷成、迷惑千萬之躰候條、可然様ニ被聞召入可被下事、奉頼候、

已上

卯月廿四日

鹿屋壹岐守

122

掟(島津家久)
(花押山)

一夜不入うちにせびをおろし、門番堅可申付事、

一無餘儀用ありて、夜中に門外へ出者有之ハ、町田勝兵衛尉切手を取可出事、

一大酒物見物詣可爲停止事、

一喧嘩口論兼如令法度不可有相違之事、

一普請其外公役之儀ニ付、疎略之輩あらは無用捨届置可

遂披露事、付暇を不乞他出有間敷事、

右條々堅可相守之者也、

文月十日

123

一天正十五年四月廿八日、平佐城從大閣様被成御責候、其節之地頭桂神祇殿籠城、寄手之大將小出大隅守殿御舍弟大將殿九鬼八郎殿ヲ、我等祖父原田帶刀、以弓右之八郎殿ヲ射申候、折節太閣様御方へ相圖之貝聞得申候故、夫々双方和談御座候、其砌大隅守殿家老佐々木鞆助殿・佐々志賀丞殿を以帶刀被召寄、大隅守殿於御前承候へ、八郎殿承候矢者、何番目之矢ニ而候哉と、被仰付候付、八番目之矢ニ而御座候由爲申上由、其日矢九筋射出申候而、九人射伏申候矢之内、八番目ニ而候故、右之由返答申上、則御悔仕候由承置候儀御尋、書付如斯御座候、此段日帳ニも留置爲申儀御座候、已上、

丑五月廿二日

原田市兵衛

限城
御囃衆中

124

一平佐御城普請ニ付、普請衆兵糧渡方之儀、一日ニ三度、一人ニ付七合五タツ、之事、
一就右之儀而、御藏入より可被出御用^④并普請衆之事、可隨御觸事、

右兩條之事、北郷作左衛門殿・相良新右衛門殿可被仰渡候間、ゆるかせなく可被相調也、

十一月十一日

伊勢平左衛門^(貞成)判

鬼塚主税助殿

宮路三之允殿

(本文書ハ「舊記雜錄後編三」一五六九號文書ト同文ナリ)

125

一令申候、大山三次殿不慮之儀出來候而、御成敗被仰出候、然者大井七左衛門殿・拙者兩人被仰付、正月四日伏見方大坂江罷下り、明五日三次殿へ腹切せ申候、年

之始之御奉公ニ、大事之儀ヲ被仰付、心遣ニ存候處、

無吳儀三次殿腹切被申、外聞能御使申濟、令満足候、

左候而、今月七日ニ伏見ニ參り、同九日殿様御供仕、

又大坂ニ罷下候、此等之儀爲意得申事候、謹言、

正月十二日

(有馬)
藤七兵衛純房判

126

一好便候條令申候、仍世上之事六ヶ數罷成、さハかしく

鉢ニ候様子者、内府様御内衆伏見御城櫓籠候を、諸

軍兵取卷、夜白ニ責候、未落去候、惟新様奉始御供

衆方無隙軍(身)被成候、我等事此内大坂江被召置候得

共、人數一分伏見(被)召寄、當時城き之被仰付、相調

候城より之鐵炮ニあたり、手負有之候得共、我等事

合候事、さりとてハ幸之儀ニ候、隨分無油斷御奉公可

仕覺悟ニ候、其元之儀何篇無油斷分別頼入申候、千代

丸兄弟手習其外人ニ成候様、吳見頼入申候、恐惶謹言、

七月廿三日

有馬藤七兵衛純房判

宿許

まいる

(本文書ハ「舊記雜錄後編三」一一三九號文書ト同文ナリ)

127

其表御軍勞之由雖承及候、互遠路故申隔候之處、自京都

之書狀遮而被遣候、御丁寧之至畏入候、其方無爲御座候

哉、爰元御同前候、仍喜入衆大方大坂被參候歟、肝要之

儀候、殘而二三人候之由、如何之分別候覽、是非之外候、

彼衆替御のほせ候て可然由、弥太右衛門尉上書ニ候、鎌

雲州へ被得御意候而肝要候、猶追々可申承候、恐々謹言、

七月廿一日

爲舟(花押203)

前田久右衛門尉殿

御返報

128

『水引執印文書』

今度相論之事、以有恕之儀先ニ被差置候、神妙之至候、

仍惣官職之事任前之筋目可有執務候、社司神官等如先規

可隨御下知之旨被仰出候、以此趣可有御成敗條可申由

候、恐々謹言、

【文明中】
五月十日

【平田右馬助】
兼宗（花押219）
【村田肥前守】
經安（花押242）

執印殿

（三郎友秀ニアタル）

129
『水引文書』

度ニ承候、惣官職之事、執印職ニ御定候上者、不可有餘儀存候、殊今度御子息其役取汰候事歷然候、雖然爰元致披露、濃州相共ニ可申達候、少も無御等閑之儀候、恐々謹言、

【文明中】
霜月廿二日

【村田肥前守經安】
經安（花押242）

執印殿

御返報

130
『水引執印文書』

猶々各八城へ被登せ候へ共、貴所之事者御造營ニ別而御入魂肝心たるべく候、

就御造營千部會之侘、各御申ニ而候歟、乍去御感無餘儀子細候之間、不用有間敷様御達肝要候、題目御祈禱之儀

候之條、難澁無之、入魂可目出候、恐々謹言、

二月八日

（町田）
久倍（花押235）

（平田）
光宗（花押220）

（伊集院）
忠棟（花押28）

執印河内守殿

御宿所

131
『水引執印文書』

□□々前廉其許へ□□ニ御案内可申候へ共□□兒嶋御方角之□□之條申候□□先かこしまへ□□伯様今月□□新田宮□□爲御社參候、此等之趣、至于鹿兒嶋申入候、定而其許へ可被仰渡と存候、其地之儀彼是御入魂尤候、猶期後音候、恐々謹言、

菊月十八日

喜入大吹助
久正（花押92）

平田久兵衛尉
宗親（花押221）

執印殿

御宿所

『國分宮内澤氏家藏』

野村方

山北若狹守

落合伊與守

大脇方

近年

佐宇津次郎右衛門尉殿

荒武彦四郎

野村又五郎

河野兵衛左衛門尉

落合河内守

大脇孫二郎

一式引物於鶴戸 嶋津殿江御參會之時、落合□□仕られ候、
候、

一祐國様くしまへ御越候時、式引物野村□□仕られ候、

一相良殿御祝儀定之時、式ノ引物長倉兵庫頭□□、求麻

よりハ相良左京亮ひかれ候、

一祐國様佐土原へ御鞆入之時、式ノ引物落合河内守請取

被申候、

一近年嶋津殿御祝儀之時、式ノ引物垂水讃岐守、あなた

よりハ本田又二郎、

一正月御年男代と稻津・落合申され候、御隠居なされ候

へハ、野村方なとも被申候つる、其外荒武方なとも申
され候也、^歟

一祐堯様之御時、野村方御年おとこ申され候へ共、おも
てかたの御酌ハ申付られす候、おとなしきかたにて候
つる、御隠居にて内と御年男にて候つ□、御惣領の御
年男ハ前代より稻津・落合申され□

一正月三ヶ日御わうはんにハ、代と初獻ハ御年□御酌被
申候、三獻めハ長倉殿、二獻・四獻ハ山田□津留・大
脇方、五獻めハ稻津方御年男候へハ落^(合カ)□、落合御年お
とこ候へハ、稻津方にて候、

一正月御的はしめ長倉殿・荒武、すえハ落合・長嶺、彼
名字被仕候事ハ爰共しこにて、矢合共被申候而、吉例
にさせられ候、

一^(結)つかひ弓此前ハ三番にて候、御日記共候らん歟、

一番池尻左馬助殿 荒武方

八八十町御給のよし申候、

一祐重様御下の事、御年來衆馳走被申候、中にも宮田法

玄坊・垂水辨阿舍利、別而御奉公申され候と申傳候、
其時のおはしも宮田にて候つるなり、

一 祐安様其後他腹にて御座候、木脇長永の□に御成
候、それより凡御祝儀の御調候歟、聶□御時御座敷
にハ長倉次郎左衛門尉殿、後ハ常□申御參候、式の
引物御太刀・鎧ハ落合出雲□請取、鞍置馬ハ河崎丹
後守、はた馬ハ湯□治部少輔と、久しき日記にあり、

一 祐立様土持殿へ聶に御成候、祐堯様も聶に御成候、
土持殿をも越前守殿御姉上にて、聶にめされ候、うち
むかひ・打送・御こしよせ、稻津・河崎兩人、御打迎
の人数長倉殿・落合殿其間湯地・河崎・野村・長井此
衆申され候、御日記御座候らん、御一家之内衆にて候
つる哉、

一 山田・荒武・津留・大脇ハ當國之住人也、古ハ京都之
取次を被申候なる、御下向ニよて御年來になられ候、
御酌・かよひ、御佳例につゐて被申候、長井ハ山田に
て候、

一 垂水ハ富吉の住人、祐重御下向の時別而忠節申され
候、土持一性也、

一 深藏殿ハ祐宗の御子、落合北坂入道息女の腹也、御親
父祐光の御ため、深藏所町祐光寺と號してくたし御申
候、俗別當ニ御成候て御かくこ候歟、今ニ祐光寺とて
木脇ニあり、さやうなる御筋目によりて、今ニ七月御
寺參の御代めされ候哉、七月御寺參之時之御太刀ハ、
野村方持申され候、自然ニ禁忌之時も同前也、

一 八幡御神事九月十六日也、御社參騎馬にて、御さきう
ち長倉殿・落合方兩人馬上也、八幡にて御宿より御社
參候時ハ、かちにて石松殿稻津方御供ニ候、御太刀御
進宮ハ落合方にて候、

一 祐堯御くし、落合出雲守はやし被申候、御もりハ雲州
之子治部少輔被申候、

一 祐國御くしはやしハ、祐堯御はやし給候、御もりハ垂
水中務丞申され候、

一 尹祐御くしハ祐堯様御はやし候、御もりハ稻津雅樂助

被申候、

一 祐充御くしハ尹祐御はやし候、御もりハ落合源左衛門尉申され候、

一 上別府殿ハ小申にて候ツ、別府六十町もたれ候、在京之由被仰候處、小申の事小番共申候、伊東殿名代として罷のほり候ハ、とかく被申候事有間敷よし御申候間、さらハ伊東之下野守として上洛候へと被仰候、其より入一家としてこそ、上別府と申候へ、於京都御用に被立候、忠節の方也、

一 上畑之肥田木、あやの山ノ陳之時、忠節申され候間、六郎を給、代々六郎次郎と申候、

一 御前迎之時御こしよせ、稻津方・河崎方、御中間ふせき屋、

一 いちの臺のこしよせ、荒武方兩人、御中間くら衆兩人、御はくのこしよせ、井戸川・井尻兩人、

一 御前様御社參など御ありきノ時御こしよせ、落合名字兩人、御中間ふせ關屋、

一 祐安の御もり落合出雲守、

一 祐立之御もり垂水兵庫頭、

一 興禪寺、祐重の御太刀りほんと申候御寺也、御くたりはしめに御建立之御寺也、

一 光臺寺、祐重御建立之御寺也、

一 八代常喜寺、祐安の御寺也、

一 長持寺、祐立・祐堯之御代よりの御寺也、

一 光照寺、祐國之御建立之御寺也、

一 惣昌院、祐堯之御寺也、

一 其外之諸寺、御代々ニ御建立也、

一 嶋津忠國、(伊東祐安女ハ忠國ノ母ナリ)祐安の御聲也、嶋津立久、祐堯之御聲也、

一 嶋津忠治、(伊東)尹祐の御聲也、三代如此相良殿・新納殿・(忠國室ハ新納忠臣女)

尹祐之御聲也、

一 伊東ノとうの字、前代ハ藤と云字にて候つるを、頼朝一段祐經へ御念比たるにより、東のかたに近く屋形作有之、東殿と申たるにより、東の字をいまに書侍ると也、

一祐持御下候、やかて御のほりにて、其後祐重虎夜叉役にて御くたり、野州の御子を養子にめされ候て、官方將軍かたの御弓矢の時御用に御立候、祐安ハ他腹にて候、二番めにて候也、木脇長永のむこに御成候、祐立土持殿の聲に御成候、興禪寺前住ハ他腹之兄、祐堯土持との聲、興禪寺太けんハ祐國之兄、他腹本莊名字の女房達腹也、越前守殿ハ土持腹、祐國ハ野村右衛門佐兄弟之腹、祐邑同三河守殿母上同兄弟三人にて候、祐國ハ辰のとし、越前守殿ハ丑の年にて候へ共、越前守殿大方興禪寺二代も他腹により、かやうに候とて、殊外御うらミ六ヶ敷被仰候間、八幡にて御くしおろし、惣領にハ祐國御成候よし申候、祐堯被仰候て、池尻左馬頭・落合藤左衛門尉八幡にて御くしおろし、祐國惣領に御成候、辰の年丑の年にて候を、同年にて候つると今に申候方共へ、昔の事しらざる衆申事にて候、一就御當家之儀式、前代より大とちと申日記御座候つるを、都於郡の内城炎上之時分失候也、それより依事前

と之作法相違之儀も候様ニ承候、向後も書付物肝要たるへきよし、年行たち申され候、

右條と落合河内入道・荒武古丹波入道其外年行衆、連と物語被申候、其上久敷日記などに見えるを少と書付候、頃者かやうの儀式相違之事共候間、爲後日書置候者也、

落合若狹入道
兼朝

133

『福昌寺文書』

如御存知以御談合三ヶ國之人勢之事、福昌寺江可有御合力儀定候、就夫當年者日州江廻來候、諸所相應之御入魂可目出候、巨細者從貴寺可被仰渡候、恐と謹言、

〔天正中〕

仲春二日

（村田）
經平（花押21）
（平田）
光宗（花押22）
（伊集院）
忠棟（花押28）

一所衆

諸地頭

御宿所

猶と薩州衆昨日之御動、可申上様無御座候、何方も其取沙汰にて候、以上、

昨日者於城中初而得貴意、扱と貴老様御動手柄之様子、驚目候、無比類通難盡筆舌候、敵貳人之頸切捨ニ被成候、我等事も頸切捨申候、于今存候へハ捨間敷物をと存候、定而御手前様も其分ニ可被思召候、令推量候、猶以貴面委曲可申伸候、恐惶謹言、

二月廿九日

重次判

薩摩様御内

片山次兵衛尉

指宿内藏助様

重次

人々御中

義弘

年やかく嘗ても盡し廻り

くれ行や石はしる水の今年哉

武庫様御名代之由承候之條、乍斟酌せめての御奉公ニと書付進上申候、右二句之中を慰敗尊老・玄與尊老・定庵

(川上久陽)

など御覽候而、御定奉憑存候通、乍恐被仰達可給事、所仰候、雖不及申候、私へ拜領之題、早と誰人歎遊候之様、御談合專一候、恐惶謹言、

十二月七日

拙齋

爲舟判

(宮原兼晴)

秋扇老

參

『執印文書』

改年之御慶重と目出度申納候、仍川幡新左衛門殿事者、連と嗜被申方にて候間、知行四百石之目録を今月末ニ可被下之由、舊冬堅固ニ被仰付候條、先と爲御内證用書札候、在所之儀ハ罷居られ候處へ、乍召置たるへく候、名之儀者五大村を望次第可被遣候旨候、恐と謹言、

(被)

【年間未考】

正月元日

桃山權左衛門

久高判

『寫在土持氏』

追而於無御納得者、何ケ度も御任可申候、往反遙々之儀候之間、同者今度一着之御返事所仰候、已

『野田感應寺文書』

野田感應寺之重物繪賛二軸

黃門様被成御覽候、先之寺江被返進候間、何方江茂不參候様ニ可有格護候由、住持江可被仰渡候、爲其一書如斯候、恐々謹言、

執印丹波守殿「本マ、」
御中

八月十一日

川上左近將監

久國判

喜入攝津守

忠政判

下野守

久元判

蒲地備中入道殿

御宿所

上、

其後者任無題目、遙久不通（相）過候、心外之至候、仍（義）守様被成御下向、上（下）之満足不可過之候、定可爲御同前候、隨而其元御料所ニ罷居候俣木と申者、從當火事出來候歟、自隣家出來候へ共、彼俣木火本之由取沙汰候之故、是非難申分致退出候、彼者事者、某自先祖代と被官之筋目候之間、其元打入之自時分致見參召置候、無其紛候、乍去遠方ニ候之間、年中ニ一度も爰本江無罷越儀茂候、何そ爲（二）雖不罷成候、右之以辻與風此方江罷越候、誠（一）御法式破候事、聊尔千萬候、併彼者ハ火を出候ハ由申候、縱事實ニ候共、爲其咎一篇罷退候條、且者彼對拙子被取外聞、且者到彼者可爲御慈悲候之間、本服仕候様御分別憑存候、此旨爲可申述態令啓候、萬々期後音候、恐々謹言、

十月十七日

新納武藏入道

拙齋（花押 203）

土持大膳亮殿御宿所

參

140 『寫在土持氏』

猶々此節之迎之事ハ先以延引所仰候、

先刻御越之砌如約束、定此比者迎可預候歟、連々申候様罷越、遊山共雖大望候、此廿日比此者へ萬部之開白候之條、拙者も左様之故障等難默止、僅此節者參着罷越間敷候、當者以時分自是可申越候條、其境節可到談合候、誠雖御懇之儀候、先以重而可罷越候、爲御存知候、恐々謹言、

九月十日 忍性入道
江鯢(花押98)

大膳亮殿 御宿所

141 『寫在土持氏』

尚々千旬日限者來月朔日ニ始申候間、以來儀候者、

來廿八日九日之間ニ待申候へく候、

遙久無音之至所存之外候、仍珠長公鵜戸山の參詣、爰元

通道被成候を抑留申候、其故者、千句連歌之立願御座候

間、此度成就申度佳覺悟如此候、然者執筆事闕ニて不及

了簡候、御辛勞と申憚多雖申事候、執筆を憑入度候、被

懸御意候者可爲本望候、尤連衆ニ申請度候へ共、餘々執

筆無御座候條、無御隔心儘ニ申事候、御出可待居候事候、

恐々謹言、

卯月廿六日 久治(花押31)

土持大膳亮殿 伊集院下野守
御宿所 久治

142 『寫在土持氏』

彼博士田上左京進之事、當所へ然と堪忍仕候、然者其表可致徘徊之由候、旅人之儀候間、自然失候時者旁可被添御心候、恐々謹言、

三月廿三日 上井次郎左衛門尉
秀秋(花押59)

瀧聞越後守殿

土持大膳亮殿

御宿所

143

「寫在土持氏」

返々圖田帳之事以御才覺御借用賴存候、

態御書狀畏入候、仍就圖田帳之儀、迫田次郎右衛門尉方へ一通進之候、然者當時野尻へ被罷移之由承届、可得其意候、如斯之由被添御心急速示預候、祝着仕候、將又南郷へ被居候福永名字之仁、圖田帳所持之由被聞及候哉、是又御注進肝要候、自是以書狀福永方へ彼圖田帳借用申度候へ共、官途不相知候條、書狀者不遣之候、從御兩所前寄ニ候之條、南郷へ被仰渡、御借用候て御上賴存候、恐々謹言、

七月十七日

上井次郎左衛門尉

秀秋拜

土持大膳亮殿

瀧聞越後守殿

御返報

144

「寫在土持氏」

任好便令啓上候、仍内山御番之事早々御立候て、專要之由御憑之由可申之間候、然者先札候、先々十人程今度者御立可然之由、申渡候へとも、相替儀候之間、いか程にても候へ、御老中より御承候儘、人數之事御馳走にて御立可然候、爲御存知候、次中山へハ從此方も少々番衆可被差置候之間、何篇御談合共候て可然候、恐々謹言、

八月十二日

上井

秀秋(花押59)

土持大膳亮殿

瀧聞越後守殿

御宿所

145

「寫在土持氏」

就御懸持之儀、先日用一行候キ、爲其御禮御音問畏入候、早々御格護可爲肝要候、餘者期再逢候、恐々謹言、

無射廿日

伊集院加賀入道

是心(花押26)

土持大膳亮殿

瀧聞越後守殿

御返報

146

『寫在土持氏』

猶々急便之條、此外不申候、何れへも御心得憑存計候、

其後者無音罷過候、心外之至候、仍昨日廿八傳説相聞得候分、川邊豐州入道殿頃中風并眼氣出合、笑止之様申來候、不慮ニ幸便承付、一紙如此候、旁期後便候、恐々謹言、

二月廿九日

瀧聞入道

宗運(花押194)

土持大膳亮殿

御宿所

147

『寫在土持氏』

猶々御内々并ニ大炊左衛門尉殿二人へも御心得憑存候、

先日者於濱市ニ卒度參會、殘多候ツ、仍糧請取付候而、

夫々駄被差遣候、爰元之役人江引付、槌被相渡候、委細

之段者彼使可有口述候、御上洛大儀難申盡候、九郎右も同前之事候條、於京都何事茂御吳見憑入候外無他候、内々よりも心得可申之由候、諸吉恐々謹言、

十月十九日

宗運(花押194)

土持大膳亮殿

御返報

寒舟齋
宗運

148

『寫在土持氏』

猶々鎌刑老茂鹿表へ御祇候之由承候間、御兩人迄申事候、凡之日限相知候之者承度候、彼是其分別可致候間、如此候、已上、

京都御門柱之儀、御方之者何比可被引せ候哉、最前如承候、同日ニ爰元茂御談合申度候、其故者蓬原當所之事御存之様、少所之儀候旨、兩所迄にてハ中々覺悟之外候、志布志之御勢入候へハ難成存候、此等之旨鎌刑老へ被

成御内談、日限之儀可示給事、所希候、恐と謹言、

卯月十五日

市來玄番左衛門尉
家親(花押45)

土持大膳亮殿

平田越後守殿

参

『寫在土持氏』

猶と先度御越候時分、就中取亂無會尺無申計候、此間瀧聞越後守殿・市來石州・有馬主馬首殿・東殿各へ御意得頼存候、順喜かり宿之儀者町役人などへも、貴所以御校量被仰付御談合、頼存候、

彼順喜、此間飢肥へ堪忍候、そこもとの様ニ罷越度候由被申候、當時似合之あき家などもや候はんすらん、同者町近邊之望尤候由候、可事成儀ニ候ハ、被添御心御入作所仰候、又小舟壹艘於其元調申度候由候、是者悉皆其身分別にて借用申へき之由被存候、うへよりの御校量にてハ勿論有間敷候、其身之分別にて調可申候由にて

候、爲御存知候、恐と謹言、

七月廿日

上床右近將監
國寄(花押60)

土持大膳亮殿

御宿所

『寫在土持氏』

彼兒玉新四郎、於在所盜取衣類、到其許依被致沽却、露顯無別儀候、盜人之御扱にも被成候する哉、各御功者之事候之條、可然様御調儀專要候、餘者期後音候、恐と謹言、

夾鐘廿七日

伊集院下野入道
(久治)
抱節(花押31)

土持大膳進殿

瀧聞越後守殿

御宿所

『寫本在土持氏』

猶と大崎々たそ壹人被參候へと被仰渡候て、あつかり候へく候、

京都を被仰付儀候而、諸地頭各被合寄、今月廿五日より

『在花林寺』

一書令啓候、然者 大御前樣就御不例、從薩州樣爲御寄進御脇指被差上候、御氣色之儀も重く被成御座候由候間、御祈念之儀此時候條、可被抽精誠候、爲其如斯ニ候、恐惶謹言、

六月廿日

霧嶋座主

伊勢兵部

貞昭

於栗野可有御談合之由被仰出候間、諸所ニ申渡候得共、刑部左衛門尉殿今程鹿之殿中御番之由候而、從是直申越候、若其内歸宅候事もやと存候て如此、今月廿五日ニかならず 御前もくりのへ可有御越候條、各も可被成御參着事御肝要候、恐々謹言、

五月十七日

(伊勢貞實)

伊雅入

任世(花押41)

二階堂安房入道殿

土持大膳□殿

御宿所

『全』

一筆致啓達候、今度於伏見 中將樣御不例ニ付、爲御祈願、霧島山權現江御馬壹疋青毛被爲遊御寄進候、依之御使新納仁左衛門ニ而被差上候條、可被得其意旨、御老中任御差圖如此ニ候、恐惶謹言、

八月廿三日

諏訪采女

兼延

花林寺

『眞本在河上次郎左衛門』

如仰之其後者不御左右承候、無心元存候之處ニ、御使書畏入候、春之時分ハ犬追物御企にて候つれ共、就御上洛ニ候而、御延引にて候キ、定而以時分ヲ可爲御企存候、次ニハ愚息左衛門尉直矢候、染々と 上意惡聞得候、何共迷惑仕候、若自然行末者 乍聞もや御分候す覽之賴計候、殊ニハ此方重寶中紙被下候、二束慥ニ相給候、過分之至ニ候、必此粉紙以一札書立可申存候、何樣以面上御

禮可申入候、恐と謹言、

八月十二日

河上次郎左衛門尉殿
參御報

(川上久隣)
同同上野入道
尉敗(花押85)

155

『眞本在高岡河上氏』

猶と御同名衆床敷令存候之由、御傳言頼入存候、就中又左衛門尉殿獨吟連歌共、被遊候、承度候、當所者拙子共遠候へ者、連歌斷絶可有捨見得候之間、又と取立申度候而、連衆進申候、老馬之無用と候哉と存候へ共、難捨候而如此と候、此由御心得奉各頼候、以上、

御兩札畏令披見候、此度能仕合以次郎左衛門尉殿、更と以御越社役調候、誠以目出度存候、定而貴方御徒然と御座候覽と、從此方者無沙汰申候、口惜存候、明日者可返下候之間、各と懸御目可御禮申入候、將又日州之御狀と、右之役者不調候様と見得候、無精進と候而者難成候、

156

『眞本河上二郎左衛門藏』

此儀御老中衆可有御申候、拙子も可申候、御左之役者涯分御精進可爲專一候、日州へも別紙以御返事可申候へ共、先と御同前一通以申入、能様と御傳言頼入存候、事と恐と謹言、

文月廿五日

河上二郎左衛門尉殿
參御報

(川上久隣)
同同上野入道
慰敗(花押85)

猶と便之時分へ、其元御無事之様子、彼是御狀待入候、平次郎殿へも御心得可被成候、以上、

其以後者不申承候、其御地上下御無事之由、萬と目出度存候、殊貴老御父子別而御仕合よく御奉公之由承、一段大慶と存事候、此元次郎左衛門尉殿・滿吉殿其外御在所御無事之由候間、可御心易候、滿吉殿謠けいこ、毎日宮原長次郎殿所と而無油斷相見得申候、隨而薩州様御暇出申、此比へ御歸國も可被成御座と存候處、于今其様子

無之由、如何と存候、貴老御父子ハ御供ニ而無御座候、御在江戸之由御大儀存候、乍去連ニ銀子過分ニ御手前ニ御用意之儀ニ候間、此時と存候ヘハ御借銀可被成様ニ、御親父ヘ御狀被遣候由、次郎左衛門尉殿御物語承候、彼是御手前入め之儀承尤存候、細ニ申度儀候ヘ共、急便之條無其儀、猶期後音時候、恐惶謹言、

九月十四日

仁禮藏人

頼景(花押)

川上勘解由様

人々御中

『眞本在河上二郎左衛門』

猶ミ打立以後、其元取沙汰出合、何ほとニ而候ハんと存候、かこしまの出合い、よくあしき□及申候、不及是非候、御事篇めてたく得勝利候て、やかて歸國候而可申談候、次ニハ舞之儀、兵法之儀節と無油斷、わかき衆ヘ御すゝめ可有之候、以上、其元打立以後ハ、其方御左右不承候、大風吹申候而、田地などへいたミ申候哉、承度候、

一江戸ヘ八月廿四日ニ參着申、同廿五日ニ御前ヘ罷出候、其晩ニ於御前、御寄合ニ御振舞被下、色ニ忝上意ニ而、此上之本望無御座候、又其後於表御座、同廿九日・九月十一日兩度御寄合之御振舞被下、忝御仕合無申盡候、九日ニ菊之御發句中納言様被遊、和漢之御興行可有之由候而、脇を兵部殿第三を我等仕候、はや一順再々□廻申候、御連衆拾人ほと御座候、先ニ御仕合之儀如此候而、大慶之至御推量可有之候、一口事篇之儀、相手未無參上候、定參着次第有様之御沙汰ニこそ御座候ハんと、本望ニ存候、我等存分具ニ御兩老ヘ申入置候、又上様ヘも其通ニ候間、ゆかミハ申候ハしとこそ存事候、

一其元ヘ有之馬、節ミ本吉右殿・税助右殿と同前ニ、御けいこニ御せる可有之候、口あしく成候ハぬやうニ、御たしなミ心懸尤候、御油斷有間敷候、恐惶謹言、

九月十八日

仁禮藏人

頼景(花押)

『川上勲』解由次官殿
人々御中

158

『眞本河上氏藏』

尙十九日・廿日之比必參越待入申候、盛之上下

ハ各詣合相定候之まゝ、以面謁之時可申談候、以上、

御狀只今十二令披見候、仍連ニ御念望之一儀令承知候之條、心靜ニ慰敗老ヘ申談候、御返事ハ愚拙色ニ申分候之間、御納得之由候、向後千秋萬歲目出度候、さてハ當年諏方御神事ニ社役之事、河上名字ニ廻來候、此十九日・廿日之比ニ必父子一人、此方ヘ可有參上候、汚穢之儀さへ無之候者、必定參越專一候、名字中、以御談合役者之盛可在之候、肩より申候、家之次第ニよりて役之上下茂候之間、可被成其盛候、兼日より爲御存知申候間、爲御心得候、恐謹言、

同名日向守

七月十二日申

忠豐(花押82)

『高岡土也』

河上二郎左衛門尉殿

御宿所

159

『眞本在河上氏』

猶申入候、此社役之儀ハ御老中よりハ不被仰候、

名字ヲ被仰候間、紀州ヘも其分御申有ヘク候、兼又

もめん一贈預候、一段大慶ニ存候、御面にて御禮可

申候、以上、

御書狀具ニ令披見候、仍數年被仰候事、慰敗老ヘ申候ヘハ、合點にて候、此方從紀州老ヘ一書にて申候間、何と成共此度者御越被成候てこそ可然存候、左様ニ候ハ、廿日・一日ニ爰元ニ御着被成候するやうに、分別可然候、此度ハ能仕合にて候間、必ニ御越待入候、恐惶謹言、

七月十七日

同名日向守

忠豐(花押82)

川上二郎左衛門尉殿

御返報

『眞本在河上氏』

猶久々不懸御目ニ御ゆかしく存候、そこもと人衆

替事もなく候や、便之時分ハ承度候、以上、

160

『真本在河上氏』

猶と鐵炮之儀ハ便次第御遣可被成事頼存候、以上、
同性覺之介殿歸宅ニ付、一書令申候、其地御無事之由目
出度存候、上野咄ニ承候雜金入之鐵炮、御方へ有之由候、

任幸便ニ一筆申越候、去々年ハ其元罷通時分ハ懸御目ニ
候へ共、靜々とも無之候て、然々御物語不申候、我等事
も次罷下候、定而其元ハ無事御座候へんと存候、此元人
衆替義も無御座候、上様御下向被遊候て、定而此邊へ
も御越被成候へんと、其時分ハ御立々も御座候ハ、積
御物語りも可申事候、江戸々も便之時候、書狀ニてなり
とも可申を乍存御無音、心外之至候、指かわり候事もな
ふ候へとも、あまりの御事ニよしなき筆ニて申越候、猶
重恐惶謹言、

三月初三日

川上篠右衛門尉様

參

(忠廣)
嶋津市正

忠(花押55)

『真本在河上氏』

八月三日

川上彦太郎

久□(花押87)

川上篠右衛門様

御宿所

猶と覺之助殿ニ被仰候て被下候へ、罷立刻ハ去川へ
御參之故暇申候、不申残念ニ存候由、御心得可被下
候、與右衛門様・主左衛門殿などへ可預御心得候、
以上、

此中其方へ長々罷有候處、色々御馳走之到、別而忝存候、
罷立以後天氣晴緩々と細嶋へ參着申候、明夏者早々可罷
下之條、萬事其節可得御意候、三河殿ニ御同前申度候、
尙期後音之時候、恐惶不備、

三月念三日

(川上久國)

川將監

(花押83)

川篠右様

御申給へ

『眞本帖佐氏藏』

返と拙子之儀、煩以後者承彼是ニ草臥申存、御奉公

川上篠右衛門様

人々申給へ

川上將監方

四月廿六日

(花押 83)

言、
爰元ニ御越不承候而、自是御無音申候處、先刻者御使殊ニしやが被懸御意、別而忝存候、隨分植付秘藏可申候、今程御逗留被成候ハ、其内ニ可得御意候、然者去年大六葉之種子之儀申進候狀、相届不申候哉、如何と存候、當八月ハ大六葉之種子被下候へかし、ミウヘヲ仕候而見申度候、萬事頼存候、如何八月狀を以可申進候、恐惶謹言、

猶と去年けらまつし御用由候間、次左衛門殿御宿所迄持せ申候、付申候哉如何、以上、

『眞本帖佐氏藏』

返と當分ハ黃門様御在江戸被遊候間、諸事御心安候
らんと奉存候、同粟一段さてく候、期後喜之時候、
幸便之間令申候、仍其以後者不申通、無御障候哉、御狀

七月廿九日

(宗康)
帖佐長右衛門尉殿

御宿所

喜入攝津守
忠政判

方心遣迄候、御推量可有候、よりく薩州様御前
御出入御取合、可然様頼入候、美作守様快氣申、無
題目候へ共、一筆分申入候、
一書申入候、仍其以後者申隔候、其御地弥御無事候由、
玆重奉存候、就中薩州様御息災之由、誠ニ目出度奉存
候、黃門様御在江戸被遊候故、此地萬心遣たるへく候、
貴所御達者之事一段ニ目出候、若君様日増御成人之由
承、大慶千萬候、餘と其以來無音申候間、如斯候、恐と
謹言、

ニも不預、扱ニ薩州様御繁昌、殊ニ御曹子様故、思召儘之仕合、目出度奉存候、其段前ニ申候、相届候哉、先日者態以一人御悅申上候ニキ、弥可被遊御成人と奉存候、御次之時者薩州様・同御前様御取合頼入候、次者諏訪仲右衛門尉殿上之時、水指進上申候、薩州様被成御覽候て、如何御意候哉、承度存候、此地無何事候、堅野も折ニ貴所御噂にて候、來年者は非共罷登、御奉公申上度心中迄候、恐ニ謹言、

六月九日

喜入攝津守

忠政(花押90)

帖佐長右衛門尉殿

御宿所

『眞本帖佐氏藏』

猶ニ肩衣・袴一具令進之候、書中之驗計候、以上、薩州様虎壽様へ此比餘之御無沙汰申上候間、使者致進上候ニ付而、用一書候、其地御無事候哉、御國元無相替儀、黃門様御上洛之儀、正月十五日過候者此地可有御

打立御儀訖ニ候間、隨分於其元可被成御待候、各事長ニ御在旅、一入寒中之御苦勞、自是令察候、爰元御宿所御無事ニ御坐候、可御心易候、將又此文無調法者被成候間、萬端御引廻頼存候、萬續口上ニ申含候條、不詳候、恐惶謹言、

十一月廿日

(島津)

彈正大弼

久慶(花押153)

帖佐長右衛門尉殿

人々御中

『眞本帖佐氏藏』

返ニ御わか衆ふりいかニ奉存候、扱ニ一度罷登、御目見得申度念望迄ニ候、御つはねへも御心得可被成候、白左近殿御内儀も一段無事ニ候由申度候、將又貴老御息舊冬よめむかへ被成候、是又めてたく候、以上、

光久様御一大事之御役御勤候處ニ、いかにもかろく被遊、舊冬極月廿五六日之比、御湯御かゝり被成候旨、千喜萬

『眞本帖佐氏藏』

猶と御留事參、樂さ無申計候、され共緩とと罷爲躰
御兩殿様御恩澤不淺候、已上、

薩州様舊冬之御庖瘡御快氣、加之 虎壽様御庖瘡一入御
輕御座候旨、自野州老申來、扱と思召まゝ之外、誠ニ大
慶之到不大形、因茲又々使者進上仕候、於其元思召寄之
事共被仰聞可給候、當年ハ 薩州様可爲御下國なと下
と申散候、且夕御吉左右まちたてまつり候事、可爲御推
量候、恐々謹言、

悦之到、御國家之大慶不過之候、御輕有之由度と雖承候、
庖瘡者我等兩度仕覺申候故、神はく心遣千萬ニ御座候つ
る處ニ、只今之御到來ニ而、誠ニ帶ひもをときたるやう
罷成候、極月十六日之御狀慥ニ落手候、被入御念候段、
過分之到候、尙追々御祝言可申承候、恐々謹言、

卯刻

正月九日

(鳥津)
久慶(花押152)

帖佐長右様

まいる

『眞本帖佐氏藏』

二月三日

彈正大弼

久慶判

帖佐長右衛門尉殿

御宿所

一琉球江御馬之儀、去二月申下候、定而五六月之時分ハ
可罷上と存候、左候ハ、少くつるけ候て上せ可申候、
一數寄之御道具之儀、木原七郎左衛門ニて被仰下候、無
由斷相尋申候、一色成共見合候て上せ可申候、宗俊之
便ニ水指一ツ・かこ二ツ進上申候、御用ニ立申間敷と
存、心遣ニ候事、

一福昌寺々達广之繪・梅之繪上せ申候、御用立候哉、御
狀ニて可承候、談儀所三幅一對之繪、伊東勝右衛門上
洛之時進上可申候、此度金欄之切レ進上可申、各書狀
ニ而成共御禮被仰候へかしと存候、

一光久様今度 御替合被成、御下向と有間敷候哉承度
候、猶期後喜候、恐々謹言、

二月十五日

川上左近將監

久國(花押84)

帖佐長右衛門尉殿

御申給

170 一書令啓上候、仍而大脇舍人佑殿高拾四石、當所之高相

除、其地之高ニ可相籠之由、三原左衛門佐殿御使ニて被仰聞候之間、先日其通申越候へ共、又ニ此度山田民部少輔殿御使ニて、如前ニ當所之高ニ可相籠之由被仰出候間、當所高ニ相籠候條、其元其御心得可被成候、爲御存候、恐惶謹言、

未八月廿一日

大寺主計助

政安(花押67)

肥後長次郎

盛行

新納加賀守

忠清(花押205)

比志嶋掃部助殿

市來備前守殿

新納仲左衛門尉殿

まいる人々御中

171

以上

御書狀具ニ拜見候、然者向町與三右衛門尉、扱者御禁斷日ニ、せつしやう仕候義、左様成儀横目衆御披露被成由候、定從御公儀細ニ可被仰出候間、其刻御狀之趣可申入候、就夫年行司方へも然ニ覺語可申通可申渡候、恐惶謹言、

卯月十九日

川口覺兵衛尉

重昌(花押88)

新納仲左様

御報

172

一書申候、仍唐物や千左衛門四十四歳、帶やの四郎兵衛尉貳十二歳、同下人長五郎十九歳、此三人宮内之八幡へ参度由申候間、狀相付申候、先書ニ如申入候在郷などへ不参様ニ被仰付尤候、恐惶謹言、

正月十四日

新納加賀守

忠清(花押205)

顯娃長左衛門尉

久政(花押61)

新納忠左衛門尉殿

人々御中

173 一筆令啓入候、然者我々御談合申候百目掛銀之儀、當月

と來三月と相續、其方被成御取並ニて候、然處相良土佐殿方被仰候へ、手前借銀共御座候而、被爲行迫候間、其方御取前、右兩度之内壹ツ被成所望度之由候、就其使を差越にて候條、從我々も右之通申候て可進由候、其元之儀者御分限之事ニ候間、左様ニも被成被遣候へかしと存候、巨細之段者彼使可被申達候條、能様御談合所仰候、恐惶謹言、

九月廿六日

川上主膳

忠位(花押78)

東郷十左衛門

重盛(花押197)

新納仲左衛門様

人々御中

174 從又八郎様御書被成下拜見忝奉存候、然者八朔之御太刀之儀、玄蕃頭殿是者御座相易候間、口能無御座候、御馬

之後先酉ノ年方御爭共御座候、當年之儀者 黃門様被聞召上、如先例可致沙汰由、被仰出候へ共、更我々不及分別候、御太刀ニ御馬者付物之由、兒玉筑後守殿を以被仰出候間、加治木之御馬先ニ受取せ申候、御使者御目見得之儀も先ニ而御座候つる、左様成御禮被仰聞忝存候、御爭之儀ニ付而、双方方證文可被出由、東郷肥前守にて被仰出候條、其段御使者へ申渡候、定急度可被差出候、其節細ニ落着之儀可申入候、此等之旨可然様ニ可令洩申渡候、恐々謹言、

八月二日

下野守

久元判

彈正大弼

久慶判

新納仲左衛門尉殿

175 從又八郎様御書被成下拜見忝奉存候、然者八朔之御太刀御進上ニ付、玄蕃殿と後先之御爭共御座候、左様成儀ニ付、御慇懃成御意忝存候、此等之旨可然様ニ可令洩申給候、

恐と謹言、

八月二日

下野守

久元

新納仲左衛門殿

176

以上

一書申候、仍川野内記申分ニ付、自江戸御意之儀共候、
左様成御談合ニ付、従式部様貴所被爲參候様ニと被仰
候、自公儀者別之御用通被仰付、必御越可有候、恐と謹
言、

二月廿八日

川上左近將監
久國判

新納仲左衛門尉殿

御宿所

177

以上

當春之御慶未申入ニ付、示札候、又八郎様被成御上洛、
其許不樂御座候へんと令察候、もはや被遊御出船候哉、
承度候、此方無相替儀候、武庫様へ書狀指上候間、御上

可被成候、恐と謹言、

二月十二日

川上因幡

久國判

新納仲左衛門殿

御宿所

178

以上

急度申候、仍從江戸上使御下向之由候、道橋之普請入念
可被申付之旨、以廻文申渡候、弥無油斷様ニ、其方前よ
りも可被仰渡候、將又上使御通之刻、到下と迄見物ニ罷
出間敷候、若於中途參合候ハ、つくばひ、いかにもう
やまひ候て罷居候様ニ、堅可被申付候、恐と謹言、

十月十五日

山民部少輔

有榮(花押 246)

顯左馬頭

久政

北佐渡守

久加(花押 229)

川因幡守

久國

新納仲左衛門殿

御宿所

猶と夫丸之儀、竹の下殿へ可被仰候、乗馬中間ハ有
屋方へ面談ニ頼申候、

猶と此狀被差出可被仰理候、明日如高原御越有へく
候、以上、

貴所御事、明日高原へ被成御越、京衆へ御取合可然候、
其故ハ此方嚙之内一所にても六ヶ敷儀出合候へ者、早竟
公私御爲不可然候、節と乍御辛勞無御油斷可被差越候、
馬人夫等ハ飯野御公領へ可被仰付候、御中間藤三從今晚
御方へ可參候、兼又小林通道之儀ニ候之條、頼爲知候、
飯野之儀ハ不及申、旁御入魂尤候、恐と謹言、

三月十八日

(新納長住)

休閑齋

旅庵(花押208)

(川上忠智)

川參入

肱枕(花押80)

長野織部佑殿

御宿所

猶と醫者三官御事篇於衆樂御沙汰候、其時分友賢事
御跡ニ爲被殘置由候、左様成書物など江夏内記手前
ニ者無之候哉、可被成御尋候、於爰元二閑へ尋候へ
共、覺無御座候と申事候、以上、

一書令啓候、

一關ヶ原亂之後、於伏見 公方様へ 黃門様被成御目見
得候刻、御進上物并御拜領物など細と書立候而、仁禮
藏人殿より惟新様書狀上申候、充所者本田源右衛門殿
ニ而候由、藏人被申候、左様成書狀など、又と誰を爲
覺申人など無御座候哉、被入御精候而承度候事、

一惟新様御病中爲上使篠崎吉右衛門殿下國候、其時分之
御拜領物年號月日各同前承度候、今度從江戸被仰下候
ニ付、御系圖ニ書載候ニ付入候間、存候衆候ハ、細
と御書付候而可給候、恐と謹言

十月朔日

彈正大弼

久慶(花押153)

新納仲左衛門尉殿

御宿所

以上

一書令申候、仍伊作中之里名之内、門内屋敷・加治屋屋敷・西中間屋敷ニ人付之儀ニ付、曾木新左衛門尉殿へ御尋可申儀御座候間、急度被成參候様可被仰渡候、御延引ある間敷候、恐惶謹言、

三月廿八日

山田民部少輔

有榮(花押246)

高崎伊豆守

能乘(花押193)

新納加賀守

忠清(花押205)

市來備前守殿

新納仲左衛門尉殿

人々御中

尙々今日濃州たるひと申在所迄參申へく候、以上、
幸便之條申下候、

一今日迄ハ我等も存生罷居候事、
一上方亂入無是非次第ニ候之事、

一三右衛門尉・宗左衛門尉・助右衛門尉急度上洛可仕様可申付候事、

一ヶ様之儀も可在之と存、中間をかい候而可上之由、申下候へ共、爲何子細ニ而候哉、不指上せ候、無心元事うミ山候也、

一夫丸成次第可上候事、

一たとひ我等相果候之由、むすめ一人在之儀候間、方々より借物之儀可申來候條、尙取納之儀少も無油斷可相調候、

一たとひ只今相果候而も、武庫様之御願ニて、諸大明何も忝御意難申盡候事、

一何事も五郎右様御分別次第ニ、跡々之儀可申付候、聊以油斷不可有候、

一五郎右様へ書狀上度候へ共、餘取亂候條、此書狀可懸御目候、以上、

八月十七日

矢野伊兵衛との 大野吉兵衛との

(花押357)

大崎かん丞との 玉利對馬との
黒木大藏との

猶々昨日兩度從福嶋様御振舞御座候、拙者も御座へ
被召出候、誠々 惟新様御願難^{④申}盡候、此等之様子
も御次之時ハ可然様ニ御取成所仰候、

幸便之條令啓上候、

一兵庫へ昨日十四日御着船候、然者安藝少將様爲御下
向、兵庫迄大坂より御出船候之處ニ、少將様御上着、
昨日被成御參會、別而御入魂不及申候、定而御直書并
御老中より可被仰下候、

一安藝少將様被成御案内者、秀頼様へ可被成御目見得
由、御談合候、

一昨日少將様へ御參會之御座ニ而も、惟新様御理知儀
ニ御座候間、當末無御別儀可被仰談由、五度も十度も
被仰候、殊更御馬一疋可被進^{④と}候思召、御秘藏之由、
御物語候、爲存よりも深重ニ候、惟新様御事御懇志

ニ候、拙者も^{④恐}久悦御察之前ニ候、

一大柿へ御出陳之儀、此等之段も惟新様正路之御分別ニ
て、秀頼様御爲一途思召爲被通由、御褒美候、

一廣嶋少將様より、如最前銀子百貫目・米三千石可被借
進由候、

一龍伯様御仕合も、別而事能聞得候、是又御満足之儀ニ
候、

一大坂へ於御上着ニ者、追々御使を可被指下由候^{④間}而、
細々可申入候、先々少將様御仕合能御座候、目出度奉
存候、恐惶謹言、

十月十五日

(新納夏住)
旅庵(花押206)

(伊勢貞成)
伊平左様

人々御中

(本文書ハ「舊記雜錄後編三」一二三六號文書・一七二一號文書ト同文ナリ)

猶々山民部少殿歸宅にて候間、兩人として御返事如
斯候、以上、

御書狀具令披見候、仍而其許鍛治番匠衆知行佗之儀承

新納仲左衛門殿
まいる

候、御老中衆爲被聞召儀ニ候間、爲我ニ不罷成候、被成御申候者、直御老中衆へ被仰上候而尤候、もはや我ニ支配所へ罷あかり候、爲御存知候、恐惶謹言、

七月廿三日

高崎伊豆守
能乗(花押18)

新納加賀守
忠清(花押26)

比志嶋掃部助殿

新納仲左衛門尉殿
御報

185

猶と靱負別書不申候間、同前心得候て可預候、

任幸便一筆申候、比者其許之様不承候、定而可爲無事と存事候、手前儀無爲ニ致在旅候、薩州様御前殘所無御座候、相詰候儀も今少ニ罷成心安存候、來夏初ニ者早ニ罷下相積儀可上申候、内儀方へも達者ニ有之由、仕合之通心得候て可給候、尙重而期後音之時候、恐と謹言、

十一月廿一日

嶋又八郎
久董(花押12)

186

一筆申候、仍昨日者天氣惡敷候處、遠方迄靱負被指越候、一入令祝着候、然者今度上洛人數賦減少ニ付、爲御侘武庫様鹿兒嶋へ被成御越候、貴老事も御供ニ而別而苦勞之由、其聞得候、左様成を以先前と如御賦可罷上之由承候而、致満足候、餘ハ期後喜之時候、恐と謹言、

二月三日

嶋又八郎

久董(花押12)
「ま」と
久意

新納仲左衛門殿

御宿所

「武庫様ハ惟新公ニ當ラス、久董ノ父兵庫忠朗ヲ指テ云タルナラン、左ナケレハ、他ニ又八郎ト云シ人ナシ」
「兵庫忠朗ノ子又八郎久董寛永十年生也」
「ま」と

187

一書申候、然者根占殿御藏入方之儀、曾木弥兵衛尉・黒葛原吉左衛門尉へ被仰付候、吉左衛門尉事早と致祇候、此等之様子可被申上之處ニ、病氣故延引被申、今日被致

參上候間、御披露尤ニ候、恐ニ謹言、

正月十一日

伊勢兵部少輔

貞昌(花押 36)

川上將監

久國(花押 84)

彈正

久慶(花押 152)

新納仲左衛門尉殿

市來備前守殿

御宿所

188

猶々横川迄持せ可申候へ共、御急用もや候へんと、

又如此候、已上、

一書令申候、仍彈正様・川上左近將監様を相良清兵衛尉殿へ被進御狀、昨日已之刻ニ横川を參着候條、則衆中ヲ以求广へ持せ申候、御返札參候間、御方迄進入申候、御兩所間ニ、其元へ御供被成候而、進上可被成候、乍去彼使鹿兒嶋ニ持參可申通ニ候ハ、御通有へく候、爲御存知候、恐惶謹言、

八月十三日

五代勝左衛門

友泰(花押 99)

新納仲左衛門尉殿

比志嶋掃部助殿

參人々御中

189

態申候、仍初鷹參候間、持せ申候、其元奥方へ御進上可然候、次者三日過候而、江戸へ早便可參候間、是又御申入置尤候、恐ニ謹言、

八月晦日

喜入攝津守

忠政(花押 90)

比志嶋掃部助殿

市來備前守殿

新納仲左衛門尉殿

御宿所

190

猶々御拾百・銀子千枚、若君様より御拾五十御拜領之由候、御馬も御給之由候へ共、何方よりとも不知知候、已上、

就幸便令啓達候、今月十一日薩州様御暇出候由、今朝

寅之刻申來候、十五日江戸御立之由候付、御着船程御座有ましく候、仕合を以兵庫頭様へ可被仰上候、恐惶謹言、

五月廿六日

山田民部少輔

有榮(花押216)

新納仲左衛門尉様

人々御中

191

態用飛札候、然者一昨日從江戸大井二右衛門殿下着にて候、武庫様より又八郎様へ御狀被進候、昨日此方へ持せにて候條、差上申候、可然様ニ御披露頼入候、恐惶謹言、

三月十四日

山田民部

有榮(花押216)

新納仲左衛門様

人々御中

192

以上

一書申越候、加治木西町之次右衛門下人小船ニ乗相走、額娃川尻へ流着、舟を乗捨候て、山川表へ居候を改置搦捕、此方へ被指出候、彼走者之任口柄、其許へ送届候、御請取尤候、恐々謹言、

閏五月二日

山民部少輔

有榮(花押216)

嶋圖書頭

久通(花押11)

新納仲左衛門尉殿

御宿所

193

此元御姫様就御誕生、從 忠平様御書之趣、奥方より目出度被思召候、此等之様子御次手を以、宜可預御披露候、恐々謹言、

閏七月十二日

鎌田出雲守

政統(花押77)

新納仲左衛門尉殿

194

其許衆中藥師寺内藏丞殿事養子被仕、其地之役儀被相勤之由候間、内藏丞殿事水引へ可召移由、伊東二右衛門尉殿被爲申候、於無別儀者御談合尤候、恐々謹言、

十月十五日

川左近將監

久國

喜攝津守

忠政(花押90)

196

一書令申候、仍又八郎様へ御奉公之つほね、此比別而煩

比志嶋掃部助殿

人々御中

新納仲左衛門尉殿

市來備前守殿

卯九月廿日

川上式部太輔

久國(花押83)

195

已上

比志嶋掃部助殿

御宿所

市來備前守殿

新納仲左衛門尉殿

下野守

久元(花押150)

198

御狀之旨則致披露候、然者其元切米取之人數、此節疏米

新納仲左衛門尉殿

參御報

後七月七日

高崎伊豆守

能乘(花押193)

197

御狀之趣披露申候、然者御祈念入具之儀、則物奉行へ申

渡候間、御使指置候て申候、爲御存候、今朝八左衛門殿

無出仕候條、拙子申入如此候、恐惶謹言、

新納仲左衛門尉殿

御宿所

市來備前守殿

壬七月二日

喜入攝津守

忠政(花押90)

候、御兩所御心得を以萬々頼入申候、恐々謹言、

間、先々早々御暇被下候様御申可然候、爲其以一人申上

被得御意此方へ被遣候者、永吉なとへ遣申度候、當病候

無然々由被申越候、老躰と申、於其許養生可難成候間、

可被下由、御侘之通申入候へ共、琉米未參候、少々此方

へ御座候者、子細御座候而御たしな被召置候條、此節者罷成間數由被仰候、爲御心得候、恐惶謹言、

正月廿八日

山田民部少輔

有榮(花押146)

比志嶋掃部助殿

新納仲左衛門尉殿

貴報

199

以上

昨日之御禮得其意申候、然者、兵庫守様御領内より、有馬・天草へ被召移候百姓家内女房子共召烈候人數定之儀、并牛馬等之儀、いか程可被遣哉之旨、御尋被成候、我々事者從御國出ル百姓頭百三十人之賦ヲ、御藏入方一所方賦付迄之儀を被仰付申渡候間、家内之人數或牛馬或農具等之事者、御藏入奉行三原左衛門尉殿よりも、御家老衆へ定様之儀者、被得御意を相究之儀候條、御方々も直ニ御越被成候て可申と存候、是又爲御心得候、恐惶謹

言、

九月廿七日

肥後長左衛門

盛行(花押147)

相良權兵衛

嶋津中務少輔

久茂(花押148)

新納仲左衛門尉殿

御報

200

猶々御同氏忠太夫殿・日野堅物殿へ御心得可被下候、以上、

一筆致啓達候、先以 兵庫様海陸無恙其御地へ御機嫌好被遊御着、去月廿六日御登城首尾能御目見相濟候由、目出度奉存候、次ニ貴様御堅固御勤被成候半と存候、私儀加治木へ御道具改ニ付、去ル十三日中務殿被召列罷越、萬事御改ニ取懸罷居候、左候而村田平右衛門尉殿へ御家中之儀次渡可申由、先比被仰渡置候、委細ハ追而可申入候、扱又御同姓仲右衛門殿何も御堅固ニ候間、可易御心候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

201

五月廿日
伊地知越右衛門
重時(花押23)

新納仲左衛門様

猶々刑部殿方御尋被成儀、御返事次第申上候者、一
途可申入候、以上、

如來意新年之吉慶、猶更不可有盡期候、仍吉松衆中入組
共有之ニ付、此中刑部太輔殿御頼ニて候處ニ、上使方被
爲聞候條、一人ニて首尾難申儀有之候間、拙子相添候て
可申達候由、刑部太輔殿委數御存之儀ニ候間、御下ニ付
可申上候、就夫刑部殿方貴翁へ被仰候儀共候間、御返事
次第御使可申候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

正月七日
同名弥七郎
久(花押208)

新納仲左衛門様
まいる貴報

202
急度申候、仍 上様御下向ニ付、從此方御道具衆廿人、
御舟本迄差上候、御方々も御道具衆有次第、從今晚可被

203

差上候、油斷有間敷候、恐々謹言、

閏七月廿八日
川左近將監
久國(花押84)

彈正太弼
久慶判

比志嶋掃部助殿

市來備前守殿

新納仲左衛門尉殿
御宿所

猶々藏人宗領之息ニ、知行四十五石相付、鹿兒嶋へ
可召置由、以伊東二右衛門殿被申候間、其許之高差
分尤ニ候、以上、

其地へ被罷居候羽嶋藏人家ニ付而、子細依有之義、せか
れ一人當所へ可被罷置之由、御任被申候間、東郷肥前守
を以致披露相濟候條、爲其一書如此候、恐々謹言、

二月十四日

下野守

久元判

彈正大弼

久慶判

新納仲左衛門尉殿

人々御中

204

以上

急度申入候、仍縣江御使として可被差越由候而、今日不
罷成候へ、明日早々參上候而御意趣御承尤候、乍不申
本源右衛門尉殿・比掃部助殿兩人へ、右之様子御談合候
而可有御越候、恐々謹言、

六月十二日

比志嶋宮内少輔

國隆(花押25)

伊勢兵部少輔

貞昌(花押36)

下野守

久元(花押14)

新納仲左衛門尉殿

御宿所

205 從又八郎様五月廿三日之尊札、去月到來、畏而拜見仕候、

其御地何茂御無事被成御座之由被 仰聞、目出度存候、

然者 黃門様長々之御煩、就中此比者御草臥心遣千萬ニ

候、委者本田新右衛門尉口上申達候間、御仕合之時分、

此由可預御心得候、恐々謹言、

七月十二日

下野守

久元(花押15)

新納仲左衛門尉殿

御宿所

206

尚々貴所江兩寺中の儀、反錢段米さしおかれ候、和
泉へも、此よし任世より被仰候、又御老母之儀可御
心易候、祢々色候、京都へ御ミヤのほせ申候、たし
かに御とゞけ奉頼候、此一通ハ旅庵の引付にて候、

旅庵此廿二日被打立候、貴僧事も其用意肝要候、然者船
ちんの儀ハ人間敷候、於爰許旅庵へ談合申候付、御氣遣
入ましく候、上下五十日之兵糧同遣錢二貫文、從任世被
遣候、輕微候而□、猶宗重へ申渡候、恐々謹言、

十月廿三日

伊弥九

貞昌(花押39)

207

「小林士八重尾氏藏」

應永卅二年甲卯四月吉日

□ヨリ一二之はへ之事請取申候年ハ廿七年也、親之土を請取申候へとも、少古之爲ニ經第同山戸候由、伊勢之守所之物以上十七人、たんしやう自筆を付候て、八重尾を請取申、八重尾帶之はへ古志葉、此分我ニ請取申候事ハ、四月十二日大さかへ之分、帶之はへ之分ハ、さかへの尾を切テ得古江、大全之木之せたをの尾をかきり、ふと尾之口ふきの何内口^(河)をた木之口ノ比之谷とをり、西之谷分ハ山戸殿得妙慶ヨリシテつかハし候、不氣之古内之分ハ筑前殿覺請、志羅か谷之はきせたる之又古しらか之下、しらか谷をきんて、杉之本を切テ求广道を切テ、全農原之下之越谷を切上之野ニ大こし通、あら谷を切テ、五葉木ヨリ下ハ大河内を切テ請取申候、此分八重之内也、又長谷之帶之八重之分ハ、重而より合ニわけられ候分ハ、百ヶくら之分請取申候、

八重尾久重^(花押出)

かたくあつけヨト仰候間、帶之八重之分、山戸殿ニあつけ申候、人足ハかりやとい三宅之分つかい申候、又舟越

208

之屋敷付之分をつかハし候、さかへ^(虎)ハま具道をあほし石之下之越谷通、それよりして大河内はきたるへく候、谷之はきつゝら之路を切テ□敷之内□

「小林士八重尾氏藏」

覺

一木うら木山、我等先祖代ニかくこ申候、飯野へ 惟新様御座被成候時分、五代右京亮殿御使ニて、我等親へ被仰付、飯野より小林へ罷移候、小林之地頭川上四郎兵衛殿代ニ、我等十五六之比、おや木うら木へ罷移ニ付、我等も廿四五までハ彼地へ罷居候、其内ニも須木へ付何そ御奉公不申候事、

一須木堺之儀、ほうが水より求广道をきつて、湯木津留のはきをさかいと、先祖之代より申來候、依者、右之堺より内之鹿倉を、須木より狩被成候事、不罷成候、前ニ我等木うら木へ罷居候内ニ、村尾殿より承候者、御狩を被成候處ニ、かり方無之候之間、此方之鹿倉之

内、さかひら道の尾、此鹿倉をかし可申由候ニ付、山をかし申候而、彼方より狩被成候事も御座候、

一さかひらと申鹿倉へ、須木之行司深瀬肥後守と申人より、堂屋敷之平馬允と申者へ、木場をきらせられ候、我等親格護之内ニて候故、入組を申候て、納を此方へ取申候事、無其紛候事、

一上井次郎左衛門殿御地頭之時分、公儀より山之まつり事被成ニ付、小林方法光院ひなもりの太夫、其外出家・社家三十人程、木くら木へ御登り候て、神事被成候、小林より主取として、野邊十兵衛殿・樋永隠岐守殿被登候、其時須木之御藏入より、米十石・錢十貫文被出由候、御藏入之代官ハ有村隼人佑と申人ニて候、是ハ御物を被渡たるまでニ候、其餘ニ何ぞ須木よりかもひ被成儀無之候、

一我等兄大かきノ時分、此表番手ニ被仰付相詰候處ニ、稻津亂ニ佐土原ニて打死仕候、就夫兄知行高岡之高ニ入申候、右兄の跡として此方へ罷移候、それまでハ我

等おや堅固ニ候之故、弟與左衛門付置、木うら木へ罷居候へ共、終須木ニ付御奉公不仕候、何篇小林より御下知被成候事、少も別儀無之候、上井次郎左衛門殿地頭之時分、須木之村尾殿々木うら木を須木之内ニて候と被仰候へ共、右之様子ニて、須木之内ニ者なり申さす候、御尋被成候間、我等存候分如此候、已上、

寛永十三年三月十五日 高岡衆中
八重尾土佐介(花押組)

松元彦右衛門尉殿

参

209

「八重尾氏藏」

天正拾六年戊子霜月十六日

きふら木之分被下申分

一天正十七年己丑三月吉日ニ祈念申候、心經千卷奉候、
一同年四月吉日、ほやうし門五段廿部、山神上申候、椎柴一本奉候而、
「本マ、二いはひ神」
藏人ニ社さし候て阿籠申候、九月吉日、
一同年二月吉日ニしめノ折願して、
「祈」
きふら木之山神ニし

め一本、吉牟田之山神へ一本、霧嶋ニ一本、(狗留孫)くろそん

ニ一本、彦山ニ一本、以上五本、

一同年九月より拾貳月之はらひ、六月日數ノはらひ申候て、

一又さし刀上申候、是ハ

八重尾與左衛門尉

富永内藏允

平野監物允

治部大夫

三山眞方ノ

正祝子

一同年六月吉日ニ參候時、御祈念として脇刀上申候、

大河平源太左衛門尉

一同年八重尾ノ内之かゝミ上申候、五月吉日、

一天正拾六年霜月より、ミやしめ一年一本ツ、三年ノ祈

願、

一天正拾八年庚寅貳月吉日

「此間キレ」

御高之御祈念として此分申候、

210

「御記録所帳留」

新納四郎左衛門久辰、寛永十一年五月十六日、以祖先之戰功勤代々國老職、依其忠勤、從島津家十八代國守中納言家久公、特賜大隅國桑原郡三鉢堂村山林土地從假屋西東參拾町、南北壹里四拾町餘間圍矣、常寵遇于幼穉、正德三年十月十八日卒、年八十又五、

211

留守次左衛門家之由諸書

一文明年中御出陳之刻、留守伊勢罷立候由申傳候事、

一留守左衛門義景、清水本田一亂之忠賞ニより、大隅國

木房村を拜領仕、坪付 忠朗御判紙有之、

一留守式部太輔藤景 義久様爲御使者、上京仕候由、申

傳候事、

一留守式部太輔藤景、肥前有馬御合戰之時、勵軍忠由、

申傳候事、

一先嶋原御陳之刻、留守式部退立、中務様御歸陳之刻、

式部所江被掛 御腰候通、申傳候事、

一 京都之詰并御使、留守式部被仰付通、申傳候事、

一 前ニ羽柴美濃守様御下向之刻、留守式部無事之御使被仰付、日州江參候、宮内於御假屋直ニ御意趣爲被仰付之由、申傳候事、

一 ^(留) 守左衛門・同嫡子新次郎、於日州ニ父子同前戰死仕候事、

一 ^(留) 守式部太輔弟留守宮内少事、義久公江小姓被召仕、其後母方之祖父、蒲生之家を相續仕候事、

一 留守治部事、^(二年巳カマヤ) 文祿年中酉十一月拾八日、義弘公高麗

々御狀被成下也、慶長四年五月十七日、隅州桑原ノ郡

内山田村田畑御寄進狀、日付之通御^(宛)當書ニ而御判紙頂

戴仕候事、

一 忠恒公之御代慶長九年、大隅桑原郡内村之内、高貳百

十二石公役地として被成下、御家老三原諸右衛門殿・

伊勢兵部少輔殿・比志嶋紀伊守殿・御判紙留守右衛門

^(宛)御當書ニ而頂戴仕候事、

一 黃門様元和六年申二月被遊御歸參詣候刻、留守治部所

へ被掛 御腰、吳服一重・昆布臺・御樽拜領仕候、其

節御膳進上仕候、御相伴被仰付、其刻世悴其外一門中御目見被仰付候、御取次仁禮藏人殿、

一 留守治部代ニ、慶長四年五月十七日、隅州宮内内留村之内、高五十石 龍伯様御判紙、留守次郎三郎と御當書ニ而頂戴仕候、同年九月十四日 忠恒公々薩州吉田佐多之浦村之内、高五十拾石御判紙留守次郎三郎御當書ニ而被成候事、

一 留守治部弟留守半右衛門・菱刈善次郎跡目ニ被仰付候事、

一 光久様寛文元年丑三月被遊御參詣候刻、留守次郎右衛門御三獻之御相伴被仰付候、左候而次郎右衛門所へ被掛御腰候ニ付、御膳進上仕候、御相伴被仰付候、其節喜入休右衛門殿御取次ニ而、嫡子 御目見之儀奉願、

御目見被仰付、改名仕候事、

一 留守次郎右衛門十六歳ニ而、於御對面所 御目見仕、右衛門と改名仕候事、

一 大玄院様被遊 御家督候刻、留守治部左衛門於 御城

獨禮ニ而 御目見被仰付候、

一本田因幡娘留守左衛門江緣與、

一蒲生信清娘留守左衛門へ緣與、

一留守左衛門娘敷根藤左衛門へ緣與、

一阿蘇玄與娘留守次郎右衛門へ緣與、

一留守次郎右衛門娘町田八右衛門へ緣與、

「是より末キル、」

留守次左衛門先祖左衛門尉景信入道、貞治二年四月三

日城州石清水善法寺々正宮留守職とシテ下向仕候事、

一景信々三代目之幸範、同四代目之景延・同五代目之景

照・同六代目之義景迄直參内仕、五位ニ昇進仕候通、

系圖ニ相見得申候、右口宣之儀者紛失仕、寫等茂無御

座候、

一景信々五代目之景照々當宮面々へ免狀を出し候由、系

圖ニ相見得申候、

一景信々十代計之間、引續キ、石清水善法寺家々正執印

職并執印職之補任頂戴仕候、夫々已來次左衛門迄五六

212

代ハ上洛爲仕儀無御座候、右善法寺家々補任ハ段々所

持仕候故、其内爲御見合寫貳通差上申候、

但本書格護

「此書付前後ナン、此通之一枚紙」

請取

一嘉錄三年十二月十二日下知狀寫壹通、

一自建長至嘉曆下知狀寫壹冊

右所持宮内社家

澤七郎右衛門

右之文書今程御用候間、御文書方へ請取置候、御用相

濟次第可相返候間、其段持主方へ可被仰聞置候、以上、

辰 御文書所

十一月廿九日 田中五右衛門「印」

寺社奉行所 伊地知助右衛門「印」

右之通御文書所へ被留置候間、右之趣持主方へ可被申

渡候、以上、

元祿元年辰十一月晦日 寺社奉行所「印」

國分宮内

與頭中

213

請取

一古目錄五通 留守治部左衛門

一坪付 拾壹通 同人

一文書 七通 同人

一同 拾六通 桑幡半右衛門

一同 七通 澤七郎右衛門

一閉本 壹册 同人

一文書 貳通 最勝寺源右衛門

一閉本 壹册 隈元治右衛門

一文書 壹通 同人

一同 壹通 田口仲兵衛

一同 貳通 神田橋只右衛門

一同 貳通 少輔坊

一同 貳通 岩下坊

一同 貳通 知定坊

一同 壹通 田中坊

一同 四拾壹通 林性坊

一同 貳通 大圓坊

一同 壹通 原田三郎兵衛

一同 八通 井上少右衛門

一同 貳通 賴音

一同 壹通 行實

一同 四通 清滿

右者御用ニ付慥ニ受取置申候、御用相濟次第可相返候、其節此受取御返シ可被成候、以上、

戊七月廿八日 御記錄所筆者

宮内與頭 市後崎長左衛門「印」

最勝寺源右衛門殿 松田爲右衛門「印」

澤七郎右衛門殿

桑幡半右衛門殿

留守治部左衛門殿

〔表紙〕

年間不詳

附 錄
舊 記 雜 錄
卷 三

〔藤原氏文書〕

〔口切テナン〕

様ニ御方便あるへき事、

一薩^{〔前久公・伊久公ノ内ナラン〕}國判官殿御安堵狀の案文事、此等早々御認候て、

南蠻船着岸時上乘をそへられ候て、つかはされ候へく

候、委細者大和殿可被申候、今度面目をほとこされ候、
^{〔石塚氏カ〕}

馬栗毛・太刀美濃方より金具以下しなをし候て、進上
申され候、隨而京都へのさつしやうの事、板倉殿遠江
^{〔雜掌〕}
方如指南被申候仁躰、京都への事可然様可有御了簡
候、

一國面々中へ御教書事承候、是南蠻船着岸ニ候、就其可
有御了簡候、

一國人々大方先不入見參候へ共、申自然候事可得御意
候、但此御狀之内、伊集院山城守殿事へ、不懸御目候

へ共、御書成申候了、又別府殿事ハはうの津地行事候
^{〔加世田〕}^{〔坊ノ津〕}^{〔知〕}

間、取分御書成申候了、南蠻船自着岸御身迄、悉可被

達御本望候哉、

一京都への使節さたまり候とも、是までハ石塚方案内者
^{〔大和守カ〕}

候へてハ不可叶候、諸事可得御意候、恐々謹言、

二月廿四日

^{〔大寺禪正忠保曾入道幸阿カ〕}
愛阿^{〔花押1〕}

甲斐殿

長門殿^{〔永利長門介コトカ〕}

215 先日石塚大和入道下向^⑨之時、預御狀候條、於今恐悅到候、^⑩就南蠻船事、自上方御書拜領、面目至畏入

存候、兼又彼船出津致用意候刻、匠作大勢にて去月廿三日

此境寄來候あひた、馳向防戦仕候處、^⑪敵方數百艘以兵

船彼船可取^⑫候也、相^⑬見候事現形候間、大驚候て綱

切捨、^⑭當津者共、不殘一人も退散候間、是非不及

候、無面目次第候、此等之趣彼^⑮傳言委細令申候間、

〔右之〕披露可被申候、^⑯出津致用此時候、

恐と謹言、

(應永二十七年)

卯月七日

家久^⑰御判

芥河殿

216 南蠻船可着岸^⑱唐津博多候^⑲處、依海上怖畏、其方ニ逗

留之由、注進到來^⑳不可然候、仍先京都へ申候、^㉑如何ニ

候、被加御助成、早ニ此面ニ被送越候^㉒ハ、目出候、

就其態^㉓迎船候、隨而津と浦と警固事堅申付候、可有心

得候、恐と謹言、

(應永二十六年)

八月五日

(家久)

町田飛驒守殿

〔右二通志布志阿多新之丞藏トアリ〕

▽^⑳九州探題職△(澁川滿賴)
道鎮^㉑花押

217

〔藤野家文書〕

嶋津殿御^㉒國倉上事被成御^㉓候、就其候て御使

節ニさされ候、いそぎ御越渡申され候ハ、可然候、松浦

山代方へ別候て、御書被遣候、御心へ候へく候、相構と

不可有御等閑之儀候、恐と謹言、

二月十七日

明眞^㉔花押在判

齋藤次郎左衛門尉殿

218

〔藤野氏文書中〕

〔在鎌倉ノ人ヨリ申上シナラン、追考スヘシ〕

又申上候、御狀等認申へく候之處、六月廿六日鎌倉殿御

他界ニて候事、天下御歎多候此時候、同廿一日左との三

嶋御參詣候、終日御管弦、極樂寺僧達講式伽陀同舜樂等

「藤野氏文書中」

「据目ヨリ散失」

候て、其後御酒被聞召候はん、遣いに御下向候、其日被
召候御馬鹿毛、神馬被引進候名馬にて候、御下向候て後
聽御窮堀御坐候て、御やすミ候、其まゝ御勞ニ候間、醫
師達あまた付申て候へとも、終かなひ候へす、五ケ日と
申候、廿六日酉刻御臨終候、八ヶ國諸大名老若を申候ハ
す、上下番人歎申候、此日出家仕候、鎌倉新造御所作
立候、去年十二月八日御わたまし候て御座候、無幾程如
此御隱候事、中く無申計次第候也、此御所中に天空し
うまん仕候、ひかり物共□おひたゝしきつけともにて
候つるか、御かくれ候、御たひ所者二階堂入すいせんあ
んにて候、あこハ建長寺方丈、きかん圓覺寺方丈、所か
ん聖福寺方丈、てんちや佛事禪興寺方丈、てんたうの佛
事淨妙寺方丈、念珠ハ長壽寺方丈、こせんにん御渡候、
京都よりの「此下ナン」

た合力ふたん御方ニたいして致合戦、御方菱刈のさか
ひニ數ヶ所取要害、朝夕致合戦候、就中在國司入道道超
越事、孫子次郎道久、同一族鳥丸四郎次郎則道、山田
佐殿ト也ハ足利兵衛佐直冬、貞和五年肥後ニ來奔せり、然アルニ市來太郎左衛門尉
廉九郎以下佐殿ニつきそひ申、于今在府仕候間、此等
氏家、東郷藏人道義等十五人直冬ニ應シケレハ、師久公・氏久公此等ヲ變テ利ヲ失
振舞存外次第候之間、公方御計の程ハとて、適愼地頭
ひ給ひしとて、文和二年癸巳三月五日御注進狀ありト云、其頃ノ物なれて、又在國
職知行所領ニて候間、被押置候事無子細候了、次國分
司次郎道久、足利直冬ニ應シ菊池肥後守等と謀て、知色城を攻トせし事アリ、菱刈
平二郎友重所領事、是又不斷被致合戦御敵退治のわつ
らひをなし、結局御敵市來太郎左衛門尉氏家令同心候
之間、以是御敵之段無遁所候歟、就是非守護方へ窮被
下候へて、直ニ安堵被成下候はん事、可歎入之由再三
被申候程ニ、如御返事者委細ニ被聞召候了、何様そこ
つの御沙汰あるましき之由、則御返事候、
一同備後入道殿被申候事者、此御使之時式部藤三郎殿と
やらんも、所領事歎被申計ニ候と被申候程ニ、身か申
候事者、此仁當參之由承及候間、若本領安堵事候ハ、
歎被申候やらん、支可申候由存候しかとも、若就他事も

か當參候覽と存候て、披露不申候、此仁所領事者、代

々置文等ありけにて候、惣領ニ成敵對候庶子の所領者、惣領之可爲計之旨承及候、彼所領事わうしやくの所にて候へハ、こなたニたいして歎被申候ハ、不可有子細候ニ、或忍入、或率大勢、彼所打入可取要害由、相巧候之旨被承候ハ、代々召仕たる上、如此敵對をなし候之間、任置文之旨彼所を被押置て候、此仁忠節候者、各別御計ハ候とも、於本領者惣領方御窮候ハて、御沙汰候へん事可歎入之由、再三被申了、此御返事も被聞召了、そこつの御沙汰あるましき候由、蒙仰へく候、

〔後醍醐帝ノ繪旨ヲ出ス人也〕
一勘解由次官方へ參候て御書付進候、此人折節違例、以

外ニ候とて訴人ともあまた候しか、不及對面候て罷歸候しかとも、押てゆひ入て候程ニ、子息米司頭ニ對面仕て候程ニ、式部藤三郎・在國司東郷・國分平二郎事、如御所へ

「ツキメ切ナシ」

220

〔奈良原氏家藏〕

就今度弓矢子息三人、高名之事無比類候條と、無禮之到候、何様其方へ可罷下候之間、期面候事候、恐々謹言、

卯月九日

實久

奈良原殿

〔上包〕

奈良原殿

實久

八郎左衛門尉

221

〔本文書ハ六四〇號文書ト同文ニツキ省略ス〕

222

〔本田作左衛門藏〕

改年之御大慶千喜萬祥雖申上支舊候、猶更不可有際限候、多幸と、抑就如此之御祝詞、任佳例捧慶書候、如何様以參上自他御満足之儀、重疊可申加候、仍五明貳本致進上候、誠萬歲不易奉表御祝儀計候、以此旨可預御披露候、恐惶敬白、

正月十一日

薩摩守忠興(花押126)

進上 本田因幡守殿

「忠興薩州家四代目ナリ、大永五年十月九日卒年四十とあり」

223

『加世田土愛德氏之藏』

急度申越候、仍其邊浦ニ爲御順見、根占七郎殿御廻ニ而
候條、御宿等可被入念候、勿論御宿之亭主、曾而御禮被
請問敷候、爲其堅申渡候、恐ニ謹言、

卯月十六日

(山田有衆)
民部少輔〇(印)

(顯雄久政)
左馬頭

(北郷久加)
佐渡守〇(印)

申ノ下刻〇(印)

鹿兒嶋

よこ井

伊集院

神川

日置

224

口上覺

綱久様御受厄ニ付而、西原山王江御年數珠、當年々三ヶ
年可被差上御誓願候條、今月より當年極月迄十壹ヶ月
分、御年數珠御方迄爲持候條、吉日を以拜進被成御祈禱
可被成候、以上、

三月十八日

堀四郎左衛門

安養院

吉利

永吉

伊作

田布施

阿多

加世田
暖衆中

225

到與力方御禮致拜見候、然者 綱久様就御厄年、諏訪へ

寄進仕候刀差下申候處、早速被納置御神前之旨被仰越、

忝存候、恐惶謹言、

十月十六日

嶋津新八郎

久馮(花押川)

安養院

御報

226

「安養院文書」

〔尙〕^④と巨細者先日御理候間、不能一二候、以上、

少將様御上洛ニ付、御留守中者爲御祈念、毎月御諏訪大明神へ神樂可有御上由御立願候、就其二月より十二月迄三ヶ月分、八木五斗二升五合持せ申候、就中明日七日吉日之由候間、於神前御祈念可被遊候、此等之旨、伊勢平左衛門殿^⑤書狀を以可被仰候へとも、富隈^⑥參上候之間如此候、恐惶謹言、

十月六日

有川與左衛門

貞政(花押16)

伊地知主馬首

重行(花押25)

かこしま
御諏訪座主御坊

(本文書ハ「舊記雜錄後編三」一七一五號文書ト同文ナリ)
御同宿中

227

就渡唐船之儀、先度委曲令申候、弥預入魂候者可爲本望候、猶桂樹院可有演說候、恐々謹言、

閏六月十七日

高國

嶋津豊後守殿

(忠期)

228

以上

遠路迄預御狀具ニ令披閱候、然者道純御任之儀共、前御取次申候、其爲首尾様子承候、吾等事も當分此地へ罷居候間、喜入休右衛門尉へ狀進候間、子細被仰入可爲尤候、隨而者道純氣相無快氣、貴老御心底存計候、吾々事も多年之知音有之所ニ、千萬殘多存事候、御任今月中ニも不相濟候者、來月者早々鹿兒府可致祇候候間、何様肝煎可申候、恐々謹言、

229

『入来院氏文書』

▽⊗

△

雖無差事候、連々承度候、御同心候^{△者}〔ハ、〕所仰候、抑先日於霧田陣ニ被承候谷山之一筆之事、聽認可被進候^{△之}處、打續依被取亂事、〔ニテ〕延引^{△候}之條、背本意被存候、仍此〔儀〕宜可然候之間令進候、尤以使者可被申候處、此便^{△便}宜ニ可進之由被承候間、任御意候、此謂可〔令〕御申候、^{△有}每事期後信候、恐々謹言、

六月十三日

村尾三河殿

伊景^{△(酒匂)}△^{△(花押)}
伊景^{△(在判)}

▽⊗

さかわ狀

十月十六日

『河野郷兵衛通政ノ老號』

自齋老

『正保四年
正月卒』

御返報

新納加賀守

忠清^{△(花押215)}

230

『入来院氏文書』

▽⊗

△

清色殿より被仰候所領向事、在所事共者、爲私難申定候、於于田數等事者、自貴方も可被仰越候^{△之}間、無等閑申沙汰可仕候、仍河邊之左右を御侍候する事、今程可事延候間、先急々道行候様ニ御談合候ハ、總州如何様ニ被申候共、平申沙汰可仕候、八幡も御照覽候へ、聊不可有無沙汰之儀候、委細厚地殿ニも申候間、定可被聞召候哉、恐々謹言、

八月九日

市來殿

伊景^{△(酒匂)}
伊景^{△(花押115)}

231

『入来院氏文書』

畏申上候、且如〔敢〕知食候、子息三人致奉公候之由申上候之處、與一重員、七郎頼重背定^{△被}〔以〕命參他^{△佛}御方候之^{△(關字)}

村尾殿

伊景

△

『入來院氏文書』

間、永不孝仕^{①候}了、自今以後不可有父子之儀候、^{②爲}而御
意得申入候、且便宜之時可有御披露候、恐惶謹言、

四月五日

(入來院重聰)

定佛
在判

諏方入道殿

▽^①
/

△

雖未申承候、以事次企一行候、仍爲續事、年來別而當家

(相良)

申通候之處、無御等閑之由承及候、尤祝着候、弥御一味
無餘儀候者、可爲本意候、爲路次態不及^{②巨}子細候、恐々

謹言、

(明應九年カ)

三月十三日

(大内)(花押)
義興(在判)(重聰)
入木院殿ツ、ミ紙
入木院殿

義興

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二一七二三號文書ト同文ナリ)

『入來院氏文書』

▽^①
/

△

求麻之儀、無御等閑之由承及候、彼方之事、別而申通候^②
間、弥無二被仰合候者、可爲喜悅候、於已後、猶一味
可申談候、遠路之事^{③候}之間、令省略候、何様連々可申承
候、恐々謹言、

九月三日

(花押)
義興(在判)

入木院殿

「包カミ」(加賀守重聰)

入木院殿

(大内左京太夫)

義興

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二一七二三號文書ト同文ナリ)

『入來院氏文書』

▽^①
/

△

先日進狀候處、御懇承候通祝着候、於已後者、弥連々可
申通候、抑^{②候}公方様、舊冬十二月晦日到當國、被移御座
候、面目之至候、任上意、爲天下可然之様、可抽勲功

之心中候、御忠節尤可爲此時候、爲續無御等閑之由候、
祝着候、每事可申談候^〇條、併期後信候、恐と謹言、

正月十一日

(大内左京大夫)
義興(花押66)

入來院加賀守殿

(重聰)

▽^②
入來院加賀守殿

義興

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」一七二四號文書ト同文ナリ)

『入來院氏文書』

▽^②

△

其以後者、路次不輒候て不申通候、心外候、今度八代所
と捨候事、御心底恥入存候、但古今弓矢習候歟、今者隱
居分候之間、諸事不存候、過半當國無爲之様共申合候而
候、彼客僧薩广一見之由、被申候間、好便之條一筆令啓
候、當時三ヶ國何事共候哉、吳不審之時者、可承候、恐
と謹言、

七月十八日

「相良」
爲續(花押113)

入來院殿^(重聰)
進之候

▽^②

入來院殿

進之候

相良

爲續

△

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」一七二五號文書ト同文ナリ)

『入來院氏文書』

以上

態令申候、最前從名護屋以書音申候刻、御煩之由候、定
而可爲御快氣候、其上然と御煩も無之候之處、無出陣段
不可然候、殊人數も遲參候事、御分別いか候哉、無御
心元候、對嶋津殿無御屈儀者勿論ニ候、此度唐人國役御
無沙汰併被經公儀道理ニ候、於達上聞者、御身上忽ニ可
相果候、早と御着陣專一候、恐と謹言、

十月朔日

石治少

三成(花押21)

入來院又六殿^(重時)

御宿所

「在垂水邸」

「雖未申通候染筆候、抑今度京都依不慮之錯亂、諸士無外方故、匠作へ以使札申、此砌於預馳走者、可爲祝着候、猶進藤筑後守可申候也、狀如件、

「天文」

十一月廿六日

「近衛尚通卿」

御書判

嶋津右馬頭殿

「忠將」

追而申候、前日土佐木にて候間、弓木進覽候之處、御禮之儀被仰候、御隔心之様存候、

如承候、前日從相州入道、鯨之油被進候之處、此前以上田殿御禮承候、又此節被仰候、即時致披露候、相州へ被進候、盡者請取申候、定而從彼方追而御禮可被申候、殊此方珍物候、忠良、貴久大慶候由被申候て令賞翫候、能々御禮可申之由候、又直ニ茂被申候哉、恐々謹言、

卯月廿二日

忠朗(花押29)

本田因幡守殿

本田因幡守殿

忠朗

伊集院大和守

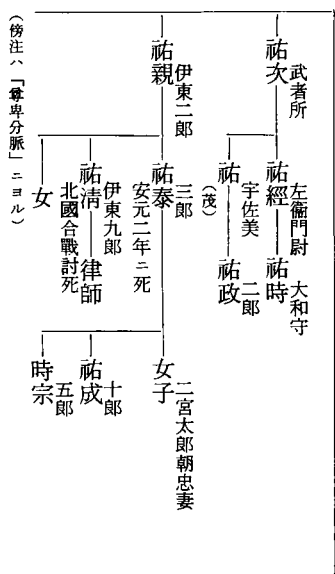
「岐島氏古系圖」

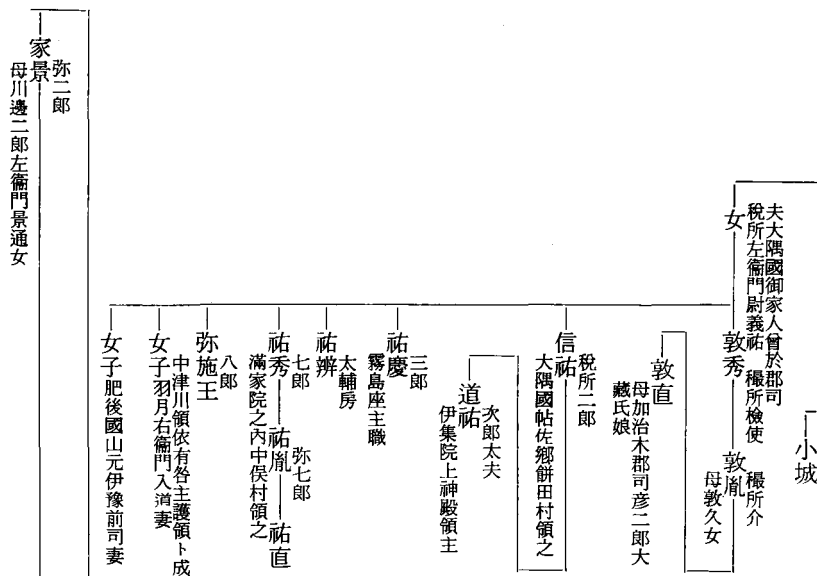
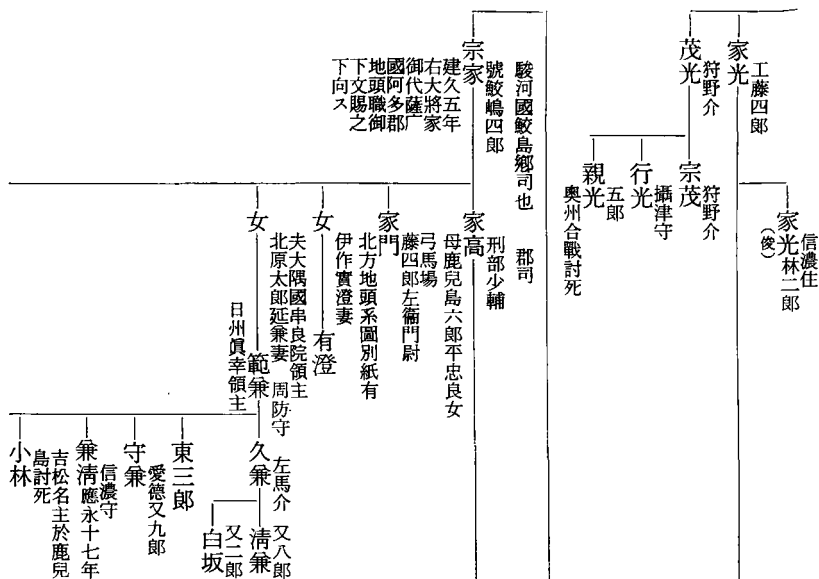
●大織冠鎌足—淡海公—武智磨—乙磨—是公

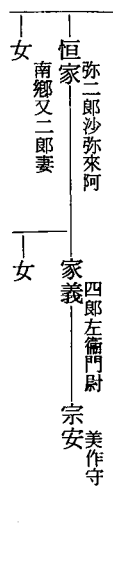
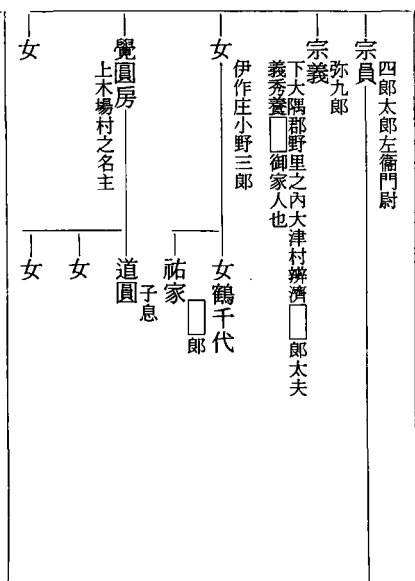
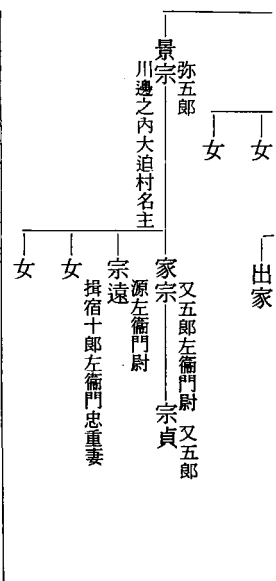
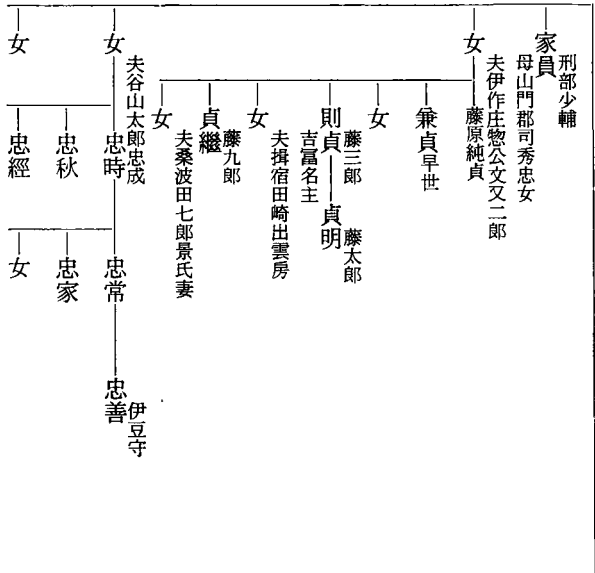
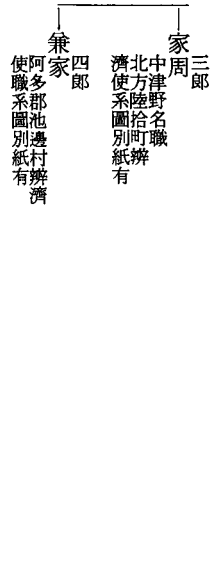
右大臣 參議 小納言

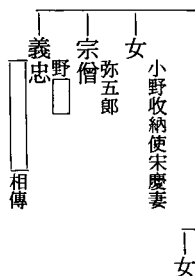
正二位大納言從五位下越前介 陸奥介 彈正大弼 工藤太夫
維友 弟阿 高扶 維幾 爲憲
(河) (清夏) 從五位下遠江守

從五位下 從五位下 伊豆國檢使 狩野九郎 狩野四郎
工藤太 駿河守 維職 維次 家次
時理 維景 伊豆ノ狩野









『志布志寶満寺文書焼切古寫』

○日向國寶満寺事、可

□西殿御祈禱所之由令

□所之處、御返事か様御

□寄進狀又如此候、以御領

□被成御願寺候之條、隨眞

□申限候、若未來不朽之

□被興行佛法候、又此兩

□院重^(ママ)箱候上者弥可被成

□物之勇^(ママ)候也、恐^(ママ)謹言、

五月三日

順

□仙御坊

尚と大吉兵様へも遂貴面奉頼候由申候間、御談合を以御申たのミ入候、已上、

先刻中途にて乍聊尔大方如申入候、知行目録之儀□可被成候て可被下候、地下之目録之高目録一持せ申候、拙者軍役百五拾石分にて候、爲御存之候、此中如申盡長と在陣在京仕、其上關原以來父子はらくと成行申候、殊更^{「本ノママ」}有へく候て、度々上下仕、愚息も舊冬まで致在京ニ付而、弥借銀相重、今ニ返辨難叶迷惑ニ相究候、早竟身を恨申外ハ無之事候、然躰之時ハ御知行被下置候ても、御軍役不罷成、後日者むさと可被召上事覺悟之前後、此節いかやうニも被仰上、目録被召上候やうに頼存候、なにかと申候ても知行指上可申ため候之間、餘之儀者不入事候、其心得所仰候、恐惶謹言、

六月廿六日

本田助丞案文^(貞親)

帖佐彦左衛門尉殿

「藤野氏文書」

○ 契約

當國凶徒對治事、就善惡可成一味同心之思候、殊以山北野心仁等、誅伐之程者、何様雖違所存事候、或破在陣或不成歸宅之思、以一牀同心之儀可加對治候、此上者、就公私御大事者存身大事、相互見繼被見繼可申候、此條々八幡大菩薩・諏方上下大明神御照覽候へ、向後不可有違變之儀候、恐々謹言、

二月廿三日

(入來院)◎(花押)
重豊(在判)

嶋津大夫判官殿

(守久)

「正文在桃山氏」

自先日承候寺柱之假屋事、今度宮丸殿御越、委細被承分候間、可有御知行之由被申候、目出度候、尙々増五郎殿御越候つる、萬無沙汰之至于今恐入候、^{〔本マ〕}恐々謹言、

閏六月八日

(本田)
宗親(花押234)

桃山美濃入道殿

御報

「正文在桃山氏」

さん人ともなたし申て候へんこと、もたいたく候、身もこのほと小山に候つるころ、けふこそかくにて候へ、さう／＼さやうのさたもきゝ候へぬに、夜部ミやこのしやうより、いや二郎のかたより、よ中はかりしそくの候を、しふしに人のよせ候とて、しふしにたてゝいかやうに候やらんとて、人をたひて候、身はしらぬ事にて候、もたいたく候よし、へんし申て候し、たゝしふしのさいけの物といわせ候と存候て、もたいたく候、恐々謹言、

卯月十五日

明見(花押238)

ミの殿

「正文在桃山氏」

委者難盡紙狀候之間、不及申候、隨而京都より僧之使被下候、一昨日鹿兒嶋敷禰ニ被着候程ニ、屋形者此間財部より被申候程、京都僧も財部にて可有御見之由被仰候て、財部へ昨日可有御出之由、淡路方より爲御心得令啓

候、不審之時者示肝自是も可令啓候、恐と謹言、

八月七日

(北條)
知久(花押228)

桃山殿

進之候

246

「正文在桃山氏」

猶と昨日御出悦喜仕候、やかて參候て御禮可申候、

昨日御出目出候、雖然夜陰御歸候、其上無調法之御事無御意被存候、如何様令取入、諸事可申御禮、兼又彼御返事披見仕、認候て可遣候、自是も御返事之趣可申候、案文追而可懸御目候、返と不寄思候之處、昨日風渡入御候、此間式御意靜申承候、目出候、恐と謹言、

八月十九日

知久判

247

尊書之趣謹拜見仕候、然者重信方身上之儀、大興寺へ可致談合候、本田幡广守方親子他出被申候條、爰元少可隙入候する歟と之存事候、以此旨可預御披露候、心事恐惶敬白、

五月廿八日

(伊集院忠朝)
孤舟齋
笑岳判

進上 一乘院

御同宿中
まいる御實報

248

「一乘院文書」

雖未申通候用一書候、就中其方御歸依之高崇寺、於根來寺住山之砌、法流之儀令約諸候、然ハ愚僧老牀之條、急度御越、法流可有御相承様、御吳見所仰候、恐惶謹言、

神無月十六日

賴忠(花押251)

肝付三郎殿

(良兼)
御宿所

(本文書ハ「舊記雜錄後編一」三七八號文書ト同文ナリ)

249

②「今」春之御大慶勝例年重疊雖申事舊候、尙以不可有窮限

候、玆重と幸甚と、抑先日御祈念之事申上候、忝被懸御意候、千秋萬歲目出畏入存候、殊ニ御祈念之内ニ自屋形様國名拜領、満足此事候、隨而寶生院爲御使僧御光臨、御卷數所持、忝畏入存候、其時分我等鹿兒島ニて不致參

會候、心外存候、如何様以參上御禮等可申上候、萬吉、

恐惶敬白、

二月十日

(島津)
河内守久逸(花押出)

進上 一乘院

御同宿中

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」二二六號文書ト同ナリ)

250 加春之御慶自是可申上候^①處、遮而被仰下、殊ニハ配供

令拜見候、抑其方無爲ニ罷成候者、渡海仕、最前可令參

入候、恐惶謹言、

潤正月廿一日

藤原
運久(花押出)

進上 一乘院

御同宿御中

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」二〇三號文書ト同文ナリ)

251 不存寄候之處、遂拜顔候、誠祝着之到候、仍來廿六東郷

江可有御手仕由候、大賸金剛御看經奉憑候、如何様重而

參會可申承候事候、恐々敬白、

(文明十五年カ)

十一月廿三日

忠廉(花押出)

一乘院

御同宿中

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」一五五七號文書ト同文ナリ)

252 奥州様在國之御仕合能、早々御下向之御祝言、爲可被成

御申、態御使書之旨細々得其意、於細嶋達 上聞候、遠

路早々御満足之由被 仰出候、久太郎殿事も、別而今度

御奉公精入候て、御大慶之由候、其表下向ニ而候間、定

此比ハ漸下着たるへきと被思召^①之由候、此元旨相聞得

可申入段被成御意候、猶御使へ具申達候條、不能詳候、

恐惶謹言、

五月十一日

別府信濃守
景(花押出)

梶山權左様

進尊報

253

『感應寺文書』

○棧嚴寺住持爲龍節被越海、因玆簡令披閱候、惟悅不淺

者也、殊鎧壹領鎖臈并甲鉞形同毛收納、玆重雖爲不腆

之方物、表微禮蘇木貳千斤進呈之、一覽多幸萬緒忻慶不備、

林鐘二十日

琉球國 中山王 印

嶋津陽久公

回章

『全』

○就文船之儀、松下安藝入道奉尊書、蓋校嚴寺於使節被令成渡海候、因依賜之珍簡詳遂拜閱候、如尊意此方亦雖

無疎信之到候、依海路遠隔無音罷過候、彼文船之儀者從往古到鹿兒府之主へ者、御即位代ニ文船無渡海之儀候、自然應時於有要用之儀者渡船之儀有之候、其謂未成分別候哉、從上古依隣國相去、通音之儀于今無相違遠近之廻船連續候、近年不意日本賊徒之兵船往來、無隙閉塞海上候之間、海路不穩之由風聞候、然者當邦封内遠近之嶋、彼大小之津泊、日夜無油斷晨夕致警固、然間難及自邦之格護候て、於他國之禮儀今時分難成候所存之儘、不應尊命、聊以無疎意之儀候、殊主三司官

楮國公五十束拜受、不知所謝候、爲表菲禮、匱綿參拾把進呈候、此面多幸萬緒期後音之時候、恐惶謹言、

林鐘二十日

三司官

市來因幡守殿

阿久根播摩守殿

猿渡伯耆守殿

竹田越中守殿

古垣山城守殿

『琉球國江、感應寺茂林和尚渡海有之、^(傍)校嚴寺と書中ニ有之候者、其節當寺の楞嚴寺江致隱居居候節之儀と由緒書ニ相見得、按ルニ茂林和尚ハ感應寺十八世の住持、自天文廿辛亥至永祿八年乙丑、住山十五年と見ゆ、然レハ永祿八年ヨリ隱居ニテ、其後ノ事ニ當レリ、十三年春ハ雪峯なと被遣候、其前後の事ナラン、^(傍)蛇考事しかり』

『頂峯院文書』

依無題目候久不申承候、心外之到候、聊非疎略之儀候、御同心候者本望ニ候、兼又此際無沙汰之通爲申候、岩野對馬進之候、定而委細可申候、恐惶謹言、

六月十一日

【姓氏未考】
泰朝（花押190）

冠嶽座主御坊

『國分宮内社司澤氏家藏文書』

幣

御寶殿鎮壇祭之儀式之事

一饗三膳同折三

檜物

一式之二重

三双

一へいし瓶子

三双

一宮ノ餅

卅六合

一福出ノ餅

卅六合

各入物折敷

一日ノ數ノ餅

三百六十

同入物丸おけ二

一しとき餅にして

九ツ

一花米

同入物丸おけ三

一ひろさ一尺二寸ノ餅

三ツ

二連ハいかにも結構可有

一ひろさ八寸二分ノ餅

六ツ

各入物ゆりふた三ツ

一ひろさ四寸二分ノ餅

六十

同入物ふち高六十

一すゝきの魚

三懸

一名吉ノ魚

三懸

各臺六

一御水かへ

九

一てうし

三

一ひさけ

三

各檜物

一ほうわうの鳥形

一番

一白布

參十

一小袖あつ板うす板の間ニ

十四疋

一おり物

五疋

大ぬさの斬

一ミかき付ノ扇子

三本

一色ミノ絹 五疋 青黄赤白黒

一あさのにこき

十二

一綿

十二さけ

一女中方ノ御手くさの物、これへくし・たゝう紙・へに・しろい物・はこに入たる鏡一面・かもしまきなどのたくひなり

一手箱

一つゝら

一壇鏡四面

一つはめの鳥形四

一名作ノ刀

一腰金作

一具足三兩同かふと

一太刀

一對

一長刀

一對

一鍔

一對

一弓張弓

二張

一そや

二腰

一掛錢

三百貫

一雜紙

一束

一あらそ

一め

一長木

十

一竹

一束

御引物

一御太刀金ふくりん

一御馬

一鞍馬 以上 三疋

一鳥目 百疋

御一家 老中 國ミヨリモ馬・太刀可給各注文被下候

典厩様御太刀給候

社家中より

伊集院掃部助殿

留守殿

樺山安藝守殿

桑幡殿

鳴津左兵衛佐殿

澤殿

喜入三郎四郎殿

權執印殿

額娃山城守殿

佐多又太郎殿

各太刀給候

右横折 料紙貳枚

『宮内社司澤氏藏』

正八幡宮御寶前

奉納置 刀壹ツ長サ貳尺 銘國武

脇指壹ツ長サ壹尺 銘右同

右祈願者武運長久、子孫^⑧繁昌、領内安全、敬愛自

在之故也、仍致寄進處如件、

承應二曆十二月吉日

施主

喜入五郎兵衛藤原久供

(本文書ハ「舊記雜錄追録」一四九四號文書ト同文ナリ)

258

『全』

正宮

奉納置

鎧 一領 甲 一翼 籠手佩楯 一具

右意趣者、爲現病平愈、息災延命、武運長久、^{⑧一}〇〇

如意成就之故也、仍致納置處如件、

寛文元年辛丑六月十三日 ^{市來次十郎} 施主惟宗家賀

(本文書ハ「舊記雜錄追録」一九二七號文書ト同文ナリ)

259

『正文國分正八幡宮社司澤某家藏』

態令啓上候、抑先年者別而申承候、尤切ニ雖可申入候、
遠國故乍存罷過候、然者彼御三人三ヶ國之儀、御頼之由

被仰候、殊更御宮主と申、御法納所と申、何篇被添御心、

至日向表茂堺目路次傳之儀、御宿所頼入存候、殊彼御方

神道無比類候、於其表ニ御兩人頼入申候、以別紙可申入

候へ共、間ニ儀候之間同前申入候、可有御免候、委細者

彼御三人可被仰之條、不能詳候、恐ニ謹言、

二月三日

澄秀(花押248)

さお殿

さいしやう寺殿 <sup>御兩人參
御宿所</sup>

さお殿

森常陸介

さいしやう寺殿

澄秀

參御宿所

260

『正文在國分八幡宮社司澤氏』

就御立願、燈明之御布施貳貳貫文、善哉坊社參候、永々
御祈念尤可爲大慶候、恐ニ謹言、

十二月十二日

祐身(花押248)

澤殿
御宿所

261

『正文在國分正八幡宮社司澤某』

去刻致越山候之處、多々預御芳志候、誠畏悅無極候、終
ニ以書札茂不申入、背本懷爲過不少候、兼亦拙者愚老妹
進退之儀、近日企參上御仕(可令)申之由存候、爲此等之御
案内兼日用愚札此式候、無御難澁偏賴入存候、如此之段
爲令申、態以愚狀申展候、可被成御納得事、向後可畏入
候、恐々謹言

三月十六日

宗安(花押183)

澤養音公

參御宿所

262

『正文國分社司澤氏藏』

正八幡ニ忠勝篠切了戒被致寄進候彼刀之事者、新納家重
代ニ候、以後者必々可請之由被申候、能々御覺悟可目出
候、萬吉、恐惶謹言、

十月廿九日

盛朗(花押182)

澤殿
御宿所

263

『正文八幡宮社司澤氏藏』

引返シ真ニ

澤永澄老

人々御中
まいる

伊地知少左衛門尉

正宮小節供之儀、御辛勞之段、從是令察候、就其日取之
儀、此十一日可然由候、御代參之衆、追而御意可被成候、
將又爲入具、青銅壹貫二百文・中紙一束三帖、只今持せ
令進之候、猶諸慶期後面之辰候、恐惶謹言、

霜月八日

重房(花押24)

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」一七六六號文書ノ後半ト同文ナリ)

264

『權執印文書』

改年之御慶重疊雖申事舊候、猶更不可有休期候、萬幸々々、
然者諸勢大略被引歸候條、其方手衆事茂先々歸申候、又
貴所御事、頃被立候之様ニ聞得候、如何様追而可申達候、
佳事、恐々謹言、

正月十一日

(伊集院)
忠棟判

權執印殿

御宿所

265 (本文書ハ一三七號文書ト同文ニツキ省略ス)

266 『權執印家藏文書』

來月十五日、當社御放生會御神事、各就御在京者、可爲
何様候哉、若院所役繁多候間、爲國前難治候、且奉爲神
其恐候歟、可令延引候者承其左右、在國代官等之許に可
申下知候歟、恐と謹言、

八月十日

座主御房

左衛門尉時性
御判在

謹上

權執印御房

267 『權執印文書』

新田宮造營間事、重申入候之處、領家沙汰之分、可爲三
分之一之由、最前被定下候畢、然而其沙汰難置者、所註
於神領者、自今年除御祈禱料田支配間、殘之田地、以彼

分可被致急速之沙汰候、於國衙料所之分者、最前被仰下
之趣、不可有相違候間、御氣色候也、仍執達如件、

三月八日

按察使賴親

左中將殿

268 『權執印文書』

新田宮造營料所間事、如社家注文者、猶雖多未作之分、
日來營作之勤非無其功歟、所詮未作兩社并舍屋內仰合社
家、相計要須之所と、社家涯分之合力、可被終其功也、
年限延引事、地頭郡司等、年々濫妨事實者、所申非無其
謂歟、然者日來被定下年限之上、可被延引三ヶ年之由、
可被傳仰、此如之間、御氣色候也、仍執達如件、

六月廿六日

按察使
在御判

左中將殿

269 『權執印文書』

(花押 255)

270

『在水引權執印』

執印尼公去五月一日他界□之由被聞食候、子息等令上
〔洛〕云々條、着之時定有申□歟、執印職事を可被仰下也
 □其間有限佛神事沙汰、所司等無懈怠勤行之、可相待
 御下知之由、所被仰下也、仍執達如件、

六月五日

法眼性禪

〔虫付〕

新田宮所司等中

石清水八幡宮御回録領家壇□被下燒失事、定其聞候
 歟、□〔就中カ〕〔馳申〕、年々御年貢又抑留何様事□乎、尤非無
 御□候、但當社御造營者、十二月十四日御遷宮、同被
 遂放生大會□彼料足雜事等被仰執印方事、定被觸之候
 歟、念々可有其沙汰候□□正氏被下遣候、便宜事可
 令聞繼給候也、仍執達如件、

二月十日

沙弥〔花押〕

新田宮權執印御房

271 『正文在水引權執印』

〔引越シ裏ニ〕
 自八幡被遣大貳殿〔雜掌申二度 建長元年〕

薩摩國新田宮申神王面修複并清祓事、去月廿九日御返報
 承知、子細之由仰給候、存外候、被下宣旨、大府宣候之
 上者、不可有御不審候、又目代請文不見領狀之儀歟如件
 請文者、仰主神可遂其節之由、領狀勿論候、此上何可被
 尋府官等候哉、但所觸申之本意在修複并清祓用途事、目
 代書不審有之間、任先例可有御計歟之由、所令申候也、
 今者此一儀弥念可有御下知候歟、恐々謹言、

八月五日

法印棟清

謹上 大貳三位殿

272

『在水引權執印』

造宇佐宮薩摩國所課事、被免除新田宮領候、院宣并六波
 羅御教書、令披見正文等候早、此樣可披露候、恐々謹言、

十一月十八日

宗覺〔有御判〕
〔花押〕△

執印社司御中

〔本文書ハ「舊記雜錄前編」一四五八號文書ト同文ナリ〕

273

「大口高城氏藏」

〔引カヘシニ〕

大かたとのへまいる しけのりゐ

大かわとのへ申され候をせうの事、このとし月うけ給候ニ、いまゝてみちやり申さす候事、心ニかゝり候、とみつのなかへちきやうふんかわそのしほ入の事、しさゐあるましく候、しほしまたれ候へと御こうしうあるへく候、いま時うちの人へ候はん、めしつかい候物も候ハす候、ミやうねんさきにもなかへとのゝ事、さため申候へく候、又ふなつ田・ひら田・とうゆてん此三丁の事ハ、このしたちより御ちきやうあるへく候、返くハまへも御ちけへく候、とミゝつしほ入の事、子細あるましく候、このよしよくく大かたとのへおほせ候へく候、あなかしくく、

八月廿六日

重令〔花押188〕

274

「眞本篠原自淨院家藏」

覺

今度地頭新納加賀殿遠行ニ付、當地仕置別而可被入念旨、至曖衆被 仰出候、各以其心得萬事可被見合候、常々被仰出御條書之趣ハ不及申、或背御法度、或曖衆之下知不致承引、或所之さわりニ罷成族之人於有是ハ、衆中下ニよらす、早速可被申出候、地頭不相究内、弥被入念專一ニ候、以上、

午二月廿七日

〔新納久了〕
新又左衛門

大口横目衆

〔本文書ハ「舊記雜錄追録」一四九九號文書ト同文ナリ〕

275

「眞本篠原自淨院藏」

以上

九日の御祝義と候て、御小袖三ツ何も御ねん入候了、一入幾久とやくに□可仕候、恐々謹言、

九月十一日

石治少
〔花押21〕

よし久様
御内

276

仙洞御腫物之事、弥以御平愈候、公家へ大慶可有推量候、書裏之趣以御次可申入候、可心易候、兼又筆五・帷五・太刀一腰・馬代黄金拾兩令祝着候、猶使者可有口上候也、

五月十二日

(近衛信孝)
(花押110)

薩州拾遺

277

猶と秋月殿のからめ物ハ未參候、以上、

一書令啓上候、拙者も今月三日之晩ニ、長崎へ着津申候、八人之搦物共之様子、爰元御奉行様へ則申上、夜入候て搦物御請せ候間、渡申候、彼者共荷物等者、昨朝相渡申、何も口能無御座相濟申候、八人之者、昨日もかうもん候て、色々御間爲被成由候へ共、其元ニ而之申分、不相替由傳承候、定御返事今明日之間ニ可被仰聞[㊤]候[㊤]與存候條、急度罷歸萬々可申上候、此等之趣爲御心得候、恐惶謹言、

八月五日

甲斐右京亮
重政[㊤]花押72

鎌田源左様

新納加賀様

(本文書ハ「舊記雜錄後編五」一〇七三號文書ト同文ナリ)
人々御中

278

雖未申通候染筆候、抑今度京都依不慮之錯亂、諸事無外方故、匠作[㊤]以使札申候、此砌於預馳走者、可爲

祝着候、仍五明三本遣之候、猶進藤筑後守可申候也[㊤]狀如件[㊤]

天正九年[㊤]
十一月廿六日[㊤]近衛信孝[㊤]花押108

杣山安藝入道殿

▽[㊤]
杣山安藝入道殿

御判

(本文書ハ「舊記雜錄後編二」一二四五號文書・一三〇八號文書ト同文ナリ)

279

雖未申通候染筆候、抑今度京都依不慮之錯亂、諸事無外方候、此砌於預馳走者、可爲祝着候、猶進藤筑後守可申候也、狀如件、

十一月廿六日 (近衛信尹
(花押109))

喜入式部太輔殿

(本文書ハ「舊記雜錄後編」二一二四七號文書・一三〇六號文書ト同文ナリ)

280 「正文在新納三河忠德入消楚」 「此書忠勝譜中ニ在リ」

雖比與候短尺書進之、

「雖未申通候、由緒異于他事候間令啓候、抑一亂以來不辨之儀難盡紙上候、此時一段預合力候者、可爲祝着候、併芳情頼入候、猶九澤軒申含候、每事期後信候也、狀如件、

卯月廿七日 (近衛尚通
(花押山))

(新納忠勝)
嶋津近江守殿

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二二二七六號文書ト同文ナリ)

281 「全上」 「此書近江守忠勝譜中ニ在リ」

「雖未申付候、以書次令啓候、抑御家門御事吳于他御由緒候處、御無音實背御本意候、定而聞召及候哉、公

方樣御祝言之事被遂其節、既去三月 若公樣御誕生

候、天下安基御家門殊御大慶候、自然相應之儀可申入、

隨分不可存疎意候、然而依數年都鄙亂逆、御家領等非

分族押妨候、言語道斷候、如意者可及御斷絕候條、口

惜次第ニ候、此砌以舊好之儀、被成御馳走被扶助申候

者、公私所仰候、此等趣態可被差下御使節之由、御有

増候、不^{②知}案內之間延引之刻、九澤軒下國之由候間、雖

被致故障候、種々被仰被言傳御書候、并花月五十首御

筆、同從禪閣御書短冊十首御筆、乍御憚被下候由、得

其意可申旨候、猶彼軒可被演說之、可得御意候、恐惶

謹言、

卯月廿七日 (英)
(花押116)

謹上 (新納忠勝)
嶋津近江守殿

進藤筑後守

謹上 嶋津近江守殿

長美

「雖比與候短尺書進之候」

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二二二七七號文書ト同文ナリ)

282

雖比與候短尺書進之候、

「久不申通無念之〔到〕候、抑一亂以來不辨之儀過推察

候、舊好異于他事候間、此時一段預合力候者、可爲喜
 悅候、猶九澤軒可被申候、每事可然樣頼入候也、狀如
 件、

卯月廿七日 尙通御花押

嶋津又六郎殿
(忠應)

283

「依無差題目不申通背本意候、抑一亂以來不辨之儀過
 推察候、舊好吳于他子細候之間、此時一段預合力候者、
 可爲祝着候、併芳助頼入候、猶九澤軒可有演說候、諸
 事期後信候也、狀如件、

卯月廿七日 判
(近衛南通) 御親父近衛殿樣也、
 但御判計也、

嶋津豐後守殿

284

「以幸便令啓候、久御無言實被背御本意候、定而聞召及
 候哉、公方樣御祝言之事被遂其節、去三月若公樣

御誕生候、天下(根本)基御家門殊御大慶候、自然相應之儀

者被申入、聊不可存疎遠候、抑數年都鄙念劇御家門領
 等不慮相違候、言語道斷候、如今者忽可及御斷絕候、
 歎入候、御由緒吳于他御事候、此時涯分被廻御計略被
 合力申(候者)者、公私所仰候、此等之次第態可被差下御使
 節御有増候折節、九澤軒下國候之條、雖被堅辭之被言
 傳御書候キ、短尺御筆同禪閣御書短尺十首御筆、乍御
 憚被下候由得其意可申旨候、可得御意候、恐惶謹言、

卯月廿七日

長英判

謹上 嶋津豐後守殿

御館

眞付
 進藤筑後守

285

「好便之條令啓候、抑國中無事之由、尤珍重之吳于他由
 緒之儀候之條、別而可申通之處、無言無心元候、仍此
 短冊惡筆雖其憚多候、書進之候、將又以九澤軒申候儀、
 馳走憑入候、巨細猶長英朝臣可申候也、狀如件、

四月廿七日

判〔近衛殿〕

嶋津豐後守殿

(本文書ハ二五六號文書ト同文ニツキ省略ス)

『〇』木姓 (朱)
白兔毛
[]

アヲケ
『ロクシ』

『〇』火姓 (朱)
驕驕毛
[]

カケ
『クワリウ』

『〇』土姓 (朱)
猿毛
[]

サルケ
『エン』

『〇』金姓 (朱)
雲雀毛
[]

ヒハリケ
『ウンシヤク』

『〇』水姓 (朱)
儀渠毛
[]

カワラケ
『キキヨ』

「川上十郎左衛門尉殿御本自筆ニ書付給也」

(本文書ハ二五九號文書ト同文ニツキ省略ス)

(本文書ハ二六〇號文書ト同文ニツキ省略ス)

(本書文ハ二六一號文書ト同文ニツキ省略ス)

(本文書ハ二二五號文書ト同文ニツキ省略ス)

有馬丹波哀成哉、うりつるの枝にたゑかたき言の葉と
もなれり、世にありし時ハつかふるに道を一ツにして
二ツ心なかりけれハ、事君能致其身といへる古語を、
歌の上にして六首をつらね手向ぬれと、猶残り有り候
半んも限りとそなりけらし、

事 しらま弓矢竹の一筋に、弥陀の教も二ツあらしな
君 雲となりけふかと消し鳥邊野之草葉も茂る露なミた
哉

能 後の世をてらす誠の灯に向ハム法の花もひらけん
致 散つくす花の梢の時鳥忍ふに絶ぬ鳴音ならまし

其 苦のした向ふもうらめし哀れ世にいつゝの十ハ夢か

現か

身 白雲のはるゝ眞如の月や日にめくりて絶ぬ光とをし

れ

右有馬丹波重純、初名次右衛門死去之節

家久公より被下候御詠歌也、

(本文書ハ『舊記雜錄後編四』一三九二號文書参照)

293

(本文書ハ二四號文書ト同文ニツキ省略ス)

294

覺

一 御普請之事、

一 篋きり之事、

一 たのもそや之事付竹尻之事、

一 板城戸之事付城を山切ましき事、
[近敷]

一 諸口番衆きはしはき之事、

一 弓・鐵炮之事、

一 城屋敷あらすましき事、

一 番普請懈怠有間敷事、

一 鹿屋周防介殿被存八木之事、

一 富隈御藏米之事、

一 秋月殿財部へうつり之事、

一 福嶋江往邊之仕諸事可被暗事、
[本のまゝ]

以上

七月廿八日

桃山權左衛門(花押75)

(本文書ハ『舊記雜錄後編三』八一六號文書参照)

295

別錄

白銀五千兩

綿 五百把

右所被遺於中山王者也、

十月廿六日

右返翰并目錄林道春案之御書者大橋長左衛門

八月二日之御狀令披見候、然者御茶入之御禮彼是種子嶋御藏入四千石餘御拜領候爲御禮、西村越前方被爲差下候、念比^ニ上聞仕、一段御機嫌之儀共^ニ御座候、殊更到拙者御銀子壹枚預過分至極^ニ候、猶越前方可被申達候、^{〔本のまゝ〕}恐^ニ謹言、

(島津)

下野守

九月廿七日

久元判

種子嶋左近太夫殿

人々御中

去年於國分下馬出合之儀、江戸へ達 上聞候、本田藏人・二階堂傳右衛門尉・是枝長左衛門・筆者田口七兵衛尉・落合甚兵衛尉、此五人之儀者、知行屋敷被沒所、深々敷寺領可被仰下候由御座候、下馬始仕候御中間隼人、二番九郎兵衛尉、國分衆刀を以石をたゞ候藏右衛門尉、此三人事者、可被行死罪之旨、右今度以市來八左衛門被仰下候、此等之趣御披露尤候、恐^ニ謹言、

三月廿五日

三原左衛門佐判

鎌田出雲守判

山田民部少輔判

彈正太弼判

新納仲左衛門尉殿

御宿所

古肝付彈正忠武勇無其隱候、其跡可有取立候、家中之前田代^{⑩ニ}之戰功無比類候、爲其忠直召出、高四拾石所宛行之狀如件、

年號月日欠

義久御判

前田久右衛門との

〔右義久公御譜中ニ有之也、右文書難信故、正徳二年夏右正文取寄、於御記錄所致一覽候處、究而妄作別條無之旨、市來安右衛門・川上平右衛門於二名見究也〕

(本文書ハ「舊記雜錄後編三」七九六號文書ト同文ナリ)

態令啓^{⑪達}候、仍從當山御分國中至諸旦方、兩季捧御祈禱候之^{⑫如}處、年中一度可罷下之由被仰出候之趣、令承^{⑬閑字}

知候、雖然、山上窮惱^{◎之}候、爲新御寄進被成^{◎關字}御分別、二度下向^{◎之}候^{◎御取合}様、奉賴候、此謂去年秋月種實公雖御裁判候、不落着之條、以使僧致歎^{◎訴}候、偏被對御神慮、於被成御納得者、弥御武運長久之基候、猶巨細彼學琳坊可申達之條、不^{◎能}書載候、恐^レ謹言、

三月十四日 政所坊 連長

伊集院右衛門太夫殿

村田越前守殿

平田美濃守殿

本田下野守殿

明照坊

花藏院

福壽坊

堯榮

參御宿所

彦山衆徒中

▽◎ 伊集院右衛門太夫殿

村田越前守殿

平田美濃守殿

連長

本田下野守殿

參御宿所

(本文書ハ「舊記雜錄後編」一一三〇號文書ト同文ナリ)

300 彦山一年兩季下向懇望時 案文 御返書

就年中兩季下向之儀、御使僧殊秋月種實別而入魂之荷擔、更難默止之條、改先規任惘望候、被准此等之旨、滿山各無^{◎怠慢}(懈怠)祈念之儀所希候^{◎ナシ}(也)、猶忠棟可申達候、以上、

七月十七日

彦山

政所坊

▽◎ 御返札

(本文書ハ「舊記雜錄後編」一一五〇號文書ト同文ナリ)

301 今度陣中之大將役兩人江被仰付候、其上談合衆六人被召

加候間、何事も此方へ不及被得御意可申調候由、以兒玉筑後守被仰出候、甲斐掃部介、有馬左近將監江申含候間、可被聞召達候、恐惶謹言、

正月九日

(用上) 久國

豐後守殿

下野守殿
人々御中

302 「入來東郷兵右衛門所藏」

忠隆公御代 座敷

入來東郷兵右衛門所藏

鹿兒嶋へ澁谷參上之時

主居 中居

客居

入來院又五郎

東郷弥次郎

伊地知周防入道

桃山藝州入道長久

高城秋月

祁答院又次郎重武

伊地知縫殿助

高城珠全

303 「正文在新納氏」

本田因幡守

伊地知周防守

新納殿

「上巻ノ書様如此也、無禮紙ニ上巻はかり也」

兼親

人々御中

304 「正文在新納氏」

新納殿

人々御中

若殿様初而以書狀被仰通候之條、千秋萬歲候、仍御太刀一腰・馬一疋御進覽候、就如比之御禮等御參上之事者、年内無餘日候、殊御佳事之一段候之間、御返札簡要候、此之由宜預御披露候、恐々謹言、

十二月十三日

兼親

重貞

誠今年之御慶、以面拜雖申事舊候、猶以不可有盡期候、珍幸々々、抑去年以來長々御在陣串良爲御滞留、取分御辛勞之事、于今申居候、其謂本田方可被申入候、於私每度御懇之御意、特此御音信千萬之畏入候、兼又屋形様御氣分悉御平愈候、雖然土用中候つる、閣萬事御養性候、愚拙迄御音問之通致披露候、御悅喜候、此等之通可得御意候、慶事尙期後喜候、恐々謹言、

卯月五日

(村田)
肥前守經安(花押)

謹上 新納殿
人々御中

305

「正文在新納氏」

如仰連々可申通候之處、海路依不輒候、乍存無音罷過候、御懇之御芳問祝着存候、仍彼使僧相州江越山候條々承候、畏入候、巨細之趣此御使僧へ令申候間、閣筆候、恐と謹言、

極月七日

(喜入)
忠譽(花押91)

新納殿
御返報

新納殿

攝津介

忠譽

御返報

(本文書ハ、「舊記雜錄前編」二二三三八號文書ト同文ナリ)

306

「正文在新納氏」

已前預御使僧候、祝着不少候、如此之御禮可申之由存候

之刻、今又御音問誠御頼母敷候、仍庄内城拵番衆等申付候、又豊後之時義就風聞委細承候、快然候、爰元年行可申候條、不能重言候、恐と謹言、

五月十四日

祐商(花押47)

新納殿

伊東

新納殿

祐商

307

就亂劇不可然之儀、從義興樣預御使僧候、誠以恐悅不少候、爰元之時義傳芳院委曲御存知候條、定可被達候歟、然者不能重言候、以此旨可預御披露候、恐と謹言、

二月十六日

近江守忠勝

謹上 杉三河守殿

嶋津

謹上 杉三河守殿

近江守忠勝

「正文在新納氏」

近代者不通罷過候、所存之外候、於自今以後者如前代可
申入覺悟候、預御執持候者、可爲本望候、仍厚板一端青
地進之候、恐々謹言、

霜月廿三日

忠勝在判

本庄殿

御宿所

新納

本庄殿

御宿所

忠勝

「正文在新納氏」

如仰此方就祭禮與風存立候、被聞召付、御音書令祝着
候、就中妻候者御意見申候、御落髮思被留候之由、悅可
申候、仍我等古鳥屋繫立候、鷹者未渡候之由申候、可爲
此比候哉、御待察存候、御鷹床敷申爲候、古物者用ニ難
立候、鷹を所望可申候、笑敷候、恐々謹言、

八月廿四日

(鳥津)
忠朝(花押122)

新納江州

御返報

豐後守

新納殿

御返報

忠朝

「正文在新納氏」

態令啓達候、抑爲嘉例、御祈禱卷數并牛王寶印令進獻
候、御祈念御事者、増々御嘉運長久精誠不可有怠慢之儀
候、依遠方連々無音、聊非疎略之儀候、委曲使僧可申述
候間省略候、恐惶謹言、

拾一月吉日

信梁(花押180)

新納殿

參人々御中

彦山 政所坊

信梁

新納殿

參人々御中

「正文在新納氏」

又安千代殿可被懸御意之由候、櫛間一夜留に可被通之條無曲候、

御音問之趣、令祝着候、仍當所神事之笠懸可有御覽之由承候、親之着時より恒例までニ仕候間、更ニ御見物有へき事不可有之候、每事迷惑此事候、恐ニ謹言、

十月卅日

忠朝〔花押122〕

新納殿

御返報

豐後守

新納殿

御返報

忠朝

312

〔正文在新納氏〕

如仰前日者罷越懸御目候事、于今申居候、仍小笠懸爲御見物可有御越由示承候、如何ニ存候、可有御覽非儀候、本田方昨日被着候、巨細者豐州可被申候間、不能詳候、恐ニ謹言、

十月廿日

〔島津〕
忠廣〔花押134〕

新納近江守殿

御返報

近江守殿

御返報

右馬頭

忠廣

313

當年之御慶萬幸不易々、不可有其期候、仍而依通路存無音打過候、其表弓箭不慮ニ成行候由其聞候、無是非候、前々者細々申承候之條、用便書候、仍表革三枚七領形聊表空書計候、猶妙法寺可進候、恐ニ謹言、

二月十四日

〔相良〕
長唯〔花押112〕

新納殿

御宿所

314

〔正文在新納氏〕

進上

御太刀

一腰白

御鎧

一領白糸

御弓征矢

御馬

以上

一疋 鶴毛印雀
目結御鞍置 (舊)

新納近江入道

忠勝
「法名タルヘシ」

315

進上

御太刀

一腰 友成

御馬

一疋 栗毛印
二遠鷹

以上

新納近江入道

忠勝

(表紙)

年間不詳

附 錄
舊 記 雜 錄
卷 四

316

「雖未申通候、以書次令啓候、就御家門御由緒連(島津勝久)匠作被仰通候、御無案内之條、于今御無音、被背御本意候、仍以御書仰候、并五明三本得其心可申旨候、抑近年依都鄙念劇御家門領一向有名無實候、公私零落過賢察候、以舊好匠作御助成之事被仰懸候、同被馳走申候者可爲喜悅候、併御賴之由仰候、猶使節春色山伏可令申

候之間令省略候、恐と謹言、

九月二日
嶋津豐後守殿

進藤筑後守
長美「英イ」

317

「御札具令披閱候早、抑就修理大夫蒙 尊儀候、至私被成御書候、誠過分之至候之條(註)忝、并五明三本拜受、畏頂戴賞翫吳于他候、兼又都鄙之念劇、御領等御不意之儀承候、(註)忠兼可致馳走候哉、可準彼儀候、此方干戈之轉變亦御使節可有奏達候歟、雖些子之至候墨一丁(圓形・鱗文)香一斤令進上候、萬可然樣御執申憑存候、恐と謹言、

九月四日

進藤筑後守殿

御返報

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」一九八四號文書ト同文ナリ)

(島津) 忠朝「大永五年乙酉比ノ九月四日ナラン」是說頼家爲關白氏長者四月五日」

318

「雖未申通候染筆候、抑今度京都依不慮之錯亂、諸事無外方候、此砌於預馳走者可爲祝着候、猶進藤筑後守可申候也、狀如件、

十一月廿六日 (近衛信尹)
(花押108)

喜入攝津守殿

〔本文書ハ「舊記雜錄後編」一二四六號文書・一二三〇七號文書ト同文ナリ〕

319 〔在諫方舍人家來小林中宿野田和泉家〕

「雖未申通候染筆候、抑今度京都依不慮之錯亂、諸事無外方故、匠作へ以使札申候、可然之樣取成頼入候、仍五明三本遣之候、猶進藤筑後守可申候也、かしく、

十一月廿六日 (近衛)
尙通御花押

〔宛書不詳〕

320 「雖未申通候染筆候、抑今度京都^{④依}不慮之錯亂、諸事無

外方候、此砌於預馳走者可爲祝着候、猶進藤筑後守可

申候也、④(ナシ)
〔狀如件〕、

十一月廿六日 (近衛信尹)
(花押109)

新納武藏守殿

〔本文書ハ「舊記雜錄後編」一二三〇五號文書ト同文ナリ〕

321 〔正文在飯野土井尻神力坊〕

猶々對相良家依干戈働路次不任意時分候、爰許御納得專用候、如此之時義被添心、兩度之使僧御祝着之由能々可申之旨候、

仲陽之比以祐清坊中平様御内縁之事被申上候、則達上

聽候、御返事之趣當國之銚楯最中謂彼謂之一向難事成、殊更海陸不自由候、春之御返事茂以今御同意候、聊不可有取成候、堅可被停止候、巨細彼方可有口上候之條、令省略候、恐々謹言、

八月十貳日 (川上)
忠智(花押81)

神力坊

御同宿中

「フシ目」

河上左京亮

「上包」

忠智

神力坊

御同宿中

322 〔正文在飯野土井尻神力坊〕

此間御番參候て、種々御懇志之段難謝候、明日如御約束

323

之無足衆廿人餘申付可差籠候、然者五日之分着飯之事被仰付候て、堅固之御分別所仰候、諸事相當候儀乍不申、御番所へ仰付肝要候、御働之御隙明次第直如其方人々參、御番之日數閉目可申候之間、以面上候可得御意候、心事恐々謹言、

八月廿五日

(新納)
忠元(花押202)

ノ

新納刑部太輔
忠元

神力御坊

中野四郎右□尉殿

御宿所

をほへ

八月吉日

天正五年よりかんせん申候、

丸田久右衛門尉

年十六よりてきうち候、

乗祐(花押)

てきのかす三拾六人うち申候、

猶と案内者として、加藤式部左衛門殿雇候て、い

324

かゝ候はんや、但大彦入へ萬談合肝要候、

態令啓候、馬越之前目を御加増拜領仕候、明後日廿六日ひのへさるの日、吉日にて候、ミ・むま・ひつし此時よく候、さてハ大田雲雪頼存候、(出羽守忠孝(尾越地頭))□申候、日記付ニハ窪兵太可被申付候、案内を大嶋殿へ番衆壹人被遣可被申入、專ニ可罷歸、巨細可承候、萬吉謹言、

(新納忠元)
拙齋

十二月廿四日

爲舟(花押203)

丸田久右衛門尉殿

參

(本文書ハ「舊記雜錄後編三」一四三二號文書ト同文ナリ)

猶と普請ニなにかしはたらき候、何ものふさた申候

由、以後可承候、上手ハ無答たるへく候、

御普請辛勞令察候、人衆廿人可相加之段申付候、閉如何候覽、承度候、參候分以日記可承候、各ニ辛勞仕(參)由申度候、恐々謹言、

八月晦日

拙齋(花押203)

丸田仲右衛門尉殿

「乗祐入道元心と號、新納加賀守忠清へ殉死」

〔本文書ハ「舊記雜錄後編」二五〇九號文書ト同文ナリ〕

325

猶と餘ニ慮外候まゝ、我分より申候へ共、不相届候
まゝ、直書を遣候、客來之儀、其方ハ有ましく候、
爰方客來計ニて候間申候處、したてかをく、くせ事
可申事候、

爰元不如意之由、度々申越候、先日宮路早右衛門方歸宅
に堅申候、不相届候哉、兵粮雜事等之儀、何篇無遣候事、
覺外千萬、爰元何かい候て、閉る在所にてなく候、存
なから由斷之儀、迷慮之至候、野心ニ者有ましく候歟、
取分承度候、

拙齋

霜月廿六日

爲舟(花押部)

丸田久右衛門殿 拙齋

〔本文書ハ「舊記雜錄後編」二四〇四號文書ト同文ナリ〕

326

『入來家臣東郷善兵衛藏』

年頭ニ

惟新様

二 川上殿

右者式三獻

八 北郷殿

三 下野守殿

七 梶山殿

右者古鉢三獻

入來院殿

右者澁谷三獻

吉利殿

菱刈殿

右ハ三ツさかなニ而三獻、其外諸地頭・御老中衆同前

也、

二月七日

三 新納殿
一 相模守殿

五 佐多殿
六 喜入殿

四 豐後守殿
九 比志嶋殿

二 中務殿
一 下總守殿

根占殿
大膳亮殿

伊地知殿

327

『鹿屋氏文書』

328

於度と雖令申候、御返事承わけたる無子細候之間、重而進狀候、世上如此何となく隔申候する事、難儀ニ覺候、惣別之世間者兎も候へ、一家中心ニて大幸を請候とも、又目出候するも可然子細ニ候、急ニ申談度候、親候者よりも老名共申合候て、急ニ道行候様ニ計申候へと被申越候、委細ハ老名ともより可申候哉、此間も令申度候へ共、なにとやらん、我等を御うたかい候やうに承候つるほとニ恥入存候て斟酌申候、細と御返事ニ承候者、可目出候、恐と謹言、

小春十日

(梅北)
國兼(花押58)

鹿屋殿

『鹿屋氏文書』

龍右記方へ之御狀趣、委細申候了、抑詞堂料足十貫文請取申候、諸事御越候時可申談候間、閑筆候、恐と謹言、

十一月十三日

守邦(花押166)

鹿屋殿

329

『山田氏譜中』

「正文在山田七郎右衛門久通」

又一昨日其方へ御符物立候由承候て、刀落申候、此方物立事かけん仕合候、近比思出仕ならへ、又御用ケ間敷申事候へ共、くまでのゑにことをかき申候、しいの木ぬぎやなと候へ、のそミ存候、たのミ存候、有合候へ、今日使ニ可給候、又くしらの御きふん承度候、大年様御心得候て可給候、

二三日者不申承候、何事共候哉、此方無指事候、中野方昨日こそしふしへ被罷越候、貴所様彼方へ御越いかゝ候哉、内者御急候て可然存候、殊ニ大年様被仰候子細兵右急度被仰、則可爲目出候、我等も中野方萬事頼候由申候間、爲御心得候、恐と謹言、

仲春廿三日

久利(花押)
久利(剣)

「上カキ」(忠豐)

山田安藝

殿

御宿所

久利

「右裏ニ有之」
新納尾張守

「山田氏譜中」

「正文在山田七郎右衛門久通」

尙と爰元之活合之用心尤可入候、御油斷有ましく候、北原殿へ御音信候、定先と親類可被進候哉、又殿さま御出頭候へ、西堅御指有へき之由聞得候、

返と彼御合力頼存候く、

音書之趣得其心候、仍從廻豐州之依御意見野臥可被停止候哉、尤可然候、隨而廻之者五六人自此方指候、^{「本マ」}忠朝無

爲御料理候處ニ、下と如此之動曲事候由、御意候て可有

御返にて候、され共直ニハ如何候と被思召候之間、豐州

まで可被進にて、如垂水取人御道候、定豐州御調法有へ

く候哉、さ様之時義ニ付候て、鹿兒へ使僧御上らせ候、

被歸候者可聞得候、折節殿さま道場法事ニ御詣候、爰元

子細存仕候間、不請 御意候ても大概令申候、今度組衆

皆同御出頭殿様御同道候へと被仰出候、此間ハ柗山殿・

北原殿兩人之前、御屋形様御意不窺候て相滯候、頻に豐

へ被仰候間、豐も又屋もしへ堅御申候條、御赦免之由候、

331

禰肝ハ所領之事被申候へとも、殿様豐御談合候て御申候

間、御承引候、此上ニ肝ハ尙と所領被望候、不是非候、

御出頭者今月末たるへく候也、其時分以參上御目ニ御懸

可然候、さのミく夏大鹿多被聞召候てハ、腹中可有御

煩候也、猶又我等かこ嶋御供ニあたり候、當病と申老衰

と申、迷惑此事ニ候、賢察之前ニ候哉、萬期後音候、恐

と謹言、

五月十六日

(正久)
(花押97)

「上カキ」

山田安藝守殿

御返報

正久

(右奥ニ有)

限江

「山田氏譜中」

「案文在山田七郎右衛門久通」

又此狀夜前認候、今朝已刻、肝付三郎殿渡海候、今

日者惡日候間、定明日可被懸御目候哉、次ニ柗山

殿未渡海候、^(尙ニシ)覽と存候、隨而庄内之時義御

「さ右可然候、禰寢殿ハ例之廻にて候哉、未^{⑧舟}〔承〕着候、去十六日從肝付殿被進使僧、同十七御出頭、可目出度之由候條、同十七已刻程被解纜候、從時分思之外吹晴候て、安々と御出船候、一里程紀伊守殿被挽出御迎御出候、

一遠干かたにて候間、御座舟從渚遙被留候、然處地下之海士共餘多御舟ニ添手、汀ニ引のはせ候、一見物貴賤多と合手おかミ候キ、且者そろおもはゆく、一御舟着候へハ、從豐州以大村方舟本ニ御禮候、一御宿に御出候へハ、以二郎四郎殿豐州へ御禮御申候、一此前にて候者、老中まで御着之御禮雖可被仰候、そ忽之狀被思召候間、斟酌ニ候、此等之趣、以大寺方豐州へ被仰候、無其御返事同從御屋形様大寺治部少輔方にて、遮而着之御禮被仰候、其御禮以二郎四郎殿御申候、老中へ恒吉佐渡方にて被仰候、一御宿ニ最前伊地知殿・梶原殿被參候、其後池袋殿・平田殿被參候、其後實久御内之方河田飛驒殿被參候、

一殿様御宿ニ遮而豐州御出候、其後以紀伊守殿御屋形様ニ、早と殿様御對面可有^{⑨之由}〔旨〕被仰出候、其御覺悟候へと内義候條、如佳例御酒御上候、豐州戌刻程ニ御屋形へ御指出候て、早と御參候へと被仰候條、やかて殿中へ御參御目御懸候、目出度候、一殿中被明御隙御退出候刻、眞幸使僧本田紀伊守殿・同又五郎殿以同船參着候、音信御門外にて被聞召、豐州以談合此等之趣被窺候處、^{⑩棟候間}〔餘源左衛門〕無對面候、明日者惡日候、來十九可有御覽之由被仰出候間、殿様各とニ先以御見參候、

一此間者、連日風雨以之外ニ思候處、御出船之砌より天氣能候て、爰元仕合如意満足ニ候、偏ニ天道ニ御相叶候也と賴敷存^{⑪計}〔刻〕候、何事もく被任御心候、却おそろしく存候、此方之時儀ハ可然候、至爰庄内三ヶ所之間、一ヶ所も越度候てハ、何之曲も有間敷候、御油斷有ましく候、

一周防殿・壹岐殿以別紙雖可申候、此方取亂、又者便舟急候間、不能巨細候、此等之由可預御心得候、又此

狀を兩所へ可有御遣候哉、しふしへハ申上候、爲御心得候、萬期後音候、恐々謹言、

六月十七日

正久 在判

「宛ナシ」

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二二五六號文書ト同文ナリ)

「山田氏譜中」

「正文在山田七郎右衛門久通」

尙々せかるゝ躰無心元候也、其方城誘御用心專一候、あもしへも申度候也、

如仰此度參候て、面談本望満足ニ候、せかるゝ時義何と可成候哉、終ハ於弥可破候て、西賢様愚宿ニ御座候、無會尺不及申候、又貴所様御傳言候由可申候、次ニ山こはう候とて、無曲こそ候へ事候、取亂候て不能巨細候、恐々謹言、

六月廿八日

正久(判) (花押)

「上書有之」
大年御回章

正久

限江
「右裏ニ有之」

「山田氏文書」以下數通片書スヘシ

「か子被立候」^{元本}「同」^{返候て}又かなかけ遅御遣候て、舟にものせず候、有せ御合力にてこそ候へ、但かこへ御音信可有候はん、又各庄内へ番之事、已四郎殿にて被仰候分、所々より無沙汰候とて、ことのほかの御述懷に候、爲御心得申候、

貴殿さま此境就御越、御音書則懸御目候、御悦喜之由申せとて候、仍早々可有御渡海候之處、禰寝殿・肝付殿御待候之間、延引候、來十六舟津まで兩家可被立にて候、相州へ飛脚御まいらせ候、去十一歸來候、又六郎殿可有御出頭候、順殿様御法第と御頼（中略）候、世中先々可然こそ候、トノサマ、そ候へ、此節境目く一段用心可入事ニ候、恐々謹言、

六月十三日

正久(判) (花押)

「元本」
「封シメナルヘシ」限江

『上書ニ有之』
山田安藝守殿

御返報

正久『匡久〇』

『匡久』

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」二二五號文書ト同文ナリ)

『山田氏文書』

尙々申候、御名乗之事御校量可然候、但不可過御思安候、

殿様此境就御滯留、御音信御申之趣、致披露候、御祝着之由被仰候、

一御屋形様 殿様江被召御酌候、然者則殿様御腰物御進上候、則〇御屋形様御腰物殿様江御取せ候、其外色々御懇之儀ニ候、

一時久御奉公如前代御申候へと、以面御頼候、如此候條殿様威勢不及申候、

一相州御出頭相定候、

一禰・肝座敷之上下依被爭候、出頭延引候、豐殿色々以御辛勞〇御屋形様江被懸御目候、目出度候、

一實久・相州御間、御和融之義、是又御料理最中候、一貴様御名乗 御屋形様御名乗ニ候、如何之御分別候哉と殿様〇御意候、爲御心得候、毎事期後音候、恐々謹言、

七月十日

匡久(花押97)

『元本上書』
山田安藝守殿

御返報

匡久

『限江』
『限江』
『并書』
『朱引』
『如ク』
『久』

『安 守殿』

『コレモ封シ紙之巻候下ニテ字キレ候』
(本文書ハ「舊記雜錄前編二」二二五八號文書ト同文ナリ)

『山田氏文書』

又はり鞍ニ成候する皮御所持候ハ、一枚可給候、不申共にて候へ共、冬毛望ニ候、萬事頼存候、衆中ニ所持候ハ、御所望候て可給候、

書狀之趣得其心候、仍初千代殿御下ニ被參候人衆、四ヶ所衆蒲生方・邊河殿・佐多殿此等にて候、顯桂方何方共不見得候、又北郷殿・北原方和融未成候、此節番城誘無油斷様にと、御意候、次三夜留之用意諸人ニ可被仰付候、依一左右御動あるへく候、萬期後音候、恐と謹言、

霜月廿一日

匡久(花押97)

『元本
御返報ト御宿所之
處ニアリ』 隈江

『上書』
山田安(舊)守殿御宿所 匡久

『此角ハ封シ紙之下トミヘ字キレ候』

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二二〇七〇號文書ト同文ナリ)

336

『全』

又番城誘堅被仰付候へと御意候、

來十五可有御動候、五日之可爲誘候、依今一左右可被打

出之由、御意候、御油斷有間敷候、又境目ニ敵見え候

哉、毎日人衆出、時義を見せられ候へと申せにて候、次

自清水音信候、當時無何事候、眞幸之様今日及者不聞得候、爲御心得候、恐と謹言、

三月十一日

歳信(花押98)

匡久(花押97)

隈江
中野

山田安藝守殿 御宿所 正久

『元本上書』
山田安藝守殿御宿所

元本上書
山田安藝守殿御宿所
コノ明キモ前ニ同シ

隈江 封ノ日ノ下ニ
裏如此有之候ト
見得候

中野
匡久 表ト見得候

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二二〇三三號文書ト同文ナリ)

337

『全』

又本田紀伊殿伯耆方へ爲禮被越候、被及聞召候哉、

爲御心得候、

其方之人衆少々清水之番ニ御たて候へと御意候、來月

三たるへく候、十日番ニ候、巨細之條重而可申候哉、毎

事期後音候、恐々謹言、
『元本候』此筋可然歟、
『本文々二字』

卯月廿八日

匡久(花押97)

『私封』

『元本上書』
山田安藝守殿

限江「此モ如前裏封ノ下ト見得候、」
匡久「同前」

『日付字分』
〔幕〕守殿
〔明〕御宿所

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」二〇二五號文書ト同文ナリ)

又今日中ニ^{『たるも』}たにも、山東よりの使僧、從志和知より

使僧、池袋殿よりの使僧、自都城之使者、更不得寸

隙候、御察之前候哉、其様御活計不及申候、御うら^{『アハツケイナレトモ、ケイノイラ略』}

シテ^{『シテ』}ハツケトイフベキ歟、タダスベシ^{『ミミミ』}

『活計』
世俗ニ云フクハツケナコトデヤ、クハツケシタナト、云言業ト考ヘ候

尾州清水ニ可有御立候、十日かハリにて候、今明日此方^{『〇』}

へ御越有ヘき事候、遅こそ候へ、其かハリに其方之衆ハ^{『御うらやましく候コノ邊ニ有之候』}

可被立にて候、其覺悟肝要ニ候、姫木此方ニ現形候、下^{『〇』}

大隅邊も現形之由候、待居候、又北郷殿曾於郡ニ番衆御^{『元本ナシ』}

入候、如何ニこそ候へ、又我等長在京ニはやくたひれて^{『元本候』此筋可然歟、}

こそ候へそと御指出候て、世間之時義被聞召候て可然^{『そと』}

候、恐々謹言、
『〇』

五月四日

『匡久』
正久(花押97)

『元本』
『上書』
山田安藝守殿 御返報
『同前』

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」二〇二八號文書ト同文ナリ)

向々北郷殿心替候者、都城へ可被懸候、御油斷有間^{『元本取懸候』}

敷候、今明日之間ニ物之躰みえへく候、^{『元本ナシ』}
〔傳候〕

北郷殿以談合、曾於格保護可有ニ相定候之間、去廿日以^{『〇』}

兩手矢被射初候處ニ、本衆北郷殿人衆ニ城戸をひらき成^{『元本』}

合候、此方之番衆をハ子細候て、少被相待候へと被申候^{『〇』}

間、内々この人衆末吉寄候、萬一北郷殿心替候者、都城^{『〇』}

へ可懸指覺悟ニ候、爲御心得候、十二九八目出度可成行^{『〇』}

候哉、萬期後音候、恐々謹言、
『〇』

『此間三行ハカリ明ク』
五月廿三日

『匡』
正久(花押97)

『封アテテ名ノ間ニ行ハカリアリ』

『前同上書』
山田安藝守殿

御返報

くまへ前ニ同シ
正久
前同シ
『匡久』

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二〇三三號文書ト同文ナリ)

又一昨日末吉より罷歸、肝付へ罷越候、辛勞中く
無申事候、殿さま昨夕御歸候、爲御存知候、三俣雜
説火急ニ候間、豊州急度御參會あるへきにて候、面
白弓矢之鉢にてこそ候へ、

去九伊地知方・梶原方・池袋方以同心、垂水ニ被相動候、
『面自矢之鉢にてこそ候ヘコノ間ニアリ』
彼城幾程有間敷候、自然廻・敷禰邊之足輕つゝくへく候
哉、其武畧として境目邊ニ足輕御出候て可然之由、御
意候、御油斷あるましく候、恐々謹言、

六月十一日

『匡』
正久(花押)△

『日ノ字ノ通りニ封目アリ、アテテ名ノ場ニ裏隈江トアリ』
『』
隈江

山田安藝守殿
御宿所
正久

『元本上書』
『山田安藝守殿
御宿所』
『匡久』如此

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二〇三三號文書ト同文ナリ)

尙々堅可被仰付候、又桃山殿・三河殿被越候、あま
したる事にてこそ候へ、返々御ほんそうあるへく
候、

來十三廻へ可有御動候、然者殿四郎殿御出張候、十五以
前六十以後、出家も不殘被立候へと御意候、御油斷有
ましく候、恐々謹言、
『此條下ノ處江入ベシ』
『此上斷字如上』

『此明前同』
『匡久』

七月十日
正久(〇判アリ)

『此モ同明』

尚と蒲生衆・祁答院衆高名無是非候、又壹岐守方一

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」二二〇四號文書ト同文ナリ)

『元本』封目アテノ位ニアリ
上書
〇一此間八部ヘカリ明ク
山田安藝守殿
御宿所
正久 同前
『匡久』

『上書』
山田安藝守殿
御宿所

くまへ『名乗字一才
五部ハカリも
奥にかく此モ
上書ノウラノ
封メノ下成ベ
シ、封メナク
候ヘトモ前同
カルヘン』
『元本』
『匡久』正久
『真下ニ
有乙』

八月廿八日

『匡』『匡久』
正久〇判

くまへ『同前』
正久『同前』
『匡久』
御宿所
山田安藝守殿
『元本上書』此間一六部ヘカリセアク

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」二二〇三號文書ト同文ナリ)

尚と三日より御動有へく候、又去廿三夜相州伊作城
へ被切乘、究竟之人多と被打取候、南郷も知行候、
爲御心得候、

來月三日至廻・數禰、打つゝき三日御動あるへく候、其方
之人數奔走候へと御意候、御油斷有間數候、恐と謹言、

七月卅日
正久〇判アリ

昨日從眞幸被歸候、北原殿弥急と被申候、又自豐州
も急と被仰候、今明之間遠州爲使者可有御越候、伊
地知方ハ明日可被參候、本田方いまた逗留候、又於
内城護摩にて候、又山口神前にてハ眞讀般若にて
候、萬辛勞仕候之處、霜女鹿にて活計のミ候、御浦
山數候く

御家景中神水被仰付候、案文進之候、今(日)中可然候ハ
ん、但御遠慮ニ不可過候、又 御屋形衆蒲生へ三千程被
寄候處ニ、祁答院續候て、合戦二度候而、御屋形衆廿
人之上越度候、手負切捨なとハ不知數候之由、自清水注
進候、目出度こそ候へ、恐と謹言、

如仰至廻被得勝利候、日出度候、此節一段御用心肝要ニ候、將又俄ニ山東へ之義被仰出候、迷惑御察之前候哉、就中御鷹鷹取候、旁以被得勝利候、日出度候、御同前候哉、毎事期後音候、恐々謹言、

『本行々一字下ル』
『〇〇』九月七日

正久(花押)

『元本』

封目此間名アテノ還リハカリノ處ニカク

限江

『〇』山田安藝守殿

御返報

正久

『日付字分』

名アテハ封目々七八部之間アルベシ』『匡久』

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」二〇六二號文書ト同文ナリ)

「山田氏文書」

津野殿脚力のほりの時、二月三日狀同三月十一日到来、委細ニ承候了、自何^{⑧方}〔事〕も國いまたせいひつせす候へハ、歎入候、是も當時ハ御さたハしまらす候、ハしまり候ハ、一端申候て、罷下へく候、御身のすきはの事、さく^{⑨こ}そ候らんと察存候て、御いたわしく候、孫二郎殿もかいく

しくをいたゝれて候らん事、悦入候、とくく下向候て、かたくも見たてまつり候ハやとねんせられてこそ候へ、今めかしき事にてハ候へとも、したしき^{⑩中の}〔御事〕かたくもて御渡候へ、萬事憑申て候、さてハ山田入道殿よりこれに狀を給へく候、我申事のせふん、〔御かき〕^{⑪つかせ}給へんよしうけ給にこそ無勿駄候へ、兎もかくも入道殿仰られ候はん事を、そむかれ候はん事ハあさましき事にて候へく候、此後ハ其旨を御存知あるへく候、又ひはの事承候、取てをかせ給へく候、何物ニ^{⑫で}〔而〕も候へ、入候ハん物ハ京とへ注進までも候ましとて、をかるへく候、又馬代用途の請取の事うけ給候了、大方殿も御狀もまい^{⑬(脱カ)}せす候、此山臥文^{⑭(かすは敷く多分の事歟)}かすをいたみ候之間、申入す候、このよしを御申あるへく候、其上たふせのかくりきくたりの時、まいらせて、此脚力いく程なく候間、申入す候由、御心へ候て御申入へく候、若黨共中へも、この由物かたりあるへく候、又宗四郎かたへさやまきの刀くたし候、其様を仰らるへく候、恐々謹言、

三月十八日

(伊作宗久)
たうゑ(花押154)

山田三郎殿

(本文書ハ「舊記雜錄前編」一九二二號文書ト同文ナリ)

「山田氏文書」

山臥便宜之狀委細承了、

一國いまして城の一をも不被落候由承候へハ、^{「元本ハ由之字ナリ、承モ片方無之候、其時分ハ消候と見得候」}一二二年ニ

候、これも下候ハんとて暇申て候へハ、執事方より思^{「まノ字落殿、本}もより候ハんと候間、今すこしも候て重いと申候て罷^{「マ、」}下へく候、

一和田城こしらへられ候しうけ給候、相構くひきたれ候て、こしらへらるへく候、領内にしやう一所候^{「こ」}ハてハかなうましく候、若黨共の中へハ莫禰二郎下之時、ふみくたして候間、不下候、

一何事も入道殿に申合られ候て、よきやうに計へく候、^{「い」}一那良西阿城せめられけに候、此いくさ無何ひさしくあらうするけに候へハ、歎入候、其外京都無殊事候、

一必々七八月比ハ可下候、早々城こしらへ候てをかるへ

く候、委細難盡狀候、恐々謹言、

壬四月四日

道惠(花押155)

山田諸三郎殿

^{「元本上書トアリ」}山田諸三郎殿^{「此封字元本ニアリ」}

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二二一〇號文書ト同文ナリ)

「眞本知覽第手鑑」

三日者不申通候、何たる出合共無御座候哉、承度候、なにそ身のとく覺不申處、山陰の栖迷惑と存候て、一首送り申候、

なをき世に罪も無き身のいかなれハ

かく山陰のすまいするらん

さゆるよのゆめにうたこふ心かな

いつかくれ家の内に來ぬると

一笑にやかて火中へ

【年紀無考】

十月廿三日

【利昌】

兒玉筑州様

【寛永十六五月嗽】

東郷肥前守
重位

【伊東氏家藏】

覺

一乍恐言上仕候、拙者事卅餘ヶ年前仁禮右近殿ヲ奉頼、御老中様迄御訴訟申上候、醫道稽古仕度候間、御暇可被下之由訴訟申上候、御暇被下候、并從 家久公様御使兒玉筑後殿ヲ以、御懇志之蒙 御上意、難有忝奉存候事、

【外ヶ條略之】

右之通認置候へ共事永候故、指上ケ不申候、此度御下向之砌、桂八左衛門殿・伊東次郎右衛門殿頼入訴狀差上候へハ、高崎惣右衛門殿・仁太郎兵衛殿被仰渡候者、御國元御老中様於御納得者、於江戸表御披露可被成候由、被仰聞候間、於御國元早速御披露被成可被下奉頼

候、

【年紀無考】

七月三日

【兼延】

上井采女殿

【信行】

二階堂城之助殿

【伊東九左衛門家藏】

伊東新兵様

參人々御中

兒玉筑後守
利昌

此中御氣相之様ニ承及候、何分ニ御入候哉、涯分御養生尤ニ候、次者貴老ひちりき御稽古可被成と候へハ、ひちりき無之由被聞召及候ニ付、長吉兵右衛門殿ひちりきを爲稽古、一節御借被給候間、涯分御稽古被成候て、尤ニ存候、是ひちりきハ、兵右衛門殿家に傳たるひちりきニ有之由御座候間、御手前ニ御もとめ被成候時ハ、御返し上被成候て可目出候、先ニ御意ニ而被召下候條、一段御外聞と申、此上あるましく候、能ニ御稽古此時ニ候、恐惶謹言、

『年紀無考』
六月十七日

利〔花押10〕

350

『諏訪氏藏』

「雖未申通候染筆候、抑今度京都依不慮之錯亂諸事無外方故、匠作へ以使札申候、可然候様取成頼入候、仍五明三本遣之候、猶進藤筑後守可申候也、かしく、

十一月廿六日

〔近衛尚通公〕
「御判」

上井伊勢守殿

351

『諏訪氏家藏』

敬白起請文前書之事

一度々以誓紙雖申上候、龍伯様 惟新様 少將様御事

御同前ニ奉存、無別心御奉公可仕候事、

一少將様御前之儀、不存疎略御奉公可仕候、他人之儀者

不及申、親子兄弟之間たりとも、奉對 少將様於疎意

之人、同心仕間敷事、

一若輩故不屈儀迄御座候間、不置指被加御折檻可被召仕

352

『諏訪氏藏』

事所希候、勿論可被仰聞儀を毛頭も不可奉背候事、一代々被成御嫌儀候と、傍輩中別而致入魂、連判等之類有之間敷候事、

一於身上若御不審之儀有之者、御糺明所仰候事、

右條々僞於申上者、

「右、諏訪治部少輔經兼代爲差上起請文ニ而も可有之、年間無之」

「先度者早々預御使者候、御懇之儀共候、此比内々可有

御越様承候間、待存候處、被入御隙旨不及是非候、從

御家門様被成御書、五明十本被參候様躰、以面可申と

存候へ共、先只今相届申候與風可罷上候間、御請持可

給候、先年者別而申承候キ、御床敷存候處、今度不懸

御目御殘多迄候、仍關之小刀五ッ進之候、誠御音信計

候、恐々謹言、

二月廿九日

いせ因幡守 ●〔花押〕
貞知〔判〕

上井伊勢守殿

御宿所

『諏訪氏藏』

「、」到其界御着陳、尤千勝萬勢候、殊ニ一國不相殘屬御手裏候之由候、案中ニ覺候、弥御吉事可申承候、拙子事當月初到西目令渡海、彼表所ニ案利仕成候、殊大村丹後入道改先非、直子長崎迄差出懇望候之條、先ニ令承引候、重々伊左早^藤津境一行之儀雖差寄度存候、萬端爲可得御指南歸宿候、今度御人數少ニ被差渡候ハ^者、當國御靜謐曾而不可回時日候、忤進退弥向後 貴家一篇可奉賴之外無他候之^間條、倍可被添御心事、深々所仰候、餘者用口上候之條、先々令省略候、可得御意候、恐々謹言、

九月廿八日

有馬修理太夫^{晴信}
鎮實^{花押}^判

伊集院右衛門太夫殿

上井伊勢守殿

平田美濃守殿

嶋津圖書頭殿^參
御陳所

『諏訪氏家藏』

覺

其後者御無音非本意候、仍日州にての御使歸候哉、前田方徒ニ歸候、就夫條々令申候事、一安國寺より之御一通ニ、任則時ニ爲御一禮、雖用使節候、追後候て無返候間、後便相求被仰上候てハ如何之事、一右之儀忠棟於御納得^者、禮物等平田豐・鎌源・秘書様、御役人別而御賴被成、京境之間にて金銀之間相應之御借用有調達候事、一上様御安堵被成候ハ、其内之懇望者爰元にて不事果候上^者、若々京都迄^{不知}中、不入事にも候する哉、如何之事、

一京都へ被仰上候ハ、日州へ居留之衆、就中從薩州之

移衆諸所ニ居留之衆、種々京衆ニ入魂ニて、御當家之煩ニ被成候事、并飯肥殿曾井ニ在宿衆、同前之衆大略憑候之間、多人衆にて候哉、後日御當ニ成間敷由、出精被出登候て、御分別可參候哉之事、とかく從貴殿之御書面、御同前ニ候て社、可致首尾事、

一福地殿安國寺之兩札にて、日州へ當時堪忍候、福田殿へ被仰理、京都之一到來迄ハ事延候する間、福田殿前より分別候へかしと候てはいかの事、其故ハ兩書眼前無偽候間、如此申由有度事、

一右之條々於御納得者、出船御望にて候之間、早々然々の御使にて爰元へ可被仰越候事、

一日州直説ニ付、弥彼口又一郎殿様御存知之内、急ニ御堅め可有之由肝要に候事、

九月廿六日

「右上井伊勢守書留之由也」

『諏訪氏藏』

「豊薩無事之儀度と申越候キ、不可有吳儀趣尤候、早々可申下處ニ、去春以來大坂之儀令馳走、手前取紛延引候、然者爲信長公可差下伊勢因幡守由被申出候、於様跡者以一書申候、存分共雖可在之、此砌同心候様ニ取成專一候、將又大鷹被差上可然候、我等も其内所望候、次扇十本遣之候、猶貞知可申候也、

九月十三日

『近衛前久公』
〔御判〕

上井伊勢守殿

▽●

上井伊勢守殿

〔花押〕

△

『入来院氏文書』

去月廿八日注進狀今月五日到來候了、抑薩州凶徒等參御方候之條、目出度覺候、〔次〕^{△御}所望御教書一通進候、疲勞御事奉察候哉、仍執達如件、

〔建武癸卯ノ間〕

九月五日

『畠山修理太夫義顯』源〔花押212〕『修理亮直顯ノ事カ』

『入来院氏文書』

おもひのほかになつちうをたて候て、かくしよきを人わ
らハしくなさせ給候^御事、むねんにおほえて候、返とも
むねんに候、とら五郎かは^御「ら」をそむけん、うちの物ハ
をんたすけ給候へく候、たゝわれと御いて候てかくしよ
きを、ひらにたのミ申候て、みかたつちうおとりたて候
て、身かこせをとふらハせ候て給候へく候、もしこれを
そむかん人をハ、すハも御しようらん候へ、七月のうち
にはつをあたへ候へく候、とら五郎かことを大事とおほ
しめされ候て、うちの物を御いたし候て、七月よりうち
に、しよりやうを、御すハたつちうに御きしんあるへく
候、又うちの物に^御「とちすを」給候て、なに事もおほせ候
ハん事、むねんにおほえ候、ことにく七月のうち、す
ハにしよりやうをきしんあるへく候、によしやうのみに
て候とも、なにとてかやうにきハわたらせ給候やらん、

むねんこの事に候、又みかつミハ一日きやう「と」さん^御と

かゝせ給候て、うかふ候へく候、尙とすハたつちうに、

七月のうちに、しよりやうをきしんあるへく候、

(入来院重門)
しけかと(花押51)

「重門弟」

美濃五郎左衛門尉重繼

『入来院氏文書』

▽^御

△

御音信殊爲祝候、抑一揆事、去年其子細申候き、今又如
此承候間、案文一通進之候、此事如何様後日ニ相替事候
者、爲自他不可然候間、得其意以此文章計申候也、恐々
謹言、

六月五日

了俊(花押49)

澁谷美濃守殿

御返報

澁谷美乃守殿

了俊

『入来院氏文書』

自旅所申候間、狀躰比與候く、

河邊庄事、谷山・鯨嶋等不用候云々、雖其意候、此間、

自是重而申遣旨候き、定可遵行候哉、守護人重發向事不

可然候、折節京都御教書成下候時分、八代發向は無其沙

汰候て、猶以私合戰張行候事、如何候へく候哉、於今者、

守護人事ハ中く申かたく候、國の人と又御一族達御事

ハ相構く公方の御用ニ御立候へく候、今度ハ京都へ御

沙汰したくなるへく候哉、躰ニしたかひて、我々上洛

候て申事も候へく候、御心えのためニ申候、恐々謹言、

八月十二日

【今川了俊】
了俊(花押49)

澁谷厩五郎殿

『入来院氏文書』

澁谷五郎申候本領安堵事、注進并齋藤美乃入道方への狀

まいらせ候、不可有子細候、此人との事ハ別而御感候へ

と、先立ハや京都ニ迄申入候了、又今月來月間ニ嶋津

『入来院氏文書』

名和殿
御返事

了俊

③の「か」やうくよりて、その事勢をつかハし候へく候、連

と御方人ニ御談合候て可承候、恐々謹言、

八月十日

【今川了俊】
了俊(花押49)

名和殿
御返事

△
▽
△

新春吉事自他最前申籠候了、尙以不可有盡期候、抑兩國

事於今者、嶋津兩人爲御方(候)由、京都ニ申候間、其實

きこしめし定られ候(て)、ために、僧を被下候歟、此時

嶋津兩人ニ同心候輩、相共ニ八代ニ發向候て一戰仕候ハ

、まことに可爲御方候間、可有御免候、若猶た御方

と申て候ハかりにて、如此間於國の所行不儀ニ候ハ、

この御返事ニ付て退罰せらるへきよし仰下され候間、返

と目出候、此左右のほとハ名和か事それに候へきよし申

遣候也、嶋津か内心を存^へ候^るニ、よもこのたひも八代ニ

「本ノマ、」

罷向事ハあらしと存候、然者退罰御教書ハ必可成下候

間、其程ハ相構く御方之人と御同心ニ、國をかたく御

ふまへ候て、大將をも御合力候へく候、今度了俊ニ下さ

れて候京都の御事書・御教書の案文、名和か方ニ遣候、

御らん候て御心え候へく候、兼又了俊事條と、仰合よる

へき事候とて、俄ニめされ候間、且ハ當陳をもよくく

したゝめをき、且ハ兩嶋津か進退をも見定候て可罷上

候、其間は細ニ可申承候、可有御同心候、了俊事委細

安國寺ニ申て候、御尋候へく候、就是非上洛仕候とも、

九州の御方深重の御かたくの御代官を申へく候間、定

御悦喜候ぬと存候、了俊九州ニ在國候よりも、中々京都

ニ參候ハ、鎮西やかて退治のめといニ成候ぬとおほえ

候、就中身か事ハ京都ニ一二ヶ月ニハ過ましく候、やか

て可歸陳候間、ことにくめんくの御ためも可御心安

候、よくく名和御談合候て、連々可承候、恐々謹言、

正月六日

了俊(花押49)

清敷殿

【包紙】

澁谷清敷殿

御返事

了俊

362

『入来院氏文書』

△

面々御參陳事治定候間、待申候處、于今遅々無心元存候、

一氏久事、父子共ニ不參候、如何様尙野心相殘候歟之間、

重左右を相尋候、面々御事者、自最初伊久御一揆之由

承候、伊久如此在陳候上ハ、就公私不日御參陳可然候、

たゞし氏久參否實承候て不參候ハ、やかて可對治

候、其時ハさいわいニ御在國候間、まつ大將兵部太輔

一所ニ御馳寄候て、氏久ニたいして一御合戰候ハ、

弥日ころの御ちうの分もあらはるへく候、若又氏久父

子間ニ參候ハ、とても國にてハ何事候ましく候間、

片時もこれへとく御參候へく候、そのやうニより候

て申候へと、大將方ニ申遣て、面ニ御談合候へく候、

又御一家中の御相論地の事なとハまつさしをかれ候て、これへ兩方御申候はんニ、任文書可致沙汰候、尙と氏久遲々候はんニ付て者、兵部大輔一所ニ、一日もとく御馳加候へく候、治定氏久參候へきならハ、又片時もまつこれへ御參陳可然候、たゞいたつらニ面との御在所へ御在郷候てハ、諸事ニ付候て、い前御〔中〕のかとあるましく候間、御心へのためニ惣の御中に此狀を進候、御所にて御披見あるへく候、若又御寄合煩たるへく候ハ、此以案文めいへく申候へと、兵部大輔ニ申付て候、定可申候哉、恐々謹言、

五月十五日

了俊〔花押49〕

澁谷人ニ御中

『入来院氏文書』

▽②

△

平原禪門御參事目出候へく、設樂注進時可遣狀候、

目出候、

此御一揆事ハ中へ兩嶋津等ふるまひもよく成候ぬと存候間、かたへ付て可然候、此事ハ京都ニも申入へく候間、ハ、かり存ましく候、仍大隅・薩人との中ニも、此よしを狀を一通つかハし候、面ニ御ちかつきの方ニ仰候てしかるへく候、兩國の人との力をかり候て、今までも守護人不儀候つる間、無勿躰候、守護人不儀候ハすハ、又おのつからめんへの御事も可爲御本望候歟間、如此申にて候、御心え候へく候、一天草郡人ニ一揆事ハ、今ハ無益存候、とても伊與守同道にて候間、中へ他國の人ニ仰候はん事無益候、これハ可御心安候、恐々謹言、

六月五日

了俊〔花押49〕

澁谷人ニ御中

和泉人ニ御中

【包紙】

しふや御かたへ御中

いつミの人と御中

面と御中

了俊

364

『全』

被參御幡下之由奉候、殊日出候、輒於薩州守護人違亂事、
度々加成敗候早、爲天下候間、定可被閣私之儀候歟、其
子細自筆狀一通、進面と御中候、此上者念と可被成大功
候、一向憑入候、恐と謹言、

〔六〕月十日

了俊〔花押49〕

澁谷庸五郎殿

〔包紙〕

澁谷庸五郎殿

了俊

『此文書亂書讀へからず本のまゝ』

365

『入来院氏文書』

自最前大將事御合力、申つくしかたく存候、今ハ前頼等

ニすてられ候て、失面目候ニ、尙以御同道候事、しかし

なから將軍家の御忠御志專一候間、難申盡存候、前頼か
事ハ無是非、嶋津進退いふかしく候ほとニ、くハしく申
遣候、たとひ凶徒ニ加候とも、今度ハ御一族たち一同ニ
我々ニ御合力候間、何の子細あらしと存候、面々の御合
力候ハてハ、伊久何ほと事候ましく候ニ付ても、弥た
のミ申て候、始中終御らんしつかれ候やうニ、御一家ニ
も御申候へ〔と〕、たのミ入候、恐と謹言、

正月廿八日

了俊〔花押49〕

澁谷清敷殿

〔包紙〕

澁谷清敷殿

了俊

366

〔本文書ハ二二九號文書ト同文ニツキ省略ス〕

367

返々御油斷有ましく候、今日質人參〔上候〕、明日ハ
拙子可罷歸候、五日中ニ引陣たるへく候、乍去弓箭

者時之内ニ替儀可有之物にて候間、御遠慮肝要候、

今日〔迄〕^{◎通}ハ十八日ニ皆同引とられへき御談合と申

候、これハミヤこ出之日限にて候、次御朱印此方へ

被遣候哉、殊外不足由候、子細者おそく被遣候と被

仰候、彈正殿使昨日こゝもと打立候之間、不入儀と

被仰候、惣別此比者御國之暖ニ付、治少様御機嫌さ

んくにて候間、三兵も種々きけんあしく候、よく

く國本之儀あらためなされ候ハすハ、治少様申次

之事ハ成ましきよし、節々三兵被仰候、餘者歸宅申

候之刻可申入候、已上、

〔安宅三郎兵衛〕
安三兵より飛却之由承候間、則申付遣候、次者陣引之事

五日之内たるへく候、拙子も罷歸度候へ共、今日唐之質

人參候而、其由細々承候て罷歸候へと被仰聞候之條、不

及力罷居候、先手之人衆ハ昨日より川向之様ニ引せられ

候、小早川殿衆・さいしやう殿人衆にて候、柳川殿陣所

へミちより右之方へ陣取候、返々其元御油斷有ましく

候、五日之内ニ人衆者引有へく候、武庫様・久保様へも

御申有へく候、小谷又右殿よりむまのはなかハ持せられ

候、本田源右殿へ御とゞけ頼入候、又ゑひら御用ニ不立

候、持せ申候、御上頼存候、人衆引のつもりハ、伊東殿

跡嶋津殿、其跡小兵衛^{◎尉}殿と聞得候、次第くニ城續之

引様と申散候、然々不承候、各々へさし物事、馬乗程之

人衆、又ハ鐵放衆・道具之衆へ可被仰〔付〕候、惣別〔者〕

其分にて候、爲御存候、恐惶謹言、

〔文様〕

卯月十五日

〔伊勢貞寛〕

任世貴老

人々御中

〔伊勢〕

大炊左衛門尉

貞豐〔花押40〕

〔本文書へ〕舊記雜錄後編二二〇九六號文書ト同文ナリ

368

『入來院氏臣岡元氏文書』

〔金郷〕

美作國河地頭澁谷五郎四郎重村^{〔佐朝〕}原八郎事、令參

洛候、以此旨可有洩御披露候、恐惶謹言、

〔正應三年〕

四月廿一日

平重村

進上 御奉行所

承候了(盛房)(朱カキ)
(花押215)(花押)

369 『入來家臣入來院直記藏』

以上

於京泊、石州御物語ニ社承候、其許へ諸篇被成辛勞候由、
目出度候、殊ニ御留守中之儀、別而可爲御念遣候、如何
様御下向之程有ましく承候間、弥々可安御心候、萬期面
談之時候條、先不能詳候、恐々謹言、

林鐘十九日

(島津)
下總守

常久(花押140)

入來院三左衛門尉殿

御宿所

370 『入來家臣入來院直記藏』

今度從江戸被仰下候、赤子をころし申候儀、至自今以後
御法度之由被仰出候、領分侍并百姓以下迄、堅可令停止
候、隨而上使一兩日中ニ御着被成候、其元家中衆・其所
中諸在、内衆可被見廻候之間、左様成衆ニ參合、少も聊

尔成振舞ニ不見様ニ相遠くかゝり存候、緩怠無之様ニ可
申付由、從江戸被仰下候、御分國何も其通ニ候、御家中
歴々并百姓以下、男女わらへによらず、能々可被申付
候、巨細口上ニ可申達候、恐々謹言、

五月廿七日

澁谷石見守

重高(花押53)

入來院尾張守殿

東郷吉兵衛殿

御宿所

371 『入來家臣入來院直記藏』

猶々又八郎きやうたい所よりも、平瀬殿たのミ入よ
し申せと候、

態用一行候、其以後者、其堺之時宜不承候、今程へてき
みかたはたらき共如何様ニ候哉、承度候、仍内手より又
八郎きやうたいニふりうをあたり候、たいかひ事成候へ
共、此方ニふゑふきなく候、平瀬越中方やとい申度候、
にわかの事ニ候へ共、明日越候へ、二三日之逗留にて

372

『入來家臣入來院直記家藏』

入來院 尾張守殿
進之候 重朝

入來院石見守

態令啓上候、仍就本名字之義祁答院幡磨守殿賴存候而、
一ヶ條令申候、御懇切之御意之通、從幡州一書給候、如
其賴□被聞候而、遂本意申候、誠御意以源さ衛門尉人ニ
罷成候、外聞實儀、老躰之満足此上ニ不過候、此等之御

候する、しきりニ申度候間、よくもなき馬を進し候、よ
きやうに御いけんたのミ申候、又其方之ふもの用心、
今時分かと存候ほとに、内手ニいけん申候へ共、兩人共
ニせうゐるもなく候、あまり之事に、此方も堺目にて候へ
共、足かる二三、明日越申候、此かへりハ内手より本
走候へと（うなかし候へく候、付申て候へ）かしく、
閏七月十六日
（入來院）
重朝（花押56）

373

『入來院氏家臣入來院直記家藏』

進上 入來院尾州
人々御中 重次

同名出雲入道

尚々申入候、繼圖御書寫被下候、末代之重寶申ニ不
及候、於已後も御用段之時へ、相互ニ御披見あるへ

追而、餘々雖輕微ニ候、中紙二束・大うほ二かけ進
上候、誠御祝義計候、重而恐惶、

進上 入來院尾州
人々御中
極月二日 重次

禮早々可申入候處、于今延引申候、惣而者幡州より（承）
候ハ、其御方江請御意、披露可申候處、依遠方御無沙
汰罷過候、餘々御無沙汰之條、爲御禮人を上候、如何様
源左衛門尉以參上、此等之躰可申入候間、令省畧候、恐
惶謹言、

く候、

不寄存候之處ニ、御懇切之預御書狀候、誠ニ畏入存候、如蒙仰候、先年者和泉へ御越、與風御立寄候、就者懸御目以面端萬御物語共申承候事、于今満足千萬候、仍繼圖之事、書寫被下候、多年本望大慶無申計候、雖遠方候、從今已後者少も御隔心之儀有間敷候、巨細順觀坊御物語可有候之條、先々令省略候、恐惶謹言、

卯月十三日

重次(花押54)

下村左衛門尉殿

御返報

374

『入來家臣入來院直記藏』

御船作ニ付、大口・高尾野兩所江留守中ニ於其許可被談合旨雖申達候、兎角我等歸宅之砌、具可申定候間、木床更又軍役之人數も、いかやうニ可被出之通、可申渡候、自然前稜ニはや内談候共不苦候、何共年内者無餘日候間、成間敷候間、靜ニ重而可申越候、恐々謹言、

375

『入來家臣入來院直記藏』

霜月十八日

澁谷石見守

重高(花押)

入來院三左衛門尉殿

以萩市左衛門被仰越旨、得其意存候、今度五郎兵衛方へ役儀申付候處ニ、佗言^{〇候}之由候、其旨者伯州代より役儀仕候處ニ、首尾惡敷遠流仕候、右之式候間、可指置之由候へ共、又々可被仰渡候、申分者尤之儀候、併當分家中之者共若キ衆迄ニ候、役儀可申付人無之候、一節成共相勤候者可爲仕合候、其上前之五郎兵衛遠流仕候儀、公儀事とハ乍申、名字之者之儀候處ニ遠流仕らせ候事、殘多儀存候へ共、無是非御事共ニ而右之式候、二度役儀申付、首尾能重而さし置度存候、乍大儀役儀仕候様ニ可被仰渡候、委細市左衛門可申達候、恐惶謹言、

九月十日

入來院石見

重頼(花押57)

大井十右衛門殿

まいる

『入來家臣東郷善兵衛藏』

いつミにて公方むきに御つかひ候用途

合 十七貫五百文

一貫五百三十文 自是御酒、御さかなも進候、

御用途十九貫三十文

村々田別請取申次第

合 御内分七貫十八文

惣村分十一貫六百三十二文

東郷分十町一貫六百七十二文

車内分八町一貫三百三十六文

田海分八町一貫三百三十六文

鳥丸分六町一貫文

南瀬分六町一貫文

斧淵分二十四町四貫文 内一貫文ハ、請取申候、

炭浦分七町三段一貫二百三十四文

穴野六町一貫文

藤河分六町一貫文

山田分六町一貫文

白男川六町一貫文

二渡六町一貫文

白濱五町二段八百六十四文内七百請取

周野分三町二段五百三十四文内二百請取

中嶋分四町二段六百七十四文

以上十八貫六百五十文

此内三貫五百ミしん

十一月十日

『入來家臣宮里氏文書』

志岐小左衛門尉殿御身上之儀、兵部少輔殿以御取成、從薩州様・式部様御扶持方御給可被成由相濟候、定急度可被仰下候間、可相濟候、御在所^{の者}先々今之様ニ、我等知行所へ御堪忍候ハ、可然之由、兵部少輔殿御内證ニて候、其通志岐殿へも委可被申候、御扶持共出候へん間者、其元御見次可有入魂候、猶急度壹人可差下候間、可申越候、恐々謹言、

『入來武光氏系圖』

惣領日妙知行分内四分二町五段

武光五郎三郎入道主禪

馬場入道日性

南入道忍性

河縁入道日傳

右衛門入道本忍

吉枝名庶子等分領事

拾九丁内

吉枝名取帳

『入來臣武光氏藏』

五月五日

入來院石見守

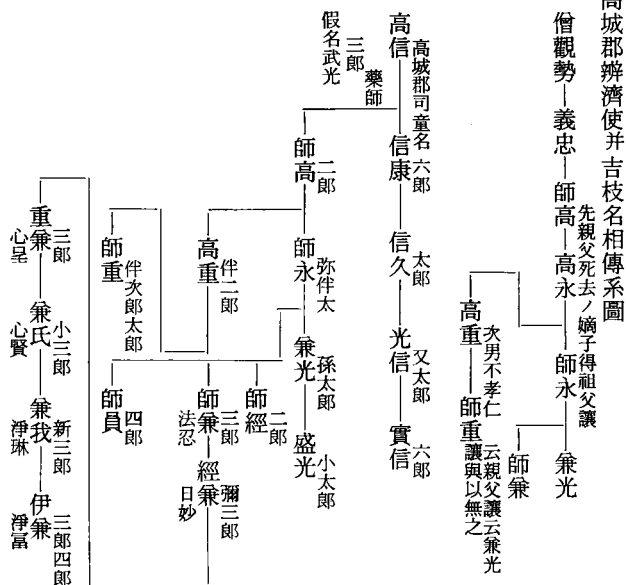
重高(花押53)

宮里治部左衛門尉殿

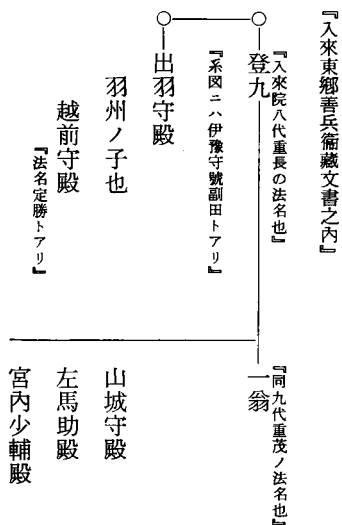
まいる

『入來東郷氏家藏文書』

猶と、或方へ持せ申候一種之事、其後もたより共候
するニ、惡き由承候、於其儀者、先と差置可有候、



381



乍去、我等爲ニ罷成候様ニ調法候て可賜候、下總守・
 本田も此等之段涯分心得有へく候、以上、
 舟參候刻者一札送預候、御^①遣之儀令満足候、仍爰許歸
 朝之事も無早晚候間、永々の旅^②との申事候て、殊ニ猪
 狸、又其後きのこまひたけ送被遣候、御懇之儀忘まし
 候、下總守・奎七郎殿へも無何事候由、千喜萬悅目出存
 候、萬歸國之砌可申承候、恐々謹言、
 霜月十五日
 重時^{（花押55）}
 又六
 東助左衛門殿
 参

382

『全』
 つゞミ衆うき面五反
 宮里ノ内
 西の蘭門 一町一反
 しかくな所領あき相候する間、かくこ候へ、

東郷兵部少輔
 進候入來院石見守
^{（重時）}

383

今度就渡唐船之儀、御忠節次第、從三號船居座并池水新
 左衛門尉方注進候、則令達 上聞候處、神妙旨一段可有
 御感之由候、先以御面目之至、千秋萬歲目出候、委曲猶
 潮口孫右衛門尉可申候、恐々謹言、

十二月十五日
 貞陸^{（伊勢）}
^{（花押42）}

嶋津豊後守殿
 進之候

年間不詳

附 錄 舊 記 雜 錄 卷五

384

「略之」

一御茶入二ツ御進上候、見事ニ候、其内なすびの御茶入取分見事ニ候間、先ニ御前ニ被召置候、奇特成御道具御持被成候と申事候、今一ツ之丸壺者、自然所望之方茂御座候ハ、可承合よし内膳被申候間、大事成御道具之儀ニ候得共、先ニ預置申候、何共御爲能様ニ任候

而見可申候事、

一御屋敷之儀茂内膳口上ニ可被申達候事、

一我等孫之儀、又三郎様江御縁組之儀被仰出候、雖斟酌千萬ニ御座候、不被聞召分候之故、不及是非御祝言共申上候、先以目出度候、尙期後音入候、恐惶謹言、

二月二日

伊勢兵部少輔 貞昌

種子嶋武藏守様

385

一御茶入之御禮爲彼是、種子嶋^④〔^⑤〕御座候御藏入不殘御給候、〔辱^⑥〕之由候而西村越前方進上被成候趣、具致披

露候、一段御機嫌能候〔而^⑦〕可御心易候、於様子者越前方可被申達候間、不能詳候、恐〔惶^⑧〕謹言、

九月廿七日

伊勢兵部少輔 貞昌判

下野守

久元判

種子嶋左近〔太^⑨〕夫殿 御報

(本文書ハ「舊記雜錄後編五」五六九號文書ト同文ナリ)

386

(本文書ハ二九六號文書ト同文ニツキ省略ス)

387

尚と加治木寄之知行於有之者、幸之儀と被思召候、
旁可被御精出事、所仰候、以上、

一別儀ニ不被思召候、雖然當分御隱家之式候得共、御知行等無之儘、御存分ニ不罷成候、自然御方ニ知給之御取噉共御座候ハ、少シ御手付茂被成候様ニ有度思召候、乍去其許之様子を難計思召候、過分之儀ニ而在之間敷候條、何卒爲貴老可然様調達可在之由可申旨、巨細源左衛門可申候、恐惶謹言、

十一月廿八日

本田源右衛門
(親老)

伊勢兵部少輔殿

人々御中

一御書中得其意候、仍上使御下向ニ付、石原江御晝休之家作爲被仰付之由候、いかにも輕ク如御柴たるへく候間、其心得を以御振廻所者、古之家歟さしかけなとの類ニ而も可然候半由候、御供御振廻所者、是も片ひら

屋ニ而も五所六所ニ而、輕キはたこ之類之御振舞たる

へく候、其故者、三四百人之儀候間、一所二所ニ而難成候、田舎之事候間、有躰之様子不苦候、振廻さへ被下候ハ、可爲肝要候由候、然者普請ニ付、從前方衆中大工を被仰付まし、加治木御使衆江御談合候而御調尤候、猶御用之儀共候ハ、追而可申承候、恐惶謹言、

二月十日

仁禮藏人

賴景在判

鎌田源左衛門

政有

山田民部少輔

有景在判

鎌田出雲守

政弘

本田藏人殿

御報

389

一態令啓上候、仍從駿河之御使一昨日下着候、駿府之御仕合早晚ニ茂勝、一段可然御座候之由承、千秋萬歲奉

存候、乍利口弥々御賢慮可入事ニ存候條、此等之趣伊兵少老迄用一書候、尤御方江令祇候雖可申上候、煩等得快氣平臥之躰候之間、貴老迄申入候、御仕合を以宜預御披露候、恐々謹言、

卯月七日

新納^(久徳)五郎右衛門入道
遊浦在印

本田伊豆守殿

御宿所

▽^⑧以上△

⑧(ナシ) 一書申入候、仍^⑧又八様御庖瘡一段御心易御座候、

一昨日迄ニ御庖^⑧うミ揃申候、昨朝^⑧(夕)次第ニやね^⑧く引

申躰候、三日中ニすへり可申由道三被仰候間、目出度

存候、別ニ替儀無御座候、此等之段爲可申上飛脚差下

申、細々申入度候得共、念使候故書中大方候、追而御

吉左右可申入候、恐惶謹言、

三月六日

町田圖書頭^⑧(花押)

久幸^(判)

比志嶋掃部助殿

上井次郎左衛門殿

本田源右衛門殿

人々御中

〔町田氏正統系譜〕ニヨレバ「加治木本田源右衛門藏」トアリ

一諸所衆中近年堪忍就難成、方々江被行散之由、地頭ニ無屈其所江不被罷居衆を、知行被召上、御内可被相離候、若又私ニ御内相離、誰人えも奉公なといたすニおひてハ重罪^⑧(候、)御噺可被仰付候、此旨を以諸所地頭并噺衆可被念入者也、仍御法度如件、

元和八年

六月廿四日

伊兵部少

貞昌判

比宮内少

國隆在判

三備中守

重種在判

町田圖書頭

久幸

喜攝津守

忠政在判

本源源右衛門尉殿

御宿所

(本文書へ「舊記雜錄後編四」一七三八號文書ト同文ナリ)

392

一一書申入候、仍於京都可被相調御用物注文、從御荷内衆被持せ候、澁谷四郎左衛門殿・上井東市正殿江被仰渡、相調御上洛可被奉待候、恐惶謹言、

卯月廿七日

比志嶋宮内少輔

國隆在判

喜入攝津守

忠政在判

本源源右衛門殿

御宿所

393

〔尙〕^{④猶}と帆柱之儀、帖佐・蒲生町衆へ被仰付候處、三百人ニ而可曳木有之由候而、蒲生・吉田之衆中被相渡候間、談合候而可被相下事肝要候、

一此度被仰付候御船之帆柱、蒲生米丸之内牧神山^{⑤江}〔口〕被取置候、御急用之儀候間、來^{⑥ナシ}ル^⑦四日・五日之間蒲生・

吉田兩所之衆中追立ニ被仰付、帖佐^{⑧川}口迄可被相下

〔候〕^{⑨ナシ}、右木敷之儀者、^{⑩先日}本源源右衛門殿^{⑪江}書狀を以

申越候條、不及口能候、次者加治木之内御藏入小山田村辰之芋出來候^{⑫間}〔由〕、其元衆中念を入被見懸候様ニ可被仰渡候、恐^⑬惶^⑭謹言、

七月朔日

伊兵部少輔

貞昌^{⑮花押}〔在判〕

比宮内少輔

國隆

下野守

久元^{⑯花押}〔在判〕

比志嶋掃部助殿

本源源右衛門尉殿

御宿所

394

一態令啓上候、仍蒲生之御城米借用方ニ付、受狀之儀被仰聞候、惣別伊地知對馬守殿存ニ而候條、彼方可被仕候得共、三人之事者我等下知ニ而取成申故、未調、彼者江持せ進上申候、上納之折節者可得責意候、尤拙者持參可申候得共、當分加治木就御普請見廻申故不隙、

乍慮外飛札如此御座候、餘者貴面之折節可申述候、恐
惶謹言、

三月七日

本田源右衛門尉
親存在判

本田伊賀守殿

高崎民部少輔殿

新納小右衛門佐殿

參人々御中

尙と行司事茂參^{④上}可被申由候^{④得}共、于今不參候、
早と^{④被}致參上、算用奉行衆^{④江}合點候様^{④ニ}可被仰
付候、^{④日}〔以〕上、

一今度御算用ニ付、蒲生御城米究^{④之}帳、早と可被差出
^{④之}〔候〕由、算用奉行衆^{④より}〔之〕度と爲被申理候由候處ニ、
^{④于今}〔今ニ〕延引不可然候、御算用^{④ハ}〔茂〕今月中ニ相濟事^{④ナシ}〔ニ〕
候、急度帳被差出候様ニ可被仰渡候、聊延引有間敷候、
恐^④〔惶〕謹言、

卯月十八日

三原備中守^④
重種^④〔在判〕
〔花押〕

一急度申候、去々年たはこ出錢、于今納懸有之由、請取
衆被申候、何分之儀ニ而延引候哉、曲事深重ニ候、則
相揃三日中此元藏衆江相渡候様可被仰付候、抑緩有間
敷候、恐惶謹言、

西二月十六日

本田藏人殿

御宿所

川左近將監
久國在判
喜攝津守
忠政在判

本田源右衛門殿

御宿所

下野守^④

久元^④〔花押〕

下野守
久元^④〔花押〕
〔在判〕

397 一谷山衆中有馬主馬〔之〕允、於吉田町人〔を〕買取候處相

走候、然者中人仕候者、自然彼賣人走候ハ、女房を

有馬殿〔江〕可相渡由、榎書物仕候間、去年七月〔已〕來

より申理候〔得〕共、不相濟〔候〕、〔從〕公儀於被仰者、

無餘儀段、可相濟之由、彼町之部當申由候間、一書如

斯候、委被聞召届、早々相濟候様〔ニ〕御入魂所仰候、

恐惶謹言、

四月廿九日

伊勢兵部少輔〔花押〕

貞昌〔在判〕

本田源右衛門殿

人々御中

398 一蒲生衆天辰二右衛門殿より、知行高九石餘瀬口主税助

殿永代ニ被買取候付、自貴老御狀被相付候條、則披露

候、於其許茂様子細々被聞召届、自前々無別儀子細ニ

而候ハ、無吳儀高ニ被相加候而可然之旨、其心得尤

候、恐惶謹言、

八月十二日

市來八左衛門尉

〔家書〕
良在判

〔本ノ、〕
此定不知

山田民部少輔

有榮在判

399 一尊札令拜見候、仍先度者偶雖御越候、乍早晚御無會尺

之至、無心元候由被申事候、然者茶酒□今燒之皿被送

遣候、満足之由直ニ被申入候條、不能詳候、將亦至我

等先度者種々被爲拜領、就中見事之御脇差被下候事、

誠ニ以辱次第、書中不得申候、餘者御使者へ申上候條、

令省略候、恐惶謹言、

三月六日

本田源右衛門

親商在判

寺澤志摩守様

尊報

400

以上

一書申候、然者甑之嶋之儀、隔海路一所としたる所ニ而

候條、此中も奉行かましき衆を不斷可被召置候處、御油

斷之様ニ成行候、方々より旅人共集所之由候間、主なし

にて候へ、連々如何様成私かましき儀も可有之候、就中御當代御法度之たいうすきりしたん宗なともかくれ居事も可有之候、又者ははん人なとも所よりも可出候、他所之者も可隠居候、左様成ニ付而、本田伊賀守可被召移之由御意候、右ニ如申隔海路、鹿兒嶋よりも程遠候間、大形之衆者結句私かましき儀共候て、如何敷可有之候條、彼地へ可被遣人、能々御撰候へてハと思召候處、幸伊賀守事地頭と申老者之儀候、先年琉球へ御人^{④衆}被遣候時も、歴々不行儀ニ候處、伊賀守・市來八左衛門^{④尉}兩人迄ちぎニ御相勤候故、御褒美共被成候條、弥入念可申と思召之由御説候、此旨被仰渡、早々被罷移尤候、境目へ被召移候衆へハ御加増共候間、其同前ニ於彼地知行可被遣候、先年肥後堺目之儀、彼是御心遣之所ニ而候間、可被罷移由雖被仰出候、病氣ニ付延引之躰ニ候、今度之儀ハ別而被仰出儀候條、違儀なく被罷移候様ニ、急度可被仰渡候、猶三大藏太輔殿可被申達候、恐惶謹言、

卯月廿二日

伊勢兵部少輔

貞昌(花押36)

下野守

久元(花押150)

川上將監様

彈正大輔様

人々御中

「右ノ考」

「限之城天辰親行弟天辰九郎左衛門親時、本田伊賀附衆中ニテ、甌島ニ罷移、伊賀歸府ノ時相付キ府ニ回ル、子孫甌島土天辰覺左衛門ナリ」

(本文書ハ「舊記雜錄後編四」一五八五號文書参照)

401 「」又八郎就煩、別而被入御精候、爲拙者畏存候、旅之儀

ニ候へハ、一段不辨之躰候條、何篇御入魂所希候、昨日又抱瘡能被見知候人へ、猶もミセ申度候、安齋今宵之脈顔色等いかやう被仰候哉、承度候、御返事ニ可示給候、

二月十二日

(伊勢)
貞昌(花押37)

臨也老

玉床下

伊弥九

『加世田士愛德氏藏』

爲御使普賢院去九日上着、從 惟新様 御書致頂戴、誠ニ忝奉存候、仍 奥州様御上洛就御延引、本多佐州御父子、山口殿其外御最負之御衆被成御氣遣候、以先書其段申上候處、尤ニ 思召候由、今度之御書ニ被 仰聞候、安中奉存候、鹿兒嶋へも節々細々申上候處、于今御延引不審千萬奉存候、山口殿御氣遣ニも人々さへ□如此成以次こそ計策可有之候、今度初而駿府江戸被成御參上候間、御前御別儀ハ有御座間敷候、御氣任ニ御入候間、人之申成被 聞召置候ハ、ゆく／＼御爲不可然候由、御詫言にて候、今月朔日又從山口殿御使被進候間、其刻も 奥州様へ世上物沙汰之通申上候、關東にて御遣物として帷子千五百餘調等申候へとも、七月彼地於御下者、秋ニ成候間、帷子など御遣候へん事、成合申間敷と山口殿被仰候、然時者過分之御造作ニも罷成候、定今月之末ニハ可被成御上着候間、七月之中旬比ニハ伏見可爲御打立候哉、何共就御延引御心遣候、罷成儀迄候、相良内藏

『加世田士愛德氏藏』

助從江戸近日被罷上候、彼物語ニも、來春者 兩御所様被成御上洛、内裏之御普請可被仰付ニ相定候由候、左様御座候ハ、正月・二月ニハ又御上洛可有之候、何とそ被成九・十月ニ御下向も候ハ、來春之御用意も大方可被仰付候、とかく被成談合、堯秀駿府へ被成參上候、前かと山口殿も 奥州様いかゞ可思召候哉と被人御念、我々へも御尋候間、向後 奥州様御爲能様御内談申候つる、山口殿も奥底無御座御熟談共候、可御心安候、御使僧普賢院も堯秀御留守居迄申置、近日差下可申候、山口殿への御書者、我等請取申候ハ持參仕候、此旨可預御披露候、恐々謹言、

六月十二日

伊勢兵部少輔

貞昌花押35)

本田源右衛門尉殿

猶々昨日之御禮存程不申得候、以上、

日之昨者次郎四郎殿御振舞、種々御丁寧之儀、誠に難謝盡候、乗佳興長居仕、かつての衆之あくひ推量申、ちらん次郎右從何方歟無正體醉候而來儀故、暮も漸一番打申、藥袋(益体)もなくまけ候てちよろりと逃被申候つる、我等もあしもとよろ／＼にて罷歸申、其まゝ就枕不知東方之白睡眠、大笑々、尤以參御禮雖可申入候、今日殿様へ御客ニ紛冗故、乍存候、萬々期面上候、恐惶不宣、

五月廿五日

伊兵部少輔

貞(花押36)

三左金様

人々御中

猶々吉加江内膳事居屋敷之儀、此前申下候處、其首尾いまた無之由候間、早々可被相渡候、

幸便之間令啓候、

一先書ニ申候歟と存候、我等知行殊外荒候由、いつそや注進候由、其や田掃部殿東長左へ以書狀、知行荒候様ニ其聞得候間、左様ニ無之様ニ可被念入候、我等其元

江罷居候時さへ無其儀候、當時ハ入木入草など、其外夫遣我等居候時之様ニハ有之ましく候間、知行なと荒候事ハ如何之由申遣候處、少も知行不荒由、從兩人度ニ申來候、始良之内小場與申所、人の常ニ行付さる所ニ而候哉、是ハもと／＼より荒候間、誰ぞ移候て召置候ハ、作ひらけ候はんかの由、兩人より被申越候、此儀ハ我等も爲存所にて候、是ハもと／＼より荒候、其外ニ新荒之所少も無之候、無心元候由候、定兩所聞違ニ而も候ハん歟與存事ニ候、猶相易儀候ハ、追而可承候事、

一我等屋敷内番仕候衆、門の明立庭馬場之さうち仕候由候、今之屋敷者殊之外四方馬場たるへく候間、一方之馬場ハ定番衆はゞき候ハんと存候、甚左衛門・官右衛門・孫八などの様成衆、四方ハ掃除候様ニ申付度候、此中も孫八・甚左衛門兩人にて三方ハはゞきたる様ニ、其聞得候、官右衛門なども徒ニ罷居候而、可爲同前候、此元へ召寄候衆ハ、日夜はねおり候處、其元出合候衆

ハ日夜心易候而、掃除以下之儀ハ無緩申付度候間、可
被得其意候事、

一先書ニ、此元小姓共無之候間、竹伊佐・小倉七介・堀
帶刀子共召列候て罷上候様ニ與申候つれ共、頃小姓一
兩人相抱候間、先々右三人のおさなき衆ハ、此節之儀
可被相延候、就中帶刀之儀ハ必可爲無用候、當時ハお
さなき者共多候間、此元賄方六ヶ數候條、可有其心得
候、尙期後音候、恐々謹言、

十一月廿三日

伊兵部少

貞昌判

有川治部左衛門尉殿

八木民部左衛門尉殿

御宿所

405 我等痼氣度と御尋被下辱候、ふせり居申候故、不能對顏
心外候、漸得快氣候間、何様罷出候時分、御禮可申伸候、
仍而昨日於下之御屋敷御成敗者御座候つる處、殿様ハ
不被成御覽由承及候、貴殿御供候哉承度候、誠ニ奇特千

萬成御事、催感涙候、御若ク御座候時分ハ、左様之事ヲ
專ニ被成、御自身御ためし被成儀、世之常ニ而候、尤科
人御成敗之儀者、如何様ニ而茂不苦儀ニ候得共、惣別國
之御主たる人者、御身持被成御重儀肝要奉存候、其人を
御殺候事御覽シ、にくき杯と思召候御心持者、仁道^{無カ}ニて
御座候、仁道ならてハ御國者長久せざると、昔より申な
らハし候、孟子曰、齊之宣王、孟子問曰、王堂上ニ坐シ
給フ、牽牛堂下ヲスクル者アリ、王見之曰、何方ニ行、
對曰、將以繫鐘、王曰、舍之、吾不忍其斃、斃若無罪而就
死地、對曰、然則癘斃鐘歟、曰何癘也、以羊易之不識有
リヤ、諸曰、是必王タルニ足リ、百姓皆王ヲ以愛メリト
スレリ、臣固リ王之不忍コトヲ知レリト云、右ニ如書付
候、齊之國之王牛ノ只今殺サレンヲかなしミ、易羊ヨト
爲被仰を、下々之者共力牛之大ヒナルヲ愛シテ、チイサ
キ羊ニ易よと爲被仰なといひふらすヲ、孟子之被聞
て、王必定牛ヲ羊ニ易よと爲被仰歟と被問タレハ、其儀
なりと被答、孟子是ヲ褒テ仁之道なり、此心ヲ弥被謹た

らハ、國家ひとしく太平可成といはれたる心に、此度殿様之成敗人を御覽不被成して、同意ニ御座候、惣別殿様者御替り被成御座候得共、人を御赦し候事ヲ可被成御好候、是者仁之御心ニて候、人之身上之崩果候事者、輕からぬ儀ニ而候を、誰もく心安なされ候儀、今の世の流行事ニ而候、其故ニその家絶果、眼前ニ候、殿様今の御心持弥相替り不申候ハ、御家長久ニ而、御身の御冥加つよく可有御座候、天道之失者少茂はつれぬと見得候、右ニ書付候孟子之儀、事くとき申事ニ而候得共、唐ニ者鐘を新鑄立候而者、必牛を殺て其血ヲぬり候由、齊宣王之御覽候所を、牛を引て通り候間、いつくに行そと被問たれハ、鐘ニ血ぬらんと答たと也、そこで王之羊に易よと被仰候、是を一向物をしらぬ百姓共者、羊ハ少キ物なれハ、牛ヲをしまれたる様ニ申なしたると也、王之心にハ、只今此牛か殺に行、さてもあハれ成哉と被思て、こらへられぬ程ニ見給、羊ニ易よと爲被仰を、下の者共者心淺くして、あしき様ニいひふらしたるを、孟子

の聞付て宣王ニ被問たれハ、一定牛ヲ羊ニ易よと爲被仰と被答候、宣王ハ何心なく今みし牛の死なん事を悲まれたる迄ニ而ありつるを、孟子者は仁之道也と爲被褒となり、今度殿様之成敗人を御覽不被成茂、定而被殺をあらはれニ思召御覽し兼たる歟と奉察候、貴殿なと不斷御傍江御座候而御咄有之儀候間、ケ様之儀共御聞置候而、自然之時者物語ニ茂被申上候ハ、彌御心得茂可參候哉、昔之事ハ手ぬるき儀ニ而、約ニ者立ぬ様ニ若キ衆者被存候得共、賢人之聖人之被云置たる儀を、今の世にあてゝ見候得者、少茂不違候、聖人・賢人ハ天の使と申候、氣ニも左様ニ可有之候、めてたさのあまり如斯ニ候、恐惶謹言、

十月五日

伊兵部

貞昌

本半兵様

406 昨日者御茶被成御進上、殊ニ隱岐守殿志摩守之御出之

處、首尾克御機嫌宜、玆々重々御満足於拙者迄目出度存候、從是早々祝詞可申入候處、今日者結句被成御出過分至極候、將亦昨朝之初雪に黃門様御詠歌御座候間、奉和尊詠候、爲御慰書付進覽之候、

ふりはへて積れる今朝の白雪ハ誰有明の月そのこれる（唯）

萬木生花不耐看、化工教雪學春戀、「本マ、」豐年瑞色盈天下、賞酒家々無殘所、

殘の字を奉和如斯候、尙期拜顔候、恐惶謹言、

十一月廿七日

伊勢兵部少輔

貞昌

敷三十様

人々御中

407 先日者加治木迄茂御送祝着申候、御地殿様一兩日茂可爲御逗留存申候、兼而御沙汰候つる留置之事共、委可申上置と存候つる、翌日少々御立故あはたしくして、何事茂殘多事而已可有推量候、乍去大形令演說候旨、何茂被念入相調候様ニ入魂賴入、擬々我等十二歳ニ而候つる

や、水俣御陣江立そめしより、肥後・豊後之御陣立、夫々上洛、關東小田原之御陣迄行めぐり、日本平等ニ相治り候而より、亦高麗御征伐之時茂人數ニ渡楫候、殊ニ高麗ハ吳國之故にや、人々氣つまり、いさゝか氣のくるしきなといひ、床ニ伏すかとすれハ、草露の風に散ることく、きのふ見し人けふはなくなり、誠ニ如夢如幻泡顯「幻カ」如露亦如電と觀し、けふの日も命の内ニくれにけりと而已存候つれ共、奇特ニ無恙歸朝し、それより亦上洛、あつまの奥迄茂年ことに行かへり、東漂西泊二十餘年の辛苦ニ而候つれとも、今度之御出陣之御供者一世の大事、夜をぬえず思ひ煩らひ候、致主君之御供哉、武士之戰場儀本意之事ニ候得共、御供之方々皆々若キ衆にて候、薩廣者武篇之譽天下ニ普候得共、御弓箭之氣かりし時、事ニ馴れ覺のありし人々のこりすくなく成果、たま／＼残りある人々茂、麒麟茂老ぬれハ、驚馬にをとれるかたくひニ而、中々供奉之思掛もなく候得者、合戦之駈引無功之人達、無心許氣遣之第一也、亦日本之集りニ而候得者、

色々様々之出合、當末之分別共ニて、御家之大事ヲ可有御談合茂、押立たる功者者無之、誠ニ御事之欠ケ候まゝニ、我等如キ之若輩被任時之職何之分別思慮茂なく、後代之嘲ニ成候半事氣遣之第二也、亦弥九郎ヲはしめ、鎌又七郎殿・弥八殿など其外人の子共達之若キ武者、珍敷事ニあひ、矢竹の心ニまかせ、あぶなき事共可有之と思ひめくらし、かなたこなた心を遣候ハ、當于時手前のをくれ候半事、氣遣之第三也、か様ニ盡心候處、我等留守ニ召置候者共、男女ニよらすゆる／＼令可罷居事不可然由、能々申聞度候、我等宿者麓之事候間、馬場ヲありき候人音ニなりとも、ちと心ものひ候はん、城は猶こそ淋しく仕合候半、され共如右氣ヲ詰候而さへ月日おくり候と思ひやり、淋敷をも思ひおりされ、目出度下向ヲ被相待候得と申度候、擬々人の親の子を思ひ候事、不疎候得共、今度宗可一首をつらね、若雅事を嘆ミて、御側之衆迄進獻候を被成上覽、あへれる事共と被仰出、詩歌御吟味なさるゝ折節御前ニ有命、東郷越前守つかふまつ

るへきよし被仰付候間、感慨ニあまり、我等も一詩和韻候置付候而、宗可江遣度候得共、取まされ候而、此書面ニ而被相送可給候、

思ひ子を旅にやりての跡に身は、

いかにしてかはすまん古郷 宗可

忽聽歌篇數行別然強尙著傷腸功成夕遂赴歸日着錦共待到故郷、

右之和韻誠ニ不對成儀恥入候得共、宗可之歌身ニしミ入、不顧嘲哂、且亦我人ヲいわる候而如斯候、宗可一覽之已後不可有他見候、恐々謹言、

十二月十四日 伊勢兵部少輔 貞昌判

けに／＼失念候東越前殿哥
「るカ」
たのミより宿ゆたかなる思ひ子の
旅は旅にもあらしとをしれ

蜜乗坊

『在花林寺』

猶以伊勢鶴殿もいかにもく／＼かろ／＼と被成よし申
來候而、安堵此事候、將又屏風懸而可相調候間、可
致進覽之候、

今晨預貴札候處、紛冗故不能即報心外候、^{〔本まゝ〕}薩州尊君御

庖瘡早々被成御快氣、誠千喜萬悅多幸々々、弥以御家御

繁榮之驗顯然候、連々御祈禱之奇特、就中庖瘡易被遊候、

秘府共被進置候故、如此思召儘之御事、殊勝々々難伸言

語儀候、定 御曹子様・御姫様も可被遊候間、其御立願

共有之事、内々被得其意、御懇祈此時候、猶期拜顔不詳

候、恐惶謹言、

正月十日

伊勢兵部少輔

貞昌^{〔判〕}

^{〔花押〕}△

▽●伊勢兵部少輔

華林寺

御報人々御中

貞昌

△

『在花林寺』

猶以素統一箱令進獻之候、表書信^{●之}候[●]驗而已、

貴山御入寺之祝詞、早々可申入處、不得間暇之故、思而

不能、延引似怠非怠候、賢察所仰候、[●]抑[●]貴僧之儀、因

御譜代之筋、其地可有注由被[●]仰出候、其趣從御家老中、

具雖可被仰達候、尙以令啓候、然者霧嶋山之儀、御分國

衆之儀^{●者}、[●]不及申、自他國之參詣衆不相絶、群衆之境他

二候間、或御國之政道善惡之沙汰、或他邦取沙汰等被染

心、若題目之子細可有之時者、必御家老衆へ被得内意尤

候、宮匪勤行等之功、右之趣被辟心底、諸事不有緩疎候、

誠貴山之儀、天地開闢以來之靈地被成御住候儀、御名譽

不勝計候、恐惶不宣、

四月十一日

伊勢兵部少輔▽●

貞昌^{〔花押〕}△

霧嶋山

座主御坊

▽●玉揚下

△

『全』

到遠境預御使僧、殊當年初之松茸一籠五本被送下候、別而見事驚目候、今夕客來候間、此一種可爲佳興與大悅此事候、「本マ、●勝」例大ニ御座候、仍去十日 黃門様被成御參詣、御仕合能御満足之由目出度存候、定此地御參府可有之候間、以貴面可申達候、先日も如申進候、弘法八百年忌之詩序致清書、可令進獻候、恐惶謹言、

八月十四日

伊勢兵部少輔

貞昌（花押）

座主様

『在花林寺』

尙と彼屏風御立置候（て）御覽候哉、如何々、貴翁御能筆（之）儀候處、さそや（く）おかしく、御入候（半）と汗願々、以上、

此方（御屋敷）炎上、早と使被成御進上候、即致披露候處、至遠境懇志別而御感悦之到不大形候、爲我等能と

可申旨御意候、扱（ナシ）其夜（と）之體肝をつふし候儀、中々筆舌ニ難申仲次第候、當年者御家御いみ年のよしニて、從春以來於御國、大御祈禱大御願共被成候、此方ニても殊外御祈念共御座候つる、さやうの替事かと、還而各めてたがり申候、就其不思議なる儀候、木村休兵衛尉と申はかせ、火事以前、御屋敷（之）氣、以之外惡たちのほり候間、よく御祈念候へ、御家相果候（程）の御事出來候はんよし申候つれとも、あのつれの者手前（ニ）て、祈念仕たかり候へんたと申、上下共ニ大形ニ挨拶候而御座候處、如此儀共出來候、又御馬廻之内御歴々之御方數多御覽候、火事三日前此方御屋しき中ニ火はしら立候、皆と被成御覽、おそろしき儀との御沙汰にて候つるニ、無程火事出來候、然時（者）今度之火事まことの可爲天火との被仰事候、如何様大（火）之惡難ニ易候儀必定候、御信心（之）寄特候、御前様も五月始比より御血之ミち御起候而、ことの外（御）むつかしく被成御煩、火事之時分御養生最中（ニ）候つる間、弥おもり可申（と）存候處、結

句火事以後よりよく御入候て、〔比〕[●]すきくと御快氣候、かやうの儀もたゝ事ならぬ事候、珍重多幸、恐惶不宣、

暮秋十二日

伊勢兵部少輔[●]貞昌[●]〔花押〕

△

華林寺[●]〔尊〕答

412 『在花林寺』

猶以內に從是可申入與存候處、及御報非本意候、以上

所示之花翰再誦三誦賜無如之也、如來命先月中〔者、當〕所御祈願所江雖御逗留候、依不得間暇、終不能閑談殘多候、乍去一日被寄駕、於草廬龜茶參候而、本懷至極候、仍御祈禱之御札守等、今日[●]有川治部左衛門尉江戶江進上候間、相渡候、虎壽御祈念弥御精誠所希候、將又見事之兩種被懸御意候、於當國者不見申逸物、珍と重と、御厚志不識所謝候、萬縷期再會、閣筆者也、恐惶不宣、

十一月十六冀

霧島

座主御坊 貴答

伊勢兵部少輔[●]貞昌[●]〔花押〕

△

413

『眞本在帖佐氏』

一書申入候、帖佐長右衛門尉殿先年 又八郎様御上洛之時分、夫婦御供被申、 又八郎様御歸國之時分、爰元にて御姫様御誕生ニ付、御乳無之候て、彼内儀被召留、長右殿夫婦子息長と被相詰、當年九年ニ被致歸國候、然者身上之御侘被申候、去年 黃門様此元御打立前、以三原飛驒守殿、長右衛門殿儀別而致御奉公候條、可被付御手候而可承置由被仰出候、最前伊集院筑前守殿内儀同前ニ^{〔忠成力〕}又八郎様爲御乳被召列、筑前守殿ハ廳而知行三百石被給候間、其時分同前ニ御扶持も可有之歟與存候處、其儀無御座、如何敷存候へ共、兎角不申上罷居候、筑前守殿よりハ過分ニ詰重申候間、其御心付も御座候様にて被申事にて、何れ被付御手候はんへと存事候、猶於様子者、其

身可被申達、猶不能詳候、恐惶謹言、

二月廿九日

伊勢兵部少輔

貞昌(花押36)

野州様

喜攝津守様

比宮内少輔様

人々御中

414

『眞本高岡河上氏藏』

猶以木綿足袋三足進之候、ことの外ひへ候まゝ、補

寸志候、以上、

昨日者一段新候鹿被懸御意、即致料理賞味無比類候、頃
玆數候、殊寒中別而藥之由候つる、數日可令服用候、御
懇志難謝盡候、昨日適御出候處、心靜ニ不申承殘多存候、
委細期再會不能詳候、恐惶謹言、

十二月廿六日

伊勢兵部

貞昌(花押36)

川上勘解由長官殿

御旅館

415

御書謹而頂戴仕候、仍從小林殿書狀懸御目候付而、◎(關字)御

詔之旨奉得其意候、委 奥州様へ申上候て、此方御談合

候様子、從是可申上候、道與之書狀も昨日可致進上候處、

失◎念仕候間只今進上申候、此狀ニも別ニ相替事も無御座候、内膳口上ニも同前

之御事候、將又昨日五嶋殿能被遊候、殊外之けいこ有た

る藝とハみえ申候へとも、御手前之儀ハ書中ニ難申上

候、今日我等所へ振舞申候、從 龍伯様、比紀伊迄御内

證御座候て、明日如國府被參候、此狀可預御披露候、恐

と謹言、

五月廿三日

伊勢兵部少輔◎(花押)

貞昌(判)

曾木五兵衛尉殿

416

(本文書ハ三八四號文書ト同文ニツキ省略ス)

417

口上

新納四郎右衛門久辰儀、祖先之戦功ハ勿論、代々家老職

勤來ノ由忠勤神妙ニ被思召、依而中納言様々特ニ大隅國
桑原郡踊三體堂村大鹿倉賜與御沙汰候事、

川上式部大輔
久國花押
寛永十一甲戌年七月十六日

嶋津彈正大弼
久慶花押

新納四郎左衛門尉久辰殿

(或ハ疑文書カ)

尙々竹與殿長々在旅、無恙御供にて歸國、目出度笛
一段あかり候、弥たしなミ候得かし、世簡の藝共新
九郎・長右衛門などのけてハひやうしのきくたるま
てにて候、一味樋口などの藝ふり夢にも不聞候、手
前者しよしにて、はしりたてにて候、むかしに替
大事之事をも如何くしくおしへし世の中に、かし
ら立たる人無之故かと存候、貴老の笛にて一番打度
候、おかしく候、内儀よりも可相分儀候、以上、又
申候、此頭巾時分柄之物候間進候、

幸便候間令啓候、扱もく久敷物遠ニ罷成候、適便宜之
時者公儀事ニ書狀共色々六ヶ敷したゝめ候て、中く存
寄たるかたへも染筆候事も難成候、每便無音心外ニ候、
貴老いか程しはたらけ御入候哉、我等つふりの雪一丈ほ
とつより候、昨日之兵部にて其之むかしこひしやうく
今度入見參、大口なにてわかしく共候つる事、せ
めて語候而慰度候、人の上も我身の上も、よの中の脆さ
不足論候、天子の御上にて當年中ニ、太子御ふた
りニ御別候儀ニ、盛衰滿耳遮眼候、乍去我等者五百年者
先いきてミせ可申候、恐々謹言、

七月廿七日

伊勢兵部判

貴殿御歸國之時分、知行可有御給候由從薩州様被仰出
候、被成打立刻、書狀可被相付候處、貴殿々もとかく不
被仰、何角候而無其儀候、彈正大弼殿・下野守殿以書狀
申入候間、此方ニ而御承之様子、從御方茂被仰入尤候、
爲其一書如斯候、恐々謹言、

六月廿日

伊勢兵部少輔
貞昌

大嶋久左衛門殿
(忠奉)

御宿所

(本文書ハ「舊記雜錄後編」二一〇二六號文書ト同文ナリ)

意有間敷候、恐々謹言、

「正保三年」
四月十六日

顯娃左馬頭
久政(花押 61)

嶋津彈正大弼
久慶(花押 153)

420 (本文書ハ四〇二號文書ト同文ニツキ省略ス)

421 (本文書ハ四〇三號文書ト同文ニツキ省略ス)

422 (張紙)
所持主

相徳伊右衛門

以上

先月十一日之御日付にて、江戸御奉行衆之御奉書、態以
早飛脚被差下候間、相寫、地頭衆へ相渡候へ共、重々申
越候、弥左様之趣、無油斷可被申付候、去年之 仰出ニ少
も相替儀無之候條、可被得其意候、今度 御兄弟衆御順
見候間、緩之所者直ニ可被仰上候、其心得尤ニ候、聊疎

伊集院

神川

日置

帆之湊

吉利

永吉

伊作

田布施

阿多

加世田

小松原

小浦

片浦

諸所

暖衆中

(本文書ハ「舊記雜錄追録」六八號文書ト同文ナリ)

423
□_(張紙)
持主

相徳



(本文書ハ二三號文書ト同文ニツキ省略ス)

年間不詳

附
舊記雜錄
卷六

424

薩摩國御家人揖宿平四郎忠秀與（顯桂）桂顯平太忠繼、論申開門神領間事、豐後三郎左衛門尉相共召決、兩方可被注申給候也、謹言、

七月廿七日

武藏守（御判）
（花押）

豐後四郎左衛門尉殿

御返事

425 〔以上略〕

顯桂三郎

忠永
顯桂・指宿・知覽・給黎・薩摩郡等知行之

忠方

顯桂本地頭

忠光

指宿本地頭

忠元

號太郎
指宿本地頭

忠秀

平四郎
指宿郡司

忠成

郡司小次郎

忠連

初宗忠
郡司又次郎

忠篤

彥鸞丸
指宿郡司彥次郎入道成榮

正忠

女子
郡司

師大

忠合
近江守

賴忠

426 就今度國中亂惡、長唯別而無二ニ申合候、爲其辻同名式

部少輔永々以在府日夜辛勞候、仍敵陣所々敗北候之條、

歸宿之通申候、連々入魂可爲祝着候、恐々謹言、

二月五日

大平左京殿

義宗（花押）
253

427 天草越前押領就仕形、今度難所之渡海差渡早速之注進之

働、絶言語處、尤忠節不輕、後日ニ可有其恩賞也、

八月七日

嶋津常陸判

大平藤太殿

梅田八千殿

428 「野邊文書」

(花押)

淨光明院領日向國柏原財部兩郷收納使職事、所被仰付也、御年貢以下無懈怠可令執沙汰給之由所候也、仍執達如件、

七月四日

(幸雅カ)
從儀師爲惟

謹上 日野祖賢御房

429 「全」

態令申候、從先度梁瀬屋しきの事侘言御申候、致披露候、御まいらせ候、早々御移候て御奉公候へと可申旨候、兼

又小原ニ御賣候百姓、以次披露申候、悉賣免買免ハ御計

候ヘ共、御舍弟なども御用ニ御立候間、か様の儀をおほ

しめされ、去年以來兎角不被仰候、是をも新恩ニ御扶持

候よし申せと候、爲後日細々書付進之候、恐々謹言、

三月十八日

佐土原八郎兵衛

祐量(花押116)

荒武右京亮

宗道(花押15)

落合淡路守

兼仲(花押71)

長倉能登守

祐省(花押200)

野邊讀岐守殿

430 「全」

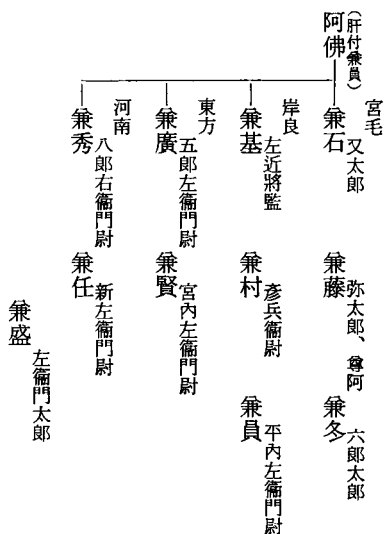
十三日のよきりあひの候て、まこ三郎たちうちにあひ候、めてたく候、ことにてなんともおハす候、めてたく候、よろつ又くかしく、

「不分明」

(本文書ハ一二八號文書ト同文ニツキ省略ス)

『岸良氏文書』

肝付郡辨濟使職系圖



『岸良氏文書』

(花押55)

左近將監兼元參申之旨候、所詮、爲舍弟身、可隨嫡子之命之由申候、元自於舍弟、可有憐愍之計之由、元自被載

御下知了、存其旨、無乖違候様、可被相計之由早々、仍執達如件、

九月八日

正賢

肝付郡辨濟使殿

『岸良氏文書』

下 嶋津庄大隅方肝付郡内

可早以兼基次男左兵衛尉伴兼村、岸良村田畠山野狩倉等令相傳知行事、

右件村者、兼基親父阿佛所帶也、而兼基依爲子息讓得之早、爰兼基未分死去之處仁、^(筆カ)難成給安堵御下文於嫡子得房丸、又以死去早、爰兼村帶次第調度證文等申之間、所宛行也、有限於御年貢者、無懈怠令勤仕之、爲兼基遺跡^跡可令領事之狀、所仰如件、

「年間ナシ」

『岸良氏文書』

437

『岸良氏文書』

何條御事候哉、抑七月中にかくわきまいらせられ候へき
むねうけ給候き、いまにいたルまでそのきなく候條、返

岸良村辨濟使殿

御返事

四月十二日

行惠(花押95)

436

『岸良氏文書』

去年十二月廿日御狀今年三月廿六日到來、委細拜見了、
先御在所焼失事返々無物駄存候、又御約束の行騰(談)皮者懸
給了、御忘も候へて給候事、眞實悦入候、委細事者此使
者申含候了、定語申候らん、恐々謹言、

岸良村辨濟使殿

正月廿一日

行惠(花押95)

何條御事候哉、兼又去年行惠他行之跡【本ノマ、】伯耆々御年貢無沙
汰之由、被書下候ける之條、以外事候、於當年分者、以
三月中可有其沙汰之由、所申候、恐々謹言、
【可カ】
【恐々謹言】

438

『岸良氏文書』

とおとろきおほしめされ候、早々さたしまいられ候へく
候、たしかのひんきもて可申候也、恐々謹言、

十一月六日

榮叔(花押62)

肝付郡岸良辨濟使殿

これは私申候、御上洛の時申上候むかはきかわの
事、便宜の故御たつね候て可給候、

御下向之後、何條御事候哉、不審無極存候、抑年來御服
所御奉行候つる、御方去七月廿八日御他界御坐候、公私
悲歎可被察申候也、雖然不替日々、比御舍弟御方御奉行
被中間、御領以下無違目候、就其候て者御服所始て御奉
行之故者、各任料を御沙汰候、定御存知事候覽、急々可
可令沙汰置給候也、爲御催促御使孫五郎男を被下候、又
春御上洛之故被請申用途事、雖少分候、同可令沙汰置給
候也、此御使者只爲催促へかりにて候、それにて御年貢
など請取候事へあるましく候、御使上洛用途、同可有其

『入来院氏文書』

進上 左衛門殿

沙弥了俊

進上 左衛門佐殿

澁谷五郎重頼申本領安堵事、可有申御沙汰候、於薩摩國隨分致忠節候間、恩賞事可申行候上者、本知行事不可有相違候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、
(至徳二年カ)
八月十日 沙弥了俊(花押49)

『入来院氏文書』

『包紙』
澁谷清式五郎殿

慈冬

御心へのために申入候、諸事重々申候へく候、恐々謹言、
(至徳二年カ)
八月九日 慈冬(花押118)
『惣テ本ノマ、寫ス』
澁谷清式五郎殿

澁谷五郎殿

御故事

御安堵事名和執申候間、則令注進候、同代官齋藤みの入道方への内狀進^{①之}候、仰候ハ、〔御〕方ニ取申へく候、抑薩州事、伊久振舞ニよりて、今月來月中ニ可^{②致}〔被〕沙汰候、連々名和ニ御談合候へく候、雖何時一勢可差遣候、將又其後御一家人^③如何御籌策候哉、始中終伊久かな^④〔れ〕ての御軍役ハあるましけに候間、御家のためうたて^{⑤ナシ}〔し〕く存候、たとひ伊久不儀候ハすとも、我々か子共うちころし候ハんと仕候時ハ、一度ハ御合力ニも可預候ニと恨入て候へとも、あなかに伊久をうしなひ候ハんと不存候間、人々の内心を存ち候て候間、このたひも以事書召出候へとも、いかさま京都の御ためニよるへく候間、所詮、たゞおのれ／＼のふるまひをたしなみ候て、上の御ため、國のため、不儀なきまで〔存〕候ニ、御同心候間、弥ありかたくなのミ入候、恐々謹言、
(至徳二年カ)
八月十日 了俊(花押49)

『包紙』
澁谷五郎殿

御返事

了俊

445

『入來院氏文書』

△
▽②

澁谷五郎重頼申本領安堵事、舉申候、可被執申候、一族中ニも少く猶野心之輩候へとも、此仁一兩人ハ、自最初當方同心候間、如此自訴事也、別而御沙汰候者、不奉不忠候仁等見まねふへく候間、尤御感候へきにて候、能く申さるへく候、先日之事書の隨一ニて候間、如此とり申候也、恐々謹言、

(至徳二年カ)

八月十日

了俊(花押49)

齋藤みの入道殿

齋藤みの入道殿

『了俊』
了俊

446

『入來院文書』

畏申上候、澁谷五郎重頼申本領安堵事、入來院之内清色

郷北方、中村郷楠本村、市比野名地頭職、倉野村事、無相違申御沙汰候者、畏入候、以此之旨可有御披露候、恐惶謹言、

(至徳二年カ)

二月七日

(今川)
宮内大輔三雄(花押在判)

進上周防右京亮殿

『包紙』
進上

周防右京亮殿

宮内大輔三雄

447

『入來院氏文書』

其方事、此間久御注進なく候事、心も^②なく存候、抑愚身早々罷越候て、力をつけ申候へく候處、高久勢をあひまち候間、其儀なく候、明日も勢着津候ハ、早々参へく候、

一自大手かん狀一通進候、其後事ハ萬事御(達越)^①、たのみ入存候、下村殿ニも狀進之候へく候へとも、いて舟

にて、いそぎ候間、同事に申候、諸事期後信時候、恐々謹言、

『入来院氏文書』



進上 周防右京亮殿

畏申上候、抑澁谷五郎重頼申、當知行分安堵之事、無相違様、御申御沙汰候者、畏入候、殊更此時分被致忠節候之間、悦入候、便宜之時者、京都可有御申候、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、
(至徳二年カ)
卯月廿一日 宮内大輔三雄(花押50)

『入来院家文書』

『上包』
清色五郎殿

三雄

二月十一日

三雄(花押50)

清色殿

『此文書讀へからす本のまゝ寫置候』

『入来院氏文書』



『包紙』
澁谷一族御中

了俊

新春御吉事申籠候了、幸甚々々、抑兩國事并嶋津進退事、自京都御使御教書等成下候間、此時兩人事可定候、其ほとへ、名和在陣候へは、毎事御同心候て御談合候て、事のやう御らん候へく候、兼又仰合らるへき事候とて、了俊一身可參候由、仰下されて候ほとに、當陣事、九州事等よくくしたゝめ候て、一兩月のいとまにて、可上洛候うへへ、御方の人々の御ため中々御悦たるへく候、よく御代官を申候て、公方にも可申入候也、それニ付候てくハしく安國寺ニ申て候、きこしめし候へく候、恐々謹言、
(至徳三年カ)
正月六日 了俊(花押49)
澁谷一族御中

去正月十九日注進狀今月廿二日到來、披見候了、兼又同

心人々相共急速肥州ニ打越、可被致忠節候、其功候者、

可被抽賞候、弥廻計策、面々同心可被致忠候、恐々謹言、

二月廿三日

了俊(花押49)

澁谷庸五郎殿

『包紙』

澁谷庸五郎殿

了俊

451

『入来院氏文書』

▽△

△御

去月十八日〔之〕注進狀、委細承候了、抑菊池肥前守以下

凶徒、於蟻打悉加對治候了、就其肥後對治事、不可有幾

候、其堺事、今河兵部大輔相共、被致忠節候者、可目出

候、然者本當知行事、不可有相違候、每事期後信候、恐

々謹言、

三月廿一日

了俊(花押49)

澁谷庸五郎殿

『包紙』
澁谷清數庸五郎殿

了俊

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二三七二號文書ト同文ナリ)

452

『入来院氏文書』

▽△

△

時分可然候上者、不日今河兵部大輔相共可致忠節候者、
本當知行等、不可有相違候、急々可有現形候也、恐々謹
言、

(永和三年)

三月廿一日

了俊(花押49)

澁谷清色庸五郎殿

(本文書ハ「舊記雜錄前編」二三七三號文書ト同文ナリ)

453

『入来院氏文書』

▽△

△

嶋津馳越牛屎致合戰之由承候了、御方同心人々相共有御
談合、可被致忠節候、此方事近日可有落居候、其左右自

455

『入來院文書』

不審之處、委細承候、喜入候、豐前合戰御方討勝候、八山少輔以下討取候、其後、筑前合戰ニ不慮之儀候、雖然重致出陣、即對治不可有程候、當陣事ハ可被心安候、相良近江合戰最中候、早々御合力之御忠之專一候、相構ニ不可有御緩怠候、不日御加彼陣候て、被致忠節候者、目出候、恐々謹言、

卯月廿日
清敷殿
了俊(花押49)

454

『入來院氏文書』

是可申候、先其間、相良近江守前賴合戰最中之由申候上ハ、弥可有御合力候、御忠可爲專一候、恐々謹言、

卯月廿一日
了俊(花押49)

澁谷庸五郎殿

456

『包紙』
澁谷清敷殿

了俊

澁谷清敷殿

四月十三日

了俊(花押49)

御申候事したゝめ進候、目出候、抑愚身渡海事、自京都御使重て下向候、待申候、其間まつ八代退治候、是又其方御合力たるへく候歟、水俣ニも一勢急ニ遣候、追て愚身ハ何時も可越候、每事名和方ニ申遣候、定可申候哉、恐々謹言、

御音信悦入候、抑嶋津爲勢仕打寄之由承候了、現形候者、定可有一勢可有渡海候歟、八代事一途申子細間目出候、近日可有左右候、左様事、其方勢仕於今延引候、子細委入道方可申候歟、恐々謹言、

卯月十三日

貞臣(花押48)

澁谷清敷殿

御返事

〔包紙〕
澁谷清敷殿

御返事

貞臣

457

先日兵部大輔下向之時御請文、今月二日到來、目出候、

就其重兵部大輔方ニ委申遣候、定可申候や、其方事一向

憑存候、殊更大隅薩摩事、愚身可拜領上者、別而御志〔可〕^{〔可〕}

喜入候、御下文近日定可到來候、早ニ可入見參候、將又

致广合戦一途候者、定大將も面ニ御同心ニ國中可打出候

〔上〕、每事可有御談合候、恐ニ謹言、

〔永和二年ニアタル〕

七月五日

了俊〔花押49〕

澁谷清敷席五郎殿

458

〔入来院氏文書〕

伊久可參陣之由、申候間、成御教書候〔之〕處、結句長尾

城ニ馳向候云々、御一族達多分御同道之由聞候、無念候、

先立ハ嶋津か下ニてハ、軍役なと御つとめ候ましきと、

承候之間、兵部大輔も心えて候ニ、如此〔様〕^{〔様〕}、かれらか

下ニて、凶徒御與同失本意候、如此候者、伊久か事、京

都の御免よも候ハしと存候、面々御事、嶋津等か故ニ、

御一家をうしなハれ候ハん事ハ、就惣別無念存候、今時

御現形候ハてハ、不可有所期候、いそぎ兵部大輔一

所ニ御馳加候〔之〕者、可目出候、不然者、向後すくにと

かく承候事候まししく候、恐ニ謹言、

九月四日

了俊〔花押49〕

澁谷清敷殿

〔包紙〕

清敷殿

了俊

459

〔入来院氏文書〕

氏久・伊久令參陣、可致忠節之由申候、仍起請文を進候

460

『入來院家文書』

▽②

△

今度御參陳事、同事ながら殊ニ目出存候、於向後者別而可申承候、弥御一家中人と事、可有御張行候、御勢數も^{『本ノマ』}ことに御加る間弥悅入候、入見參可申候、恐と謹言、

九月廿四日

了俊(花押49)

澁谷五郎殿

澁谷五郎殿

了俊

461

『入來院家文書』

之上者、安堵事申行候、就其御一族達御同心に御參陳事承候、殊ニ目出候、久庵主下向候、急と御同道可目出候、其子細以事書申候、恐と謹言、

九月十六日

了俊(花押49)

澁谷清敷殿

(本文書ハ「舊記雜錄前編二」三五六號文書ト同文ナリ)

462

(本文書ハ二三〇號文書ト同文ニツキ省略ス)

爲御方可被致忠節之由其聞候、殊以目出候、定京都御教書可到來候歟、一向憑入候、何樣就御注進重可申候、於此堺事者、不可有子細候、可御心安候、恐と謹言、

十月十九日

了俊(花押49)

澁谷庸五郎殿

463

『入來院家文書』

此間連と申承候條、日來本望併令満足候、抑荒河事、適愚身始而申沙汰仕事にて候へハ、先彼在所御知行候者、外聞實可目出候、此外承候在所等事、及所存、總州方へ可申候、尚と八幡・天神も御照覽候へ、於身懸浮沈可申候、少も不可有等閑之儀候、此子細御使節申入候之間、定可被聞召候哉、恐と謹言、

八月四日

(市來) 家親(花押44)

『入來院家文書』

▽②
△

年首慶賀、自他雖申籠候、尙以不可有盡期候、幸甚々、抑雖無何事候、細々可申通之處、路次不輒候之間、乍存候、更々非等閑候、兼又定被聞食候哉、相良并嶋津又三郎以下凶徒、可打越當方之由、其聞候之間、用意最中候、然者其堺計策事、被差寄候者、三ヶ國對治不可廻時日候、早々可有談合候、此合戰打勝候者、即可馳越山西候、入見參、諸事可申〔付〕候、連々奉可申候、恐々謹言、

正月廿五日

直忠〔花押189〕

澁谷左馬助殿

御返事

澁谷左馬助殿

御返事

直忠

『入來院氏文書』

▽②
△

嶋津事、公方御使一見候上ハ、急々可退治候、一勢合力事御申候上者、必々可遣候、御待候へく候、面々御運ひ〔く〕かるへき事此時候哉、委細隱岐参り候時申候了、勢事ハ重如此御申候間、いそぎ可進候、又内々承子細候間、宮里地頭職事預申候、御下文ハ必々可申行候也、御一家の御かたくとハ御同心候間、就是非候て、御一家中の事ハ、一みち御面目候やうニ天神も御らん候へ、申行候へく候、そのよし重御談合候へく候、しかしながら名和をそれニ進候事ハ、たゞ御一家の御ためにて候、八幡も照覽候へ、僞申さす候上ハ、自今以後我々事ハ御一家をたのみ存候也、恐々謹言、

十月廿九日

了俊〔花押49〕

澁谷左馬助殿

御返事

『包紙』
澁谷左馬助殿

御返事

了俊